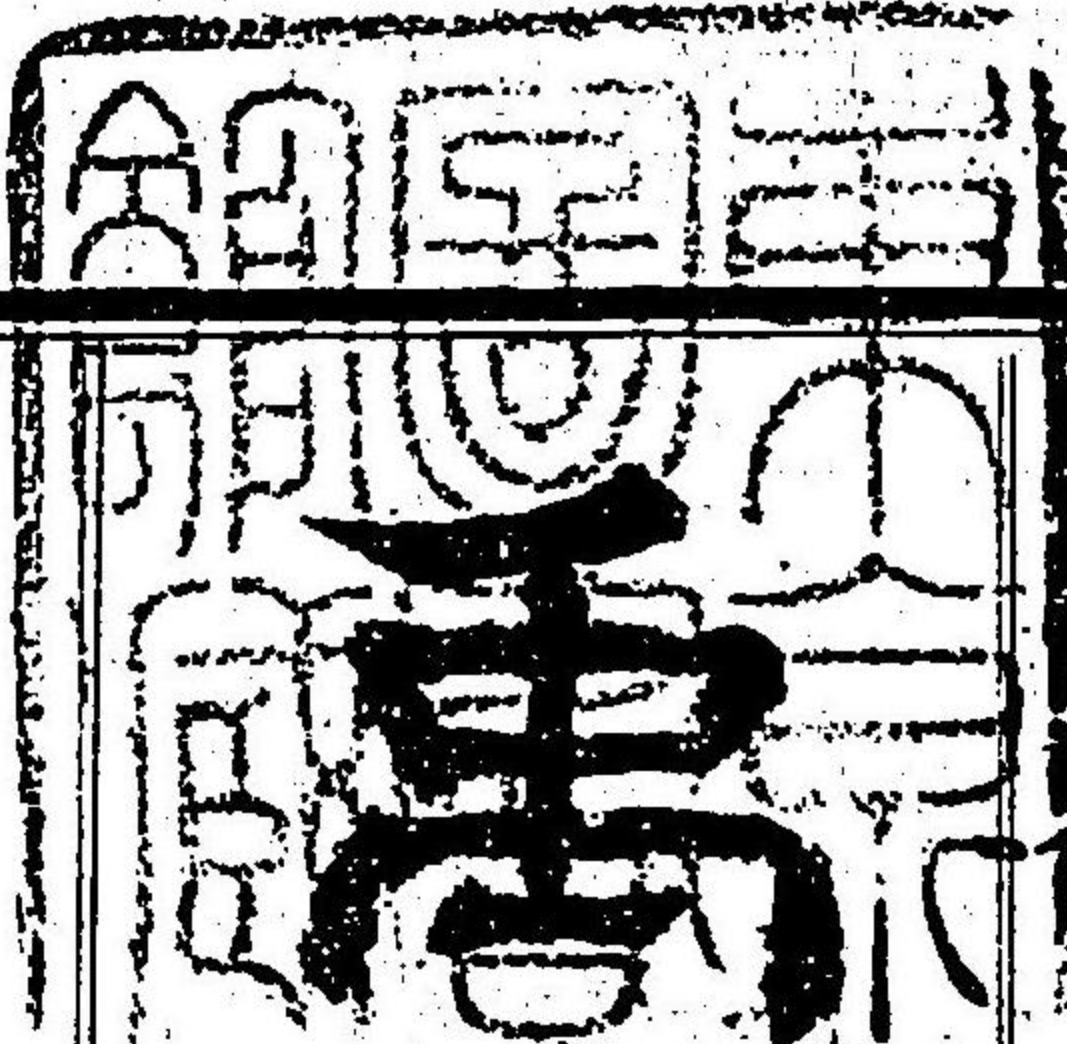


2E60

56  
22

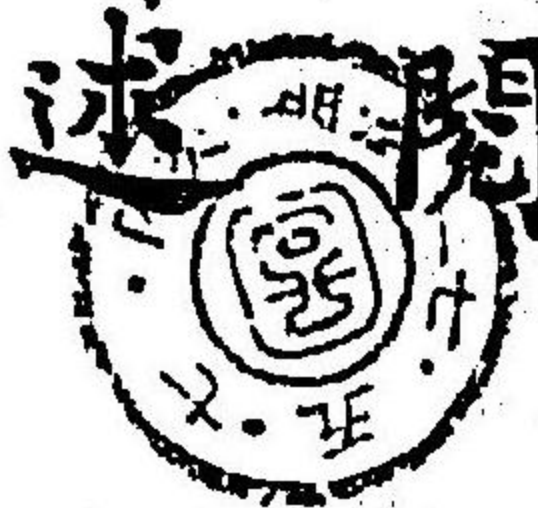


# 高氏小兒科學

第一卷

醫科大學小兒科教授醫學博士弘田長  
 前醫科大學小兒科助手醫學士近藤常次郎  
 醫科大學小兒科助手醫學士伊東祐彦  
 醫科大學小兒科醫員長澤 亘

校閱 譯



明治二十七年五月

## 緒言

小兒科學ハ新シキ學ニシテ殊ニ吾國ニ於テハ之ヲ傳ヘテヨリ僅ニ數年ヲ出テズ是故ニ又廣ク世ニ行ハレザルハ甚タ遺憾トスルトコロナリ抑小兒ハ其解剖生理ノ關係ヨリ病理衛生ニ至ルマデ大ニ成人ト異ナルニヨリ小兒ヲ治療スルニハ是非トモ小兒科學ヲ修メザルベカラズ小兒科學ニ通ゼズシテ小兒ヲ診察治療スルハ最モ至難ノ業ニシテ勢成人ト比較對照シテ姑息ニ流レザルヲ得ザルナリ是故ニ小兒科學ノ發達セザル邦國ノ醫家ハ小兒ヲ診察治療スルヲ以テ難中ノ難ナリト公言スルニ至レリ古代ハ措テ問ハズ今世醫學ノ駁々トシテ進歩スルノ時ニ於テ猶ホ小兒ハ治シ難シト云ヘル古言ヲ繰返スアラバ實ニ醫學社會ノ不面目ト謂ハザルヲ得ズ是故ニ今代ノ醫家ハ大ニ小兒科學ノ修メザルベカラザルヲ感シ之ヲ講習セント欲スルモノ日一日ヨ

リ多シ而シテ之が良書ヲ得ント希望スルハ必然ノ理ナリトス  
 小兒科學ノ書中著名ナルモノハゲルハルト氏ノ叢書ヘノホ氏ノ講義  
 其他フホーゲル氏ウンゲル氏、ブシオー氏、バギンスキー氏等ノ著書ナ  
 リ吾國ニ於テハ瀨川昌耆氏纂譯小兒病各論、高阪駒三郎氏譯鳳氏小兒  
 科全書、戸田成年、野口美之助兩氏共纂幼科全方及ビ恩師弘田博士ノ兒  
 科必携等アリ

然ルニ今又吾等が特ニ撰擇シテ獨乙國オストツフ大學醫學部教授ド  
 クトルヨツト、ウツフェルマン氏ノ著書ヲ翻譯スルニ至リタルハ聊カ  
 微意ノ存スルアレバナリ抑モ同氏ノ書タルヤ昨紀元千八百九十三年  
 初メテ發刊セラレタル新小兒科書ニシテ最モカラ小兒病總論ニ盡シ  
 タレバ總論ヲ熟讀玩味スルニ於テハ自カラ小兒病ノ全體ニ通シ小兒  
 ノ生理病理ヨリ保育、看護、治療、投藥ノ方法ニ至ルマテ必ラス大ニ得ル  
 トコロアルベシ語ヲ換テ之ヲ言ヘバ小兒科學ノ特色トスルトコロ即

チ小兒科學ノ専門學タル所以ハ是總論數篇ニ於テ知悉スルコトヲ得  
 ベシ是最モ着目スベキ所ナリ次ニ小兒ノ治療ハ成人ト大ニ方針ヲ異  
 ニシ專ラ攝生、保育ノ點ニ於テシ藥劑ノ如キハ其必用ニ非ザルヨリハ  
 與ヘザルモノトス故ニ本書ハ各論ニ至リテ深ク其點ニ注意シタレバ  
 讀者ノ益ヲ得ルコト甚ダ大ナルモノアラシキ其他處方ニ就テモ分量用  
 法等ヲ明瞭ニ細述シタリ此如ク簡明ニ小兒科學ノ特色ヲ顯ハシタル  
 ハ他書ニ於テ見ルベカラザルトコロナリ  
 是故ニ吾等ハ喜ンテ是書ヲ翻譯シ以テ世ノ醫家諸君ト益ヲ分タント  
 欲ス今本書ヲ發行スルニ當リ聊カ微意ヲ記スルコト如此シ

明治廿七年五月

譯者 識

ケトレ氏小兒成長表

年月	體重		身長	頭圍	胸圍
一ヶ月	4000g			33-35Cm.	31Cm.
二ヶ月	4700			初生兒	
三ヶ月	5350				
四ヶ月	5950				
五ヶ月	6500	ア			
六ヶ月	7000	シ			
七ヶ月	7450	ホ		44	43
八ヶ月	7850	イ			
九ヶ月	8200	氏			
十ヶ月	8500	調			
十一月	8750	査			
十二月	9000		69,8		
二ヶ年	11340		79,6	47,5	47,
三ヶ年	12470		86,7		
四ヶ年	14230		93,0		
五ヶ年	15770	男	98,6		
六ヶ年	17240		104,5		
七ヶ年	19100		—	49,5-53	67,9
八ヶ年	20760	性	116,0		
九ヶ年	22650		122,1		
十ヶ年	24520		128,0		
十一ヶ年	27100		133,4		
十二ヶ年	29820		138,4		

最モ我國小兒ノ成長ニ近キモノ

讀者此書ヲ繕クニ當リテ須ク左ノ數件ヲ參照ス可シ  
 我國初生兒ノ體重身長頭圍胸圍ハ未タ確定セサルモ當時ニ至ルマテ  
 ノ調査ニヨレハ大約其平均數左記ノ如シ

體重	男 二八八四、五瓦	女 二七九七、〇瓦
身長	男 四八、八仙迷	女 四八、一仙迷
頭圍	三二、六一仙迷	
胸圍	三一、〇一仙迷	

煉乳稀釋ノ標準

一ヶ月	二十二倍	七ヶ月	十七倍
二ヶ月	二十一倍	八ヶ月	十七倍
三ヶ月	二十倍	九ヶ月	十六倍
四ヶ月	十九倍	十ヶ月	十六倍
五ヶ月	十八倍	十一ヶ月	十五倍
六ヶ月	十八倍	十二ヶ月	十五倍

藥劑ハ本書ノ記載量ヨリ少シク小量ニ用ユルヲ要ス

ウツフェルマン氏小兒科學

總目錄

第一卷

總論

第一章 健康小兒

- 消化
- 呼吸
- 血液循環
- 尿分泌
- 皮膚ノ作用
- 體温
- 睡眠
- 神經系及精神ノ官能

總目錄

骨及筋肉

第二章 小兒健全學ノ原則

營養

口及齒ノ保護

皮膚ノ保護

住居

骨及筋肉系統ノ保護

五管器ノ保護

精神的生活ノ保護

第三章 小兒疾病通論

症候學及診斷法ノ一般

第四章 病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

第五章 小兒ノ疾病統計

第一編 全身病

第一章 孱弱

第二章 貧血

第三章 萎黃病

第四章 白血病

第五章 脂肪過多症

第六章 佝僂病

第七章 腺病

第八章 梅毒

第九章 血斑病

第十章 佝僂質私性紫斑病

第十一章 敗血病

第十二章 出血質病

第十三章 尿崩病

附錄 中毒

第二卷

第二編 消化器ノ疾病

甲 口腔疾病

第一章 生齒困難

第二章 ベドナル氏亞布荅

第三章 加荅兒性口內炎

第四章 潰瘍性口內炎 口內腐敗

第五章 齶口瘡

第六章 顔面水瘡

乙 唾腺ノ疾患

第一章 耳下腺ノ腺衝

第二章 流涎

第三章 蝦蟆腫

丙 扁桃腺口蓋及咽頭ノ疾病

第一章 扁桃腺腺衝

第二章 實扶埤里性扁桃腺及口蓋腺衝

實扶埤里性咽頭炎

第三章 淋巴性咽頭環ノ實質增殖

第四章 懸壅垂ノ延長

第五章 咽頭後壁膿腫

第六章 咽頭腺腫

第七章 食道炎

丁 胃及腸ノ疾病

第一章 消化不良

第二章 初生兒メレナ

第三章 圓形潰瘍

第四章 胃粘膜糜爛

第五章 胃軟化症

第二卷

第二編 消化器ノ疾病

甲 口腔疾病

第一章 生齒困難

第二章 ペドナル氏亞布荅

第三章 加荅兒性口內炎

第四章 潰瘍性口內炎 口內腐敗

第五章 齶口瘡

第六章 顏面水瘤

乙 唾腺ノ疾患

第一章 耳下腺ノ腺衝

第二章 流涎

第三章 蝦蟇腫

丙 扁桃腺、口蓋及咽頭ノ疾病

第一章 扁桃腺腺衝

第二章 實扶埤里性扁桃腺及口蓋腺衝

實扶埤里性咽頭炎

第三章 淋巴性咽頭環ノ實質增殖

第四章 懸壘垂ノ延長

第五章 咽頭後壁膿腫

第六章 咽頭腺腫

第七章 食道炎

丁 胃及腸ノ疾病

第一章 消化不良

第二章 初生兒「メレナ」

第三章 圓形潰瘍

第四章 胃粘膜糜爛

第五章 胃軟化症



- 第六章 胃擴張症
- 第七章 急性胃腸加苔兒慢性胃加苔兒
- 第八章 急性滲胞性胃炎
- 第九章 脂肪下痢
- 第十章 慢性腸加苔兒
- 第十一章 一般「アトロフィー」
- 第十二章 腸室扶私
- 第十三章 亞細亞虎列刺
- 第十四章 盲腸炎及盲腸周圍炎
- 第十五章 赤痢
- 第十六章 結核性腸潰瘍
- 第十七章 腸管壘嵌
- 第十八章 直腸脫
- 第十九章 直腸「ポリープ」

- 第二十章 習慣性便秘
- 第二十一章 鼓脹症
- 第二十二章 腸寄生蟲
- 戊 肝臟ノ疾病
  - 第一章 初生兒黃疸
  - 第二章 加苔兒性黃疸
  - 第三章 肝臟腺質ノ疾病
- 巳 脾臟ノ疾病
- 庚 腸間膜腺ノ疾病
- 辛 腹膜ノ疾病
- 附錄 臍ノ疾病
  - 第一章 膿瘍及潰瘍 海綿腫 臍實扶淫里 壞疽
  - 第二章 臍出血
  - 第三章 臍動脈炎及臍靜脈炎

第四章 臍脫腸

### 第三卷

#### 第三編 呼吸器ノ疾病

##### 甲 鼻

第一章 鼻加苔兒

第二章 「チチエナ」

第三章 格魯布

第四章 實扶埤里

第五章 「ボリ」

第六章 異物

##### 乙 喉頭、氣管、肺組織及肋膜ノ疾病

第一章 喉頭炎、假性格魯布

第二章 格魯布、義膜性喉頭炎

第三章 百日咳

第四章 聲門痙攣

第五章 夜間刺激性咳嗽

第六章 氣管枝腺疾病

第七章 胸腺疾患

第八章 神經性喘息

第九章 急性大氣管炎及氣管枝炎

第十章 毛細氣管枝炎及肺小葉炎

第十一章 格魯布性氣管枝炎

第十二章 格魯布性肺炎

第十三章 慢性氣管枝炎

第十四章 氣管枝擴張症

第十五章 慢性肺炎

第十六章 肺萎縮症

第十七章 膿胸

第四編 血行器ノ疾病

第十八章 肋膜炎

第一章 心悸亢進

第二章 ハゼドト氏病

第三章 心内膜炎

第四章 心外膜炎

第五章 心筋炎

第六章 心筋脂肪變性

第七章 心臟ノ肥大及擴張

附錄 先天性心臟疾患 先天性「チャノーゼ」

第八章 淋巴腺疾病

第五編 泌尿器ノ疾病

甲 腎臟

第一章 初生兒ノ尿酸イソハルソト

第二章 腎臟水腫

第三章 腎臟充血

第四章 腎臟炎

第五章 腎實質炎

第六章 急性化膿性腎炎

第七章 萎縮腎

第八章 腎盂炎、腎盂炎兼腎實質炎

第九章 腎臟ノ澱粉變性

第十章 腎石

第十一章 アリソン氏病

乙 膀胱、尿道、陰ノ疾病

第一章 膀胱炎

第二章 血尿

第三章 尿利頻迫

第四章 尿閉、膀胱痙攣

第五章 尿石

第六章 夜間遺尿

第七章 早期月經

第八章 陰門實扶瑤里

第九章 白帶下、陰門腔炎

第十章 尿道炎

### 第四卷

### 第六編 神經系ノ疾病

第一章 腦充血

第二章 腦貧血

第三章 腦底腦膜炎

第四章 急性單純腦膜炎

第五章 流行性腦脊髓膜炎

第六章 慢性腦水腫

第七章 腦髓炎

第八章 腦硬化症

第九章 腦出血

第十章 先天性關節強直

第十一章 腦性麻痺

第十二章 腦腫瘍

第十三章 脊髓膜炎

第十四章 脊髓炎

(イ) 脊髓前角炎、小兒脊髓麻痺

(ロ) 急性脊髓炎

第十五章 脊髓癆

第十六章 脊骨拔裂

第十七章 急痲

第十七編

- 第十八章 癩痢
- 第十九章 筋搖弱
- 第二十章 「テタニー」
- 第二十一章 牙關緊急及破傷風
- 第二十二章 獸頭瘡
- 第二十三章 舞蹈病、小舞蹈病
- 第二十四章 大舞蹈病
- 第二十五章 歇斯的里
- 第二十六章 半面痛
- 第二十七章 夜驚
- 第二十八章 精神病

附錄 進行性小兒筋萎縮

第十七編 傳染病

- 第一章 初生兒產褥傳染病

第十八編 皮膚ノ疾病

- 第二章 急性脂肪變性
- 第三章 初生兒眼炎
- 第四章 結核
- 第五章 麻疹
- 第六章 猩紅熱
- 第七章 薔薇疹
- 第八章 水痘
- 第九章 真正天然痘
- 第十章 發疹室扶私
- 第十一章 流行性寒胃「インフルエンザ」
- 第十二章 ワイル氏病
- 第十三章 急性癩麻質私
- 第十四章 間歇熱

第九編 學校病

- 第一章 潮紅斑
- 第二章 丹毒
- 第三章 濕爛
- 第四章 濕疹、小膿胞疹、膿胞
- 第五章 天泡瘡
- 第六章 帶狀水泡疹
- 第七章 苔癬
- 第八章 蕁麻疹
- 第九章 痒癩疹
- 第十章 初生兒鞏硬病
- 第十一章 皮膚變硬症
- 第十二章 皮膚水腫
- 第十三章 多發性假性癩瘡

- 第一章 近視
- 第二章 脊椎側彎
- 第三章 習慣性頭痛
- 第四章 習慣性鼻出血
- 第五章 神經病及精神病
- 附錄 甲狀腺腫

ウエフェルマン氏小兒科學總目錄終

ウツフェルマン氏小兒科學第一卷

目録

總論

第一章 健康小兒

消化

呼吸

血液循環

尿分泌

皮膚ノ作用

體温

睡眠

神經系及精神ノ官能

骨及筋肉

三	三	三	二	二	二	二	十	十	三
十三	十一	十九	十七	十五	十三	十一	十八	十五	三
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁

第二章 小兒健全學ノ原則

營養

口及齒ノ保護

皮膚ノ保護

住居

骨及筋系統ノ保護

五官器ノ保護

精神的生活ノ保護

第三章 小兒疾病通論

症候學及診斷法ノ一般

第四章 病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

第五章 小兒ノ疾病統計

第一編 全身病

第一章 小兒弱症

三十七丁

三十八丁

五十三丁

五十五丁

六十五丁

六十一丁

六十二丁

六十五丁

同

九十丁

百二十丁

百二十四丁

同

第二章 貧血

第三章 萎黃病

第四章 白血病

第五章 脂肪過多症

第六章 佝僂病

第七章 腺病

第八章 梅毒

第九章 血斑病

第十章 佝僂質私性紫斑病

第十一章 敗血病

第十二章 出血質病

第十三章 尿崩病

附錄 中毒

百二十七丁

百三十六丁

百三十八丁

百四十丁

百四十四丁

百六十二丁

百七十五丁

百八十五丁

百九十二丁

百九十三丁

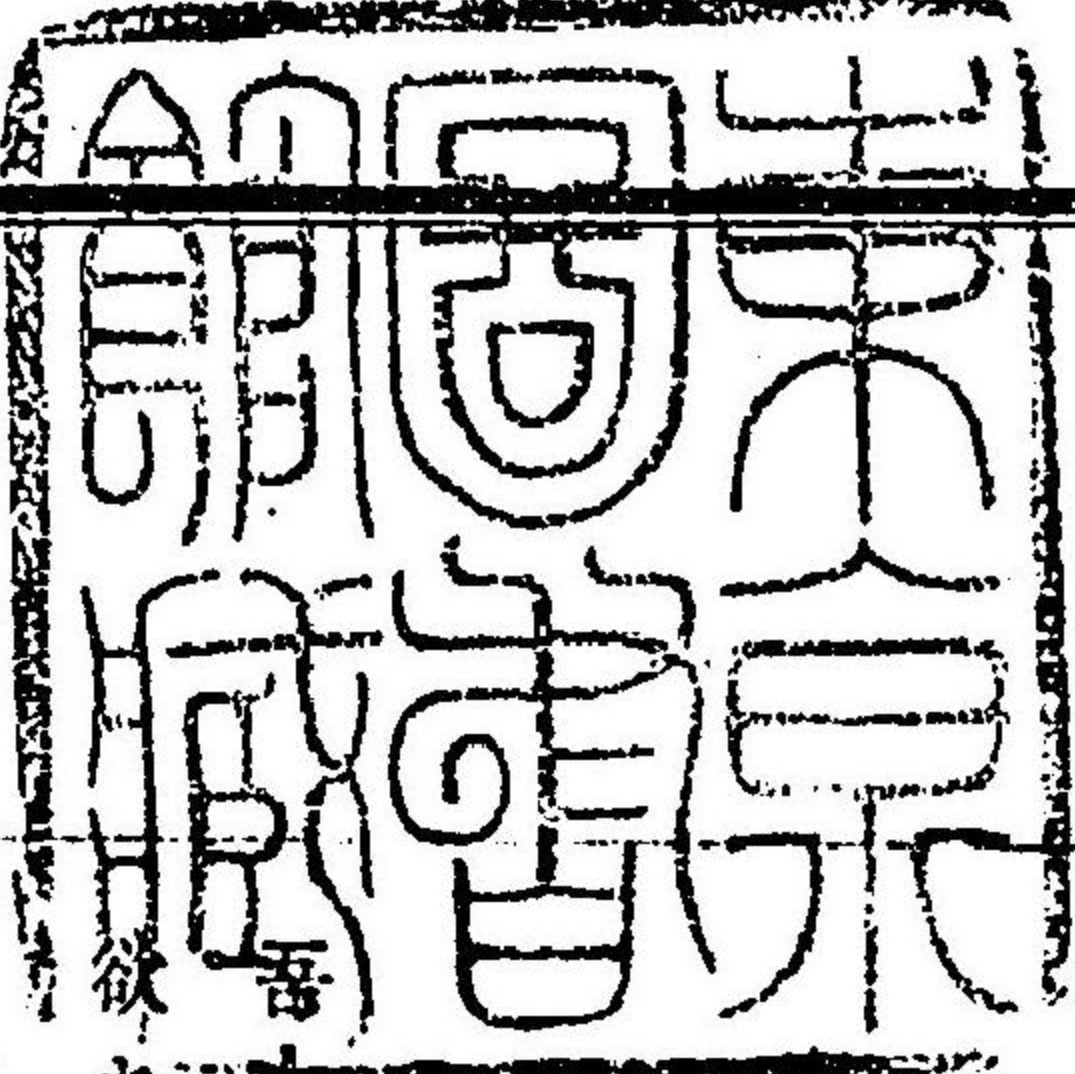
同

百九十八丁

二百四丁

ウツフェルマン氏小兒科學第一卷目錄終





ウツフェルマン氏小兒科學第一卷

醫科大學小兒科教授醫學博士 弘田 長 校閱

前醫科大學小兒科助手醫學士 近藤常次郎

醫科大學小兒科助手醫學士 伊東祐彦 譯述

醫科大學小兒科醫員長 澤 巨

總論

吾々若シ小兒ノ體育及智育ヲ發達セシメ、且ツ疾病ヲ治愈セシメント欲セバ、先ツ充分ニ小兒身體構造ノ特有性狀ヲ明知セザルベカラス。若シ茲ニ留心セズ成人身體構造ノ性狀ヲ根據トシ、彼ノ目的ヲ達セント欲セバ、失誤ヲ生ズルノミナラズ却テ甚シキ災害ヲ招クニ至ルベシ。故ニ小兒ノ身體並ニ精神ノ特有性狀ヲ考究シ、而シテ後始メテ小兒ノ健康時及疾病時ノ處置ヲ確實ニ行フヲ得ベキナリ。蓋シ小兒科醫タル者

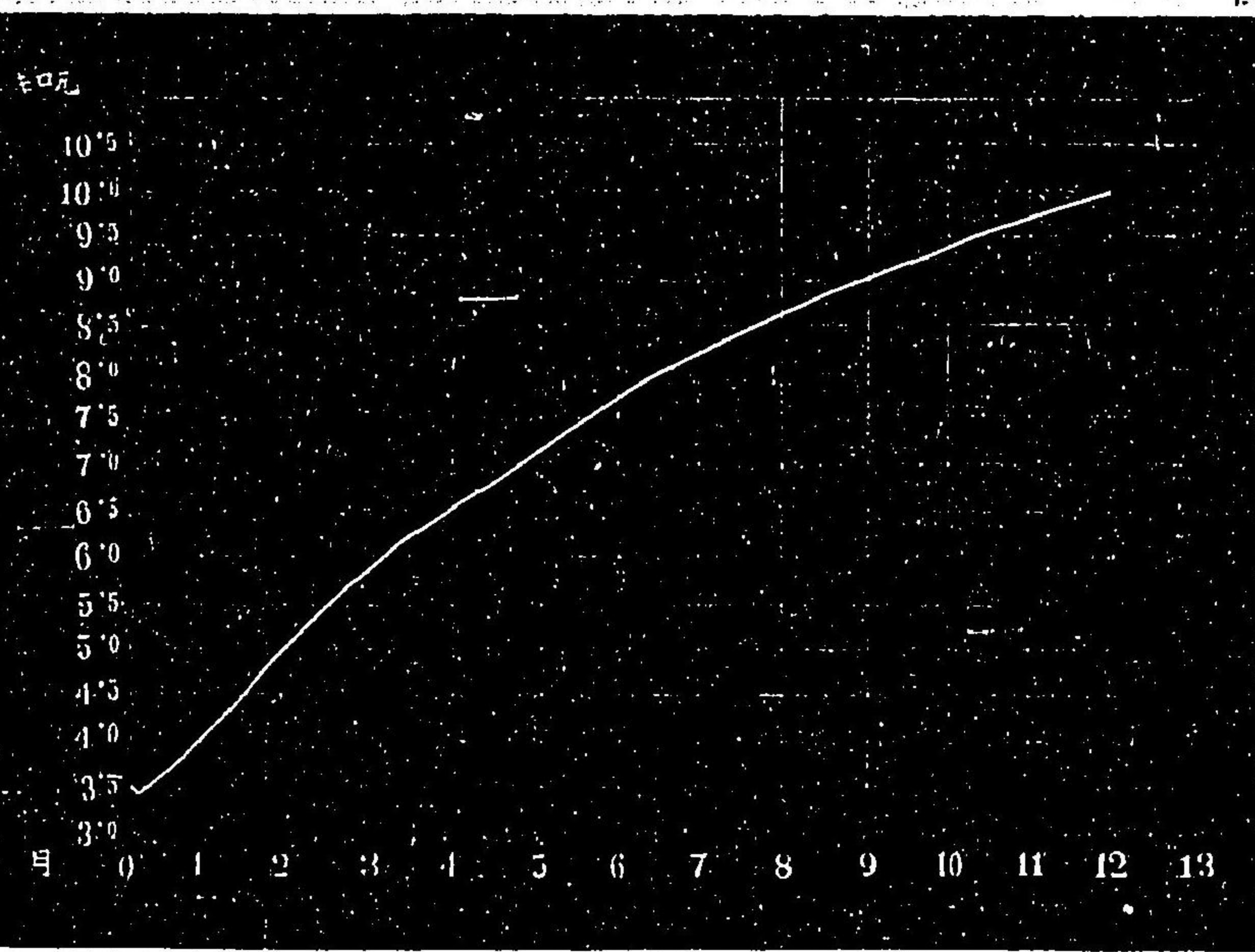
總論

ハ疾病療法ノミニ止マラズ健全學上ニ注目シ、以テ小兒ノ病的素因ヲ  
早時ニ排斥シ、可及的小兒ヲシテ充分ノ發育ヲ取ラシメザル可カラズ、  
世ノ小兒科醫クルモノハ須ク茲ニ注意シ、殊ニ病家ニ對シテ此ノ責任  
ヲ全フセザル可カラズ、夫レ故ニ吾人ハ小兒發育ノ通常狀態、即チ小兒  
生理學及小兒保護ノ各條ニ就キ、緊要ナル識見ヲ完備シ置カザル可カ  
ラズ、而シテ後吾人ハ彼ノ豫防的健全學上ノ緊要ナル部分ニ進達シ得  
可キモノトス、去レバ小兒疾病ヲ論ズル各書ニ於テ健康時ニ於ケル小  
兒ノ狀態及生理的發育ノ順序、並ニ健全學上ノ論案ヲ記載スルハ亦ク  
缺ク可カラザル所ナリ  
今疾病ヲ論述スルニ先立テ、疾病ノ探知、診定ニ緊要ナル條件及治療原  
理ノ一般ヲ記載スルハ、小兒體固有狀態ニ就テ亦ク缺ク可カラザルモ  
ノトス  
夫レ故ニ總論中ニハ先ヅ健康小兒及其健全學、次ニ疾病小兒ノ狀態及  
療法ノ一般ヲ説明シ、然ル後疾病ニ論及スベシ

### 第二章 健康小兒

健康ナル分娩兒ノ體重ハ大畧三三五〇〇〇瓦ニシテ男兒ハ三五〇〇〇  
瓦、女兒ハ三〇〇〇〇〇瓦ノ體重ヲ有シ、若シ此ノ體重ヨリ著シク輕キト  
ハ、即チ虛弱ヲ示スモノナリ、小兒ノ春期發助期迄ニ大畧初體重ノ十二  
倍ニ増量ス、即チ十五歲ノ終リニシテ殆ソ一三九〇〇〇〇一四五〇〇〇  
〇瓦ヲ算スルニ至ル、然レバ此ノ増量ハ平等ニ増加スルモノニ非ズ、殊  
ニ小兒期ノ始メ及ビ終ニ於テ著シク増量ス、而シテ通例分娩後三日乃  
至四日間ニ體重凡二二〇〇〇一三三〇〇〇ヲ減ズ、之レ尿及ビ胎便ノ排  
泄、皮膚ノ蒸發、并ニ滋養品ノ不充分ナル類化作用ヨリ起ル所ノ代償ノ  
不足ニ起因スルモノトス、最初ノ體重減少ハ人乳營養ニ最モ小ニシテ、  
牛乳營養ニ大ナリ、殊ニ生後一兩日只メ茴香茶或ハ加密爾列茶或ハ麥  
湯ヲ以テ養フ小兒ニハ最モ著シキヲ見ル、而シテ生後第三乃至第四日  
目ヨリ初メテ體重ヲ増加シ、第七日乃至第十日ニ至リ、分娩時ノ體重ニ  
復スルモノナリ、此時期ノ經過ハ專ラ營養ノ種類ニ隨テ長短セララル、

第一圖



乳兒ノ體重增加表

モロナリ  
 體重、分娩時ノ量  
 ニ達セシ以後ハ、  
 生後三ヶ月ノ終  
 迄ハ毎日凡ソ三  
 〇、〇瓦、第四ヶ月  
 ヨリ第六ヶ月ノ  
 終迄ハ毎日凡ソ  
 一八、〇瓦、第七ヶ  
 月ヨリ第九ヶ月  
 ノ終迄毎日凡ソ  
 一二、〇瓦、第九ヶ  
 月ヨリ第十二ヶ  
 月ノ終迄ハ凡ソ

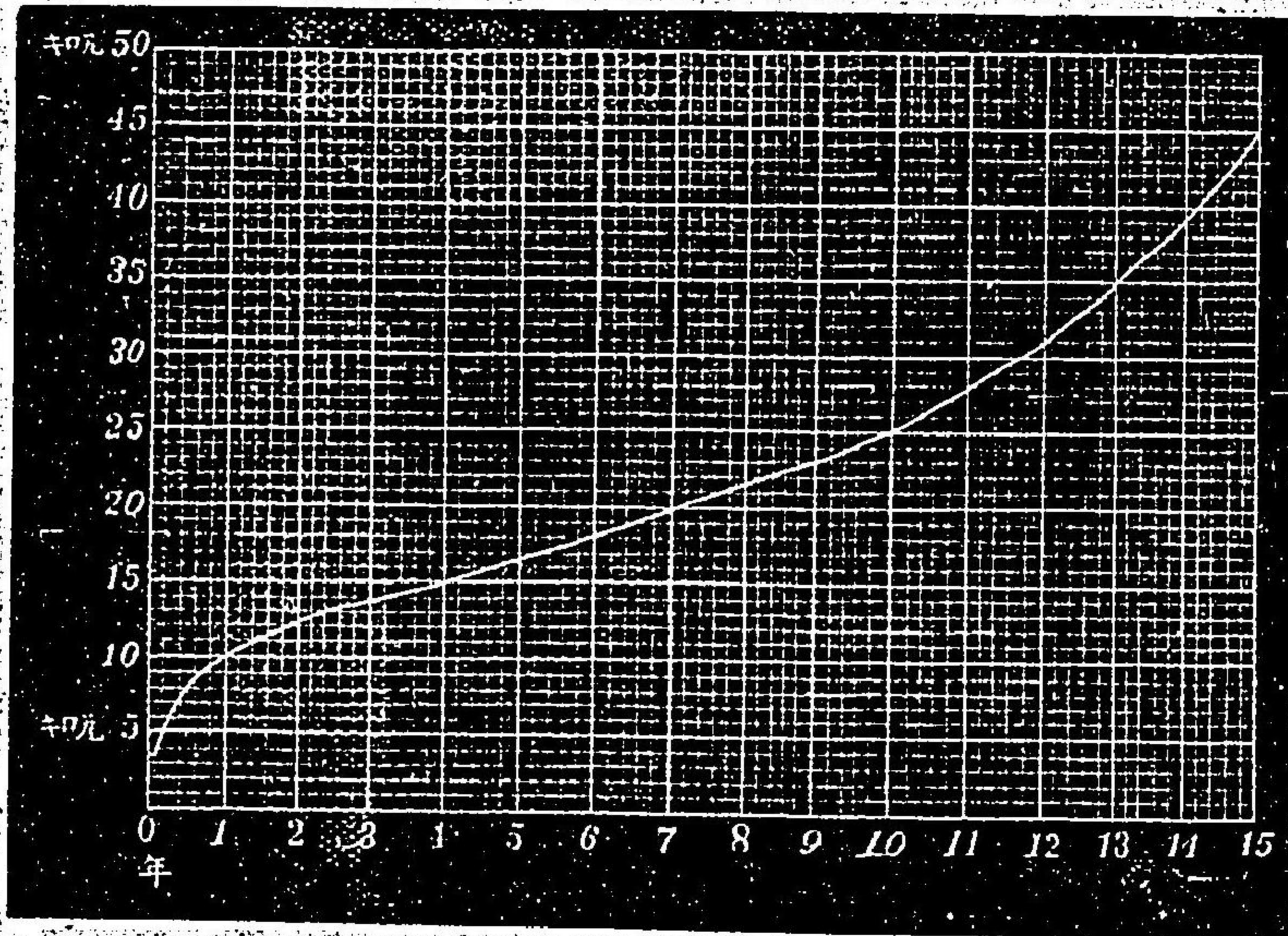
四

八、〇瓦ノ比例ヲ以テ増加シ、初一年間ニ大約六二〇〇、〇瓦ヲ増量ス、故  
 ニ一年ノ終ニハ分娩時體重ノ三倍ニ達スルモノナリ、蓋シ上述ノ計算  
 數ハ只ク一般ノ體重増加量ヲ示スモノニシテ、必シモ常ニ上記ノ比例  
 ニ正シク随フモノニアラズ而シテ第三ク月中ニ於テハ第一ヶ月ヨリ  
 多ク増量ス、時トシテ第四ヶ月ニ最大増量ヲ示スヲアリ、其他健全ナル  
 初生兒ニシテ、或ル週ニ於テハ増量意外ニ少ク、次週ニ於テ意外ノ増  
 加ヲ來スヲアリ  
 前述ノ如キ體重増加ノ尋常經過ニ障害ヲ來スハ食慾減退、類化作用ノ  
 減少、排泄ノ増強ヲ來ス一時性ノ疾患ニシテ、離乳時中ニ多ク見ル所ナ  
 リ、離乳時ニ當リテハ消化力ノ減退又ハ數々下痢ノ爲メニ通例ヨリ少  
 ナク増量シ、或ハ停止シ、或ハ尙ホ體重ノ減少ヲ示スヲアリ、實ニ他ノ食  
 物ニ變換スルノ遲速ニヨリ消化機能ノ影響ニ大小アリ、通例ノ哺乳兒  
 ノ體重増量ニ障害ヲ與フル共通原因ハ、齒牙發生期トス、此期ニハ屢々  
 胃ノ疾患、食慾減退、輕度ノ下痢ヲ起スモノナリ

總論、健康小兒

五

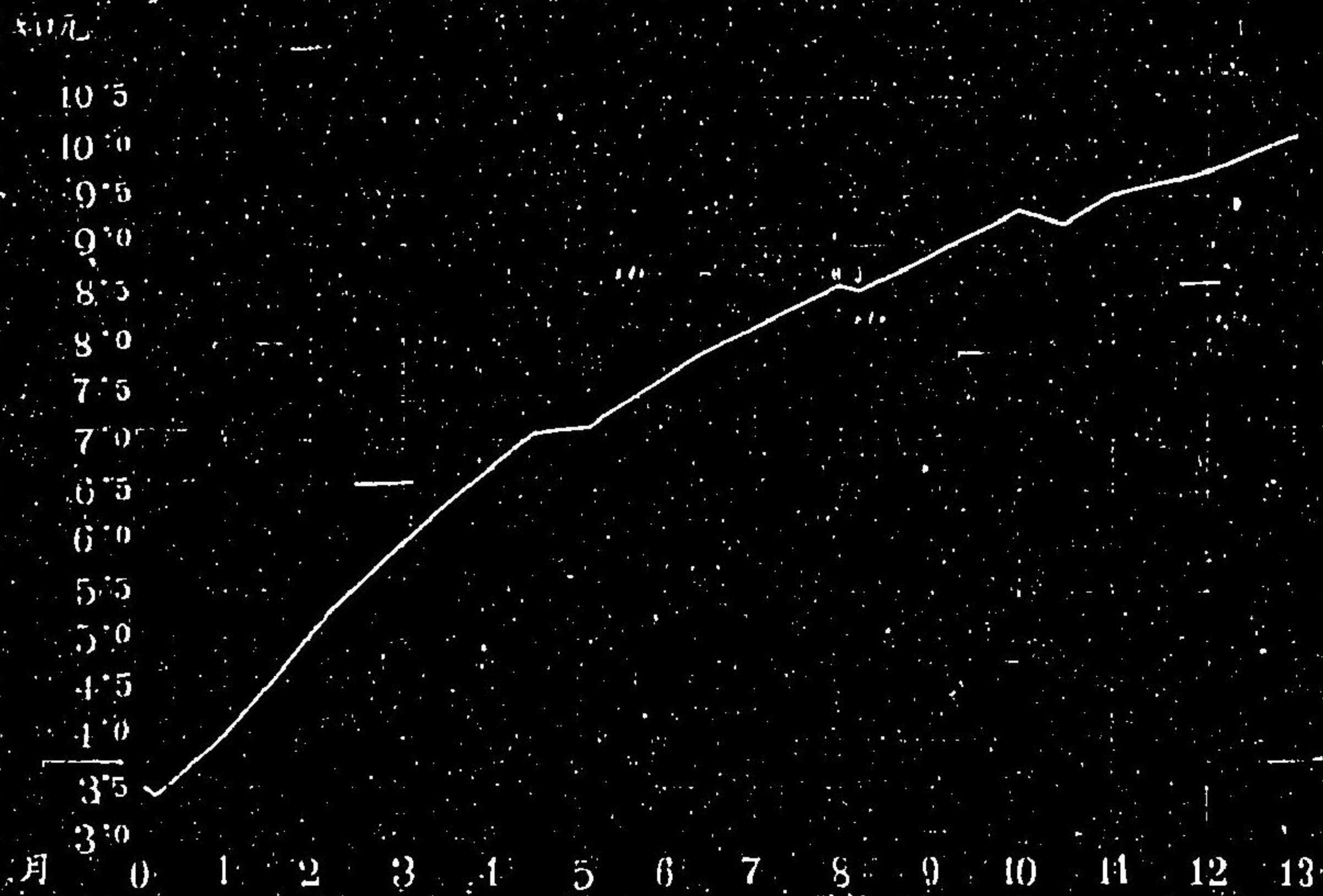
圖 三 第



表加増重體ノ兒男間年五十后生

殆ノト一五〇〇、  
 〇一七五〇〇、  
 瓦宛ヲ増量ス、而  
 シテ後強度ノ増  
 量始マリ春期發  
 動期迄持續ス、即  
 チ此期ノ初一年  
 中ニハ凡ソ二六  
 〇〇、〇瓦ノ増量  
 チ以テ始マルモ、  
 後ハ年々五〇〇  
 〇、〇一六〇〇〇、  
 〇瓦ヲ増量スル  
 ニ至ル、蓋シ女子

圖 二 第



表加増重體ノ兒乳レタケ受ヲ碍障回数

正規ニ成育スル  
 小兒ハ初一年ノ  
 終末ニハ九五〇  
 〇、〇一〇〇〇  
 〇、〇瓦ノ體重ヲ  
 有ス、第二年中ニ  
 ハ只ダ僅カニ二  
 〇〇〇、〇瓦程、第  
 三年中ニハ實ニ  
 一二〇〇、〇瓦程  
 ナ増量スルノミ、  
 之レヨリ以降十  
 年或ハ十一年ノ  
 終リ迄毎一年ニ

ハ男子ヨリ常ニ少ク早ク此ノ増量期ノ到ルモノナリ、次ニ體重増加  
數ノ表ヲ示ス

初生兒體重	三五〇〇〇瓦(男子)	三二〇〇〇瓦(女子)
一年小兒	一〇〇〇〇〇	九五〇〇〇
二年	一二〇〇〇〇	一一五〇〇〇
三年	一三二〇〇〇	一二七五〇〇
四年	一五〇〇〇〇	一四五〇〇〇
五年	一六七五〇〇	一六〇〇〇〇
六年	一八二〇〇〇	一七六〇〇〇
七年	二〇〇〇〇〇	一九一五〇〇
八年	二一七五〇〇	二〇八〇〇〇
九年	二三三〇〇〇	二二三〇〇〇
十年	二五〇〇〇〇	二四二〇〇〇
十一年	二七〇〇〇〇	二六六〇〇〇

身長

十二年 " 三一〇〇〇〇 " 三〇六〇〇〇 "

十三年 " 三五〇〇〇〇 " 三三八〇〇〇 "

十四年 " 三九〇〇〇〇 " 三六七〇〇〇 "

十五年 " 四五〇〇〇〇 " 四一五〇〇〇 "

勿論此表モ亦一般ノ法則ノミ、然レモ數字ハ(端數ヲ除ク)元ト多數ノ統  
計ニ就テ算出セラレタルモノナレバ、小兒ノ増量若シ此ノ記載數ヨリ  
著シク減退スルキハ、毎常必ズ發育ニ障害アリトス、夫レ故ニ天秤ハ小  
兒發育經過ノ鑑定及保護ニ向テ必要ナルモノナリ、然レモ此一事ヲ以  
テ決シテ發育良否ヲ判断スルヲ得ズ、如何トナレバ正規ノ體重増加ヲ  
超過スト雖モ、健康ナラザルノ小兒アレバナリ

體重秤量ノ他ニ尺度ハ、小兒發育各期ノ長經及ヒ横經ヲ測定スルニ重  
要ナルモノナリ、而シテ健康ニ發育セル男兒ノ身長ハ出産後大約五〇  
仙迷ヲ有シ、第一年中ニハ凡ソ一〇仙迷、第三年中ニハ凡ソ七仙迷、其後  
ハ各年ニ於テ凡ソ四―五仙迷ヲ増加ス、長經ハ生後ヨリ十五年ノ終末

身

胸圍

迄ニハ凡ソ一〇〇仙迷増加ス故ニ小兒ハ凡ソ一五〇仙迷ヲ算ス、女兒  
 ハ生後四十九仙迷ノ長經アリ、初年ノ終末ニハ六八―六九仙迷、第三年  
 ノ終末ニハ八六仙迷、第十年ノ終末ニ一二六仙迷、第十五終末ニハ一四  
 九―一五〇仙迷ニ達ス

横經 肩峯突起ヨリ肩峯突起迄

初生兒 平均 一三、七仙迷

第三年終末 二二、〇〇

第六年 三二、〇〇

第十四年 三六、〇〇

胸圍周圍(最モ必要トス)

初生兒 中央ニ於テ 三四―三五仙迷

第三年終末 五六―五七

第五年 五九―六〇

第十年 六五

十

頭圍

第十四年 七二、五〇

第十五年 七五

胸廓周圍ヲ身長ニ比較スルハ實地上必要トス、而シテ良ク發育セル初  
 生兒ノ胸廓周圍ハ身長ノ半ヨリ凡ソ九乃至一〇仙迷多キヲ通例トス、  
 而シテ此ノ超過數ノ多キ(一一―一二仙迷)ヲ強健トシ、少キ(八仙迷)ヲ虛  
 弱ト見做ス、第三年後ハ少ソトモ一二仙迷、第五年後ニハ凡ソ一〇仙迷  
 第十年後ニハ凡ソ四、五仙迷ヲ超過シ、第十五年後ハ身長ノ半ニ平均ス  
 ルニ至ル

頭圍ノ周圍ハ初生兒ニ於テハ三三仙迷乃至三五仙迷、第六ヶ月ニアリ  
 テハ四二仙迷、第二年ニアリテハ四八仙迷、第七年ニアリテハ五〇乃至  
 五一仙迷ヲ算シ、大人ニアリテハ五四乃至五九仙迷ヲ算スルモノナリ、  
 而シテ此ヨリ著シキ差違ヲ來スハ、頭蓋内ノ疾病ヲ示スモノナリ、  
 其他初生兒ニ於テハ頭蓋ノ周圍ハ胸廓ノ周圍ニ殆ソド同一ナリ、而シ  
 テ通例ノ發育ヲ取ルモノハ、兩部共ニ永時同一ニ發育スルモノトス(二

齒牙發生

ケ月半ニアリテハ凡ソ二五仙迷若シ胸廓發育停止スルキハ佝僂病ヲ示ス譯者曰ク頭圍ト胸圍トノ關係ハ日本ノ小兒ニ於ケルモトト異ナル所アリ現ク卷首ノ譯者緒言ヲ参照セヨ

齒牙發生ノ注目ハ吾人ニ向テ小兒發育ノ通例ナルカ將タ否ラザルカヲ判別スルノ要點ナリ第一乳齒即チ兩内下切齒ハ多クハ十六乃至二十二週間ニ發生シ次テ四週乃至八週ノ休憩アリシ後兩内上切齒次テ兩外上切齒ヲ發生シ而シテ後長キ休憩アリ第一年ノ終末ニ至リテ兩外下切齒ヲ生ズ其後直チニ四個ノ前臼齒第二年半ニ至レハ四個ノ犬齒第二年ノ終末或ハ第三年ノ初メニハ四個ノ後臼齒ヲ發生ス此ノ齒牙發生期ノ經過ハ實ニ多クノ破格アリト雖モ然レモ乳齒發生著シク此ノ時期ヨリ遲ク第一乳齒ハ第二年前ニ現ハレズ或ハ甚ダシキ休憩時ヲ來シ或ハ對チナサズシテ各個宛發生スルガ如キキハ即チ營養障害特ニ佝僂病ノ疑ヲ起ス可シ乳齒若シ珫瑯質ニ乏シキカ若クハ全ク缺亡スルカ又ハ乳齒早時ニ變色シ且ツ破碎シ易キキハ多分ハ腺病或ハ佝僂病又ハ梅毒之ガ原因ナルヲ知ル

第二生齒期

顚門

第二生齒期ハ第六年ノ終末ニ初マリ二十個ノ乳齒發生ノ順序ニ隨テ脱落シ直チニ二十個ノ新齒發生ス續テ四個ノ後臼齒ヲ生シ而シテ第十二年或ハ尙ホ後レテ更ニ四個ノ臼齒ヲ生ズ知齒即チ最後臼齒ハ決シテ小兒期ニ現レズシテ十八年乃至二十年或ハ二十五年ニ至リ發生スルモノナリ

大顚門ノ状態ハ尋常發育經過ノ判定ニ向テ甚ダ緊要ナルモノナリ成熟シタル初生兒ニアリテモ大顚門ハ尙ホ哆開シテ稜形ヲ形成シ而シテ其後上角(顚頂骨結合)ハ前下角(前頭骨結合)ヨリ大ナリ尋常ニ發育セラル小兒ニアリテハ分娩後ハ漸々ニ縮小ス而シテ初メハ僅ニシテ第二年ノ初メニ至リ著シク縮小シ凡ソ第十四乃至第十六ヶ月ニ於テ閉塞ス而シテ顚門ノ閉塞其期ニ先ダツカ或ハ後ルキハ發育ノ違常ト見做ス眞ノ遲期閉塞ハ多分ハ佝僂病症候ト見做ス可シ尙ホ哆開セル大顚門ニ注意シテ指ヲ置クキハ少シモ陷凹ヲ示サズ寧ロ適度ノ緊張ヲ有スル成規ノ穹窿ヲ感觸ス可キモノトス

小兒ノ尋常或ハ異常發育ノ判定ニ向テ甚ダ緊要ナルハ、小兒ノ機嫌及  
 ヒ凡テ精神ノ状態ニ注目スルニアリ、身體及ヒ精神ノ尋常ニ發育セル  
 小兒ハ常ニ平等ニ愉快ナル機嫌ヲ示ス、即チ凡ソ六週ヨリ屢々莞爾ス  
 ルヲ以テ知ルヲ得可シ、夫レニ反シテ異常ノ發育ヲ取ル處ノ小兒ハ甚  
 ダ屢々快々タリ、即チ泣キ易ク、或ハ無頓着ニシテ、不斷然ルヲアリ、或ハ  
 間歇スルヲアリ  
 固有ナル精神生活ニ就テ論ズレバ、初生兒ハ恰モ精神の官能ナキ脊髓  
 動物ニシテ、漸次腦的ニ働作スル實體ニ變化ス、是非ノ辨別、眞ノ理解、意  
 識ノ發揚ハ三ヶ月以内ニ於テハ現ハレズ、蓋シ此間各哺乳兒ハ恰モ魯  
 鈍ノ状態ヲ呈ス、意識發揚ノ初メハ一般ニ先ヅ二年ノ始メニシテ、確實  
 ナル言語ノ前兆ハ第一年ノ終末ニ目撃スルモノナリ、短簡ナル文章ハ  
 先ヅ第二年ノ半ハ頃ヨリ始メ、私ナル代名詞ノ使用ハ凡ソ三年中頃ヨ  
 リ爲ス、若シ言語第二年ノ中頃ニアリテ發スル能ハザルモ、終身言語  
 ナク、缺損スルノ懸念ヲ起サザル可カラズ

消化

哺乳兒ノ消化管ハ大人ニ比スレバ、身體ノ大サニ比較的長ク且ツ廣キ  
 吸収面ヲ有ス、大人ノ腸管ハ身長ヨリ大凡四倍半長キモ、哺乳兒ニアリ  
 テハ凡ソ六倍ノ長サヲ有スルモノナリ  
 體重ニ就テ比較スレバ、初生兒ハ一キロ、瓦ニ就キ五千立方仙迷、十二歳  
 兒ハ一キロ、瓦ニ就キ九千立方仙迷ノ腸ノ容積ヲ有ス、而シテ大人ニア  
 リテハ僅カニ一キロ、瓦ニ就キ四千立方仙迷ヲ有スルノミ  
 腸管ノ粘膜炎ハ、哺乳時、凡テ一歳以下ノ小兒ニアリテハ、六乃至十五歳ノ  
 小兒及ビ大人ノ腸管粘膜炎ヨリモ血液ニ富ミ、刺激ニ感シ易ク、且ツ損傷  
 シ易キモノニシテ、哺乳兒腸管ノ筋ハ、年長ノモノヨリモ弱クシテ、腺モ  
 亦タ完備セラレズ

唾液ハ八乃至十週間ハ少量ニシテ且ツ糖化作用弱シ(ツワイフェル、コロ  
 ウイン氏)此ノ時期ヲ過グルルキハ其量ヲ増シ、糖化作用著明トナル、然レ  
 正規則上大人ノ糖化力ニ類似スルハ第十ヶ月ノ初メトス



初生兒ノ胃ハ、梨子狀ニシテ、薄弱ナル筋ヲ噴門ニ有シ、胃底ハ只ダ其痕跡ヲ示ス、而シテ長軸ハ殆ンド鉛直ニシテ平坦ナル横隔膜及ビ大ナル肝臓及ビ前腹壁ノ間ニ位ス、胃底ハ初年ノ經過中ニ漸々其位置ヲ變化シ、長軸ハ漸次横位ヲ取ルニ至ル、初一年ノ胃ハ粘膜ノ多血ナルガ故ニ營養品ノ温度ノ差異及ビ稠度并ニ化學的性質ニ隨テ反應スルヲ成長セル小兒ヨリ迅速且ツ強劇ナルモノナリ、胃ノ此刺戟ヲ感受シ易キ性質ト、噴門筋ノ薄弱ト、及ビ胃ノ殆ンド鉛直位ナルトニヨリ、哺乳兒ハ容易ニ嘔吐ヲ發スルモノナリ

胃ハ出産日ニ於テ已ニペプトン化作用ヲ備フル所ノ腺液ヲ分泌ス、此ノ分泌液ハ後年ニ比スレバ酸性ノ度弱シ、此ノ弱酸性ハ全哺乳期間持續スルモノナリ、一般ニ遊離酸ノ大分部ハ乳汁ト結合ス、夫レ故ニ元ト分泌セラレタル胃葡萄狀腺液ハ胃内容物中ノ鹽酸量ヨリモ酸性ノ度強大ナリ、鹽酸分泌ハ營養品攝收後凡ソ一時間半ニシテ其極度ニ達スルモノナリ、而シテ天然營養物ノ充分胃酸ニ抱和セラレタル部分ハ、大

凡一〇時ト四〇分ト三〇時ニシテ乳兒ノ胃ヲ去ル、哺乳兒ノ甚ダ大ナル肝臓ハ胆汁ヲ分泌スルヲ成長小兒ノ肝臓ヨリ比較的大量ナリ、而シテ少ナクモ其一部分ハ腸管中ヲ變化ナク通過ス、胆汁中ノ胆酸ハ比較的少ナク、グリココール酸ハ全ク含有セズ、ヤンキイム氏(Young)ノ分泌物ハ、初メヨリ蛋白質ヲペプトン化シ、脂肪ヲ細分スルノ機能アルモ、糖化作用ハ凡ソ第二ヶ月ノ始メニ於テ起ルモノナリ(チリレット氏)

哺乳兒ノ大便ハ、毎日二乃至三回ニシテ卵黃色、軟膏稠度ナリ、微弱ノ酸臭ヲ帶ビ反應ハ弱酸性ナリ、而シテ凡ソ八十五「プロセント」ノ水ト十五「プロセント」ノ固形成分ヨリ成ル、此ノ固形成分ハ「アルブミン」ト「少量」ムチン「脂肪」遊離及ビ抱合脂肪酸「コレステアリン」胆汁色素、胆酸、上皮細胞、分裂微菌、芽生微菌、鹽類ヨリ形成ス、脂肪及ビ脂肪酸ノ含有量ハ大凡總乾燥物質ノ十「プロセント」、鹽類ノ含有量ハ凡ソ其十乃至十五「プロセント」ニシテ分裂微菌ノ含有量ハ極メテ著シ、分裂微菌ハ二種類即チ酸素

人工營養ニ由レル  
小兒ノ大便

性乳微菌及ビ大腸バチルスナリ、

人工營養ニ由レル初生兒ノ大便ハ其性状異ナリ、營養品全ク牛乳ナルキハ、大便ハ純卵黃色ナラズシテ灰々白色ノ雲片狀物或ハ凝固物ヲ混シ、弱酸臭アリテ反應ハ弱酸性ナリ、而シテ自然營養ニヨレル哺乳兒ノ大便ヨリ多クノ不消化脂肪蛋白並ニ多クノ鹽類ヲ含有ス、小兒粉ヲ以テ養フ小兒ノ大便ハ帶黃褐色ニシテ可ナリ強ク酸臭ヲ放チ、又々強酸性ノ反應アリ、腐敗性臭氣ハ人乳或ハ牛乳若クハ小兒粉ヨリ養ハル、健康小兒ノ排泄物ニハ決シテ放チズ、然レモ若シ傍ラニ肉、肉羹汁、或ハ卵ヲ與フルキハ惡息ヲ放ツナラシ、而シテ此等ノ食物ヲ與ヘザルニ腐敗臭ヲ放ツキハ毎常腸内ニ腐敗作用ヲ起セル重症ヲ示スモノナリ、

呼吸

胸廓ノ發育狀態

健康初生兒ノ胸廓ハ善良ノ穹窿ヲナス、即チ上開口ハ眞直ニ上方ニ向ヘルヲ以テ、其前縁ハ後縁ヨリ後年ニ比スレバ高位ニアリ、胸廓ノ下縁ハ著シク下腹ヨリモ突出シ、腋窩線ハ胸骨ヨリ甚ダ長カラズ、

呼吸ノ數

初生兒胸廓水平断面ハ殆ンド方形ニシテ胸廓ノ矢狀直經ハ恰モ横直經ニ等シ、然レモ漸次後者ハ前者ヨリ長クナリ、十年ノ後、矢狀直經大約七仙迷、横經一三仙迷ヲ増加ス、胸廓周圍ハ第三年ノ終末ヨリ、第十三年迄ハ徐々ニ且、殆ンド平等ニ増加シ、其後ハ甚ダ速ニ増加スルモノナリ、而シテ若シ出産時ニ於テ通例ノ發育ヲ遂ゲザルモノハ、殆ンド常ニ發育各期ニ於テ其發生順序ニ後ル、者ナリ、胸廓ノ尋常發育ヲ眞ニ妨害スルモノハ、佝僂病(鳩胸)、脊椎後彎及ヒ脊椎側彎ナリ、小兒時ノ呼吸數ハ後年ヨリモ多キモノトス、一分時ノ呼吸ハ即チ左ノ如シ

初生兒	三十五回
一年小兒	二十六回乃至二十七回
二年小兒	二十四回乃至二十五回
六年小兒	二十回乃至二十一回
十年乃至十二年小兒	十八回乃至二十回

總論、健康小兒、呼吸

大人

十六回

呼吸ハ全ク平等ナラズ、殊ニ初年ニ於テ然リ、又最モ健康ナル小兒ノ安眠中ニ於テモ淺呼吸ト深呼吸トヲ交互ニ行フヲ目撃ス、而シテ呼吸間歇時ノ長サモ亦ク一様ナラズ、

初一年間ノ呼吸ハ殆ンド獨リ横隔膜ニヨリテ營ム、而シテ漸々胸廓呼吸筋ノ働作ニ變換ス、加之入乃至九年ニ於テハ尙ホ主トシテ横隔膜呼吸ヲ行フ、

女子ハ十年、男子ハ十一年ヨリ呼吸動動ノ特有形式ヲ成ス、女子ハ漸々胸廓ノ上及び中部ノ擴張ヲナシ、男子ハ胸廓ノ下口ヲ上腹部ト共ニ著シク外方ニ突出セシム(フイルオルト氏)

呼吸化學的作用ヲ大人ト比スルニ、小兒ハ大人ヨリ比較的多ク炭酸ヲ呼出スルヲ確實ナリトス、

八年小兒	一キロ瓦ニ數キ	二十四時	CO <sub>2</sub>	21,0カラ
十年小兒	"	"	"	20,0"

炭酸ノ排出量

呼吸ノ状態

十四年小兒	"	"	"	18,0"
大人	"	"	"	14,0"

多量ニ呼出スル炭酸ニ適シテ比較的大人ヨリ多ク空中ヨリ酸素ヲ吸入ス、

血液循環

血液循環

血液ハ小兒ニアリテハ大人ヨリ速ニ循環スフイルオルト氏ニ隨ヘバ

初生兒	12 秒時間
三年小兒	15 秒時間
十四年小兒	18 秒時間
大人	22 秒時間

脈搏

脈搏ハ小兒ニ於テ一般ニ速ナリ即チ

睡眠セル初生兒	一分間	136,
" 一年小兒	"	118,
" 四年小兒	"	100,

十年小兒 86

充分健康ノ小兒ト雖モ、少クモ初五六年間ハ脈搏全ク正シカラズ、且ツ強度モ等シカラズ、縱令ヒ睡眠中ト雖トモ亦タ然リ、故ニ小兒ノ脈搏ニ關シテハ倉卒ナル判斷ヲ下スコト勿レ、之レ須ラ知ラザル可カラザルノ事實ナリトス、而シテ若シ小兒ノ脈搏甚シキ變態又ハ強度ノ亢奮ヲ呈スルキハ、最モ注意セザル可カラズ、健康大人ノ脈搏ニアリテハ甚ダ僅ニ變化ヲ起シ或ハ全ク變化セザルノ場合ト雖モ、健康小兒ニアリテハ能ク其脈數ヲ増加シテ殆ント倍數トナリ、或ハ其性質モ充分ニ變化ヲ來サシメ得可シ、夫レ故ニ小兒ノ睡眠中、或ハ充分ノ安靜後ニ於テ診察セル時ノミ、確實ナル成績ヲ得可シ、

初生兒血中白血球ノ含有量ニ就テ、多クノ檢者ハ大人ヨリモ多量トシ、或人ハ赤血球ヲ多量トシ、或人ハ多量ナラズトス、初生兒ノ赤血球ハ其性質大人ト異ナリ、縞錢狀連合ノ性質ニ乏シ、血液ノ血色素含有量ハ、初生兒ニ於テ甚ダ多量ナリトス(メーリンケ、ゲスト氏)

尿分泌

尿量

分娩後直チニ排泄スル初生兒ノ尿量ハ九乃至十立方仙迷ナリ、初メ兩日間ノ總量ハ凡ソ一〇〇立方仙迷、第三日ヨリ第七日迄ハ毎日凡ソ二〇〇立方仙迷、乳兒ノ末期ニ於テハ毎日大凡三〇〇乃至五〇〇立方仙迷、最初ノ半年ヲ經過セシ後ハ凡ソ六〇〇立方仙迷ヲ分泌ス、牛乳ヲ以テ養育セラル、小兒ハ凡ソ總量ノ三分ノ一多キモノトス、第一年ノ健康ナル小兒ニ付テ一〇〇〇立方仙迷、牛乳ヲ飲用セシムルキハ凡ソ六五〇立方仙迷ノ尿量ヲ排泄ス、小兒ノ末年ニ於テハ尿量ハ絶對的ニ哺乳時ヨリ多量ナリ、然レモ體重ニ比較スレバ甚ダ少量ナリ、  
 哺乳兒ノ尿ハ淡色ニシテ殆ンド無臭、弱酸或ハ中性ノ反應ヲ呈シ、排泄後甚ダ速ニ亞爾加里性トナル、比重ハ第一日ニ於テハ凡ソ一〇一二ニシテ、其後乳汁ヲ飲用スルガ故ニ、平均凡ソ一〇〇三トナル、此ヨリ再ビ漸次増加ス、第五ヶ月ノ經過中ニ於テハ一〇〇九乃至一〇一〇ニ達ス、而シテ此ノ比重ハ第一年間持續シ、第二年ヨリ第五年迄ハ一〇一二乃至

總論、健康小兒尿分泌

尿量

至一〇一六ニ昇リ、春期發動期迄保續ス、尿比重増加ニ比例シテ尿ハ漸次黄色ニ變シ大人ノ如クニ強臭ヲ放タザルモ亦タ臭氣アリ、  
 尿量ノ量ハ小兒ノ生長ト共ニ増大ス、初週ニ於テ尿量ハ毎日〇、八瓦、第三週ニ於テハ毎日一、〇瓦、第二年ニ於テハ已ニ毎日一〇、〇瓦、第十四年ニ於テハ毎日二〇、〇瓦ノ尿量ヲ排泄ス、今尿量ノ量ヲ體重ニ比較スルキハ體重一キロ瓦ニ就キ即チ

第一週	0,22瓦 尿量
五十日	0,26瓦 "
二百日	0,50瓦 "
二年	1,00瓦 "
四年	1,37瓦 "
十年	0,71瓦 "
十三年	0,71瓦 "
大人	0,55瓦 "

皮膚

皮膚ノ作用

健康小兒ノ尿ハ屢々還元スル物質ヲ含ムコトアリ

初生兒黃疸

初生兒皮膚ハ平等ナル赤色ニシテ、生後二乃至六日ニハ已ニ黄色トナル、而シテ第二週乃至第三週ノ經過中ニハ、永存スベキ淡蔷薇赤色トナル、第一週ノ後ニハ初生兒ノ八〇プロセントハ皮膚黄色ヲ呈ス、殊ニ薄弱ナル初生兒ニ於テ然リ、而シテ此經過中大便ノ脱色スルコトナク、又殆ソト常ニ尿ヲ染ムルコトナシ、然レモ多分ハ結膜ニ淡黄色ヲ呈シ、而シテ一般状態ノ障害ヲ起サズ(若シ此障害アルキハ皮膚黄疸色ヲ以テ一ノ症候トナス處ノ疾病ト見做ス可シ)

初生兒黃疸ノ因

此ノ生後第一週乃至第二週間ノ生理的黃疸原因ニ就キテハ諸説一定セズ、一説ニ由レバ第一日ニ於テ數多ノ赤血球破壊シ、而シテ其血色素ハ胆色素ニ類似セル體ニ變化スルニヨルト、他ノ説ハ臍靜脈流入ノ廢止セシ後、肝血管中ニ於テ突然壓力ノ減少スルニヨルト、又一説ハ靜脈鬱血ノ爲メグリッソン氏癢ノ水腫スル結果ニ由テ、胆汁ノ流出妨害セラ

ル、ニヨルト、而ノ當時ノ新説ニヨレバ血球破壊シテ色素血液ヲ生  
シ、而シテ靜脈殊ニ門靜脈枝中ノ血行遲慢トナリ、靜脈中ニ變化セル血  
球(細胞)ヲ鬱積シテ胆道ヲ壓迫シ、遂ニ胆汁吸收ヲ結果スルニ至ルニ由  
ル可シト、

無感覺ノ皮膚蒸發ハ、小兒ニ於テハ比較的ニ一般ニ強度ナリ、如何トナレバ小  
兒ノ皮膚ハ甚メ血液ニ富メバナリ、

其蒸發量ハ第一週ニ於テハ毎日僅ニ凡九〇〇瓦ナリ然レモ

五乃至六ヶ月ニ至レバ 毎日 凡290瓦

十一ヶ月ニ至レバ " 460瓦

二年ニ至レバ " 270-586瓦

五年ニ至レバ " 462-802瓦

十一年ニ至レバ " 503-728瓦

大人 " 650瓦

ザアウエル氏ニ從ハ、四年ノ小兒ノ蒸發量平均ハ大人ノ蒸發量ニ等シト

蒸發

發汗

汗ハ第一年ノ小兒ニアリテハ只ダ温暖ニ過ギタル着衣及ビ褥或ハ温  
暖ニ過ギタル空氣中ニアラシメ、或ハ温暖ニ過ギタル營養品ヲ取ラシ  
ムルキニノミ目撃ス、若シ此ノ原因ナクシテ發汗ヲ認ムルキハ疾病(一  
般薄弱及ビ佝僂病)ノ存在スルヲ知ル可シ

胎脂

初生兒ノ皮膚ハ皮脂腺分泌物ト剝脱上皮ヨリ成ル所ノ脂肪樣堆塊(胎  
脂)ヲ以テ被包セラル、此ノ一部分ハ初入浴後尙或ル部分ニ固着ス、而シ  
テ此部ハ汚穢部分トナリ、小寄生物ヲ空氣ヨリ取り容易ク分解シ、而シ  
テ分解產生物ニヨリ皮膚ヲ變質ス、頭部毛髮部中ニハ殊ニ多キ皮脂腺  
分泌ヲ來シ、殊ニ大顛門部位ニ暗褐黃色ノ乾燥苔ヲ形成ス、是レ即チ脂  
漏ニシテ其下ニ於テ甚ダ屢々濕疹ヲ發生スルモノナリ(下條ヲ見ヨ)

脂漏

體温

健康小兒ノ温度ハ、分娩直後ニ於テ平均母體ノ温度ヨリ少シク高シ、而  
シテ最初ノ入浴前ハ直腸内ニ於テ三十七、八度乃至三十八度ヲ算ス、而  
シテ小兒未熟ナルキハ〇、五乃至一、〇度低シ、入浴後體温ハ凡ソ〇、八五

體温

乃至〇、九五度降り、薄弱ナル小兒ニ在テハ更ニ下降ス、然レハ二十四時  
 間後ニ至レハ再ビ三十七、五五度ノ高度ニ達ス、而シテ此ノ度ハ實ニ全  
 小兒期ノ間持續ス、活潑ナル啼叫ハ初生兒ノ體温ヲ高ムルヲ得、營  
 物攝取ハ體温ヲ先ツ僅ニ下降シ、然ル後上昇セシム、暗室中ニ久シク在  
 留セシムルハ體温凡ソ〇、一乃至〇、五度下降ス、之レ稍々成長セル小  
 兒ニ於テモ亦尙ホ見ル所ナリ、  
 睡眠中ハ常ニ體温ノ下降凡ソ〇、三乃至〇、八度ヲ認ム、而シテ小兒ノ幼  
 少ナルニ從ヒ益々下降ノ度著キモノトス、大人ノ如キ體温曲線ハ已ニ  
 七年ノ小兒ニ於テ之ヲ見ル  
 吾人ノ知ル如ク小兒ハ體重ニ比較シテ大人ヨリモ多ク温ヲ生産ス、  
 ールオルト氏ハ初生兒毎日ノ温量七十八万四千「カロリー」、大人ノ温量  
 ハ二百四十九万七千「カロリー」、即チ初生兒一「キログラム」ノ體重ニ就テ十三  
 万〇六百八十一「カロリー」、大人一「キログラム」ノ體重ニ就テ三万九千六百四  
 十「カロリー」ヲ算セリ、然レハ小兒ハ温ノ掠奪ニ向テ大人ヨリ甚ダ鋭敏

睡眠

ナリ、殊ニ生後一週間又ハ薄弱ナル小兒ニアリテ然リトス、此ノ感覺ノ  
 鋭敏ナルハ、分娩後尙ホ體温調節器ノ官能不充分ナルニ由ルヲ疑フ可  
 カラズ、而シテ此ノ官能ハ漸々其作用ヲ完全スルニ至ルモノトス

睡眠

睡眠ハ小兒ニ向テ大人ヨリモ尙ホ一層生理的必要ナルモノトス、小兒  
 ノ新陳代謝即チ酸素ノ費消並ヒニ窒素分解ハ、大人ヨリモ比較的遙ニ  
 大ナルモノナリ、而シテ睡眠中ニ於テハ窒素分解僅ニシテ、酸素ヲ攝取  
 スルヲ少ナシ

一年以下小兒ノ睡眠時間

初生兒ハ哺乳セザル間ハ睡眠ス、而シテ多クハ哺乳時ノミ、醒覺シ、哺乳  
 終レハ再ビ睡眠スルモノナリ、而シテ第三週ヨリ第四週ノ間ハ、營養物  
 ヲ攝取スルコトナキモ四分ノ一時間醒覺シ、第七週ヨリ第八週ノ間ニ  
 於テハ、已ニ半時間、二十二週ニ於テハ間斷ナク全一時間醒覺ス、然レハ  
 十乃至十二ヶ月ニ於テハ尙ホ全ク醒覺セル時間ヨリモ睡眠時間ノ多  
 キモノトス、第二年乃至第三年ノ間ハ睡眠ノ需用減シテ、夜間十乃至十

第二年以上小兒ノ睡眠時間

二時間、日中ニ於テ二乃至三時間ノ睡眠ヲ取ルニ至ル、第三年ヲ經過スレバ、通例ハ盡睡ノ需用止ミ、夜間ノ睡眠時間モ亦々漸々減少スルモノトス、精神ヲ過勞セザル健康ナル小兒ノ

七年ノ 十時間—十時間半ノ睡眠ヲ要ス

八年ノ 九時間半—十時間

十一年ノ

十時間ノ 八時間

健康ナル哺乳兒ハ背位ヲ取り、兩腕ヲ屈曲シテ拳ヲ頸邊ニ置キ、眼瞼ヲ閉鎖シテ睡眠スルモノナリ、若シ疾病アルキハ甚ダ屢々早時ニ其體位ヲ變換シ、且ツ特有ナル情態ヲ呈ス

不睡ノ原因

小兒ノ不眠或ハ不安睡眠ハ常ニ特別ナル注目ヲ要ス、哺乳兒ニ於ケル不安睡眠ハ、不充分或ハ不適當ナル營養物衣類ノ過暖或ハ壓迫、過暖ノ臥床、過暖ノ寢室等ニヨル、二乃至六年ノ小兒ハ上述ノ原因或ハ神經系ノ強キ興奮(空想ノ興奮、驚怖ノ興奮)ニヨリ、學齡小兒ハ多分ハ筋肉系ノ攝生不完全、過度ノ讀書、過分ノ學課負擔、或ハ手淫ニヨリ起ル、

睡眠時ノ體位

神經系及ヒ精神ノ官能

神經系及ヒ精神ノ官能

神經系ノ發育

初生兒ノ神經系ハ體重ニ比較シテ甚ダ重シ、如何トナレハ腦ノ重量ノミニテモ已ニ體重ノ一三乃至一四(プロセント)大人ハ只二三(プロセント)ヲ充タセバナリ分産後ハ、第一年經過中ニ於テ著シク發育シ、已ニ第一年ノ終リニハ大人神經系ノ重サノ半量ニ達ス、小兒年齡十四乃至十五年ノ經過中ニハ神經系ノ重量ハ大人ノ六分ノ一ヲ不足スルノミ、分産後直チニ最モ著シク發育スルハ小腦ニシテ、六乃至七年ニ於テハ大腦ノ前部最モ多ク増大ス  
小兒殊ニ初年ノ腦脊髓及ヒ神經ノ實質ハ大人ヨリ水分及ヒ血液ニ富ム、夫レ故ニ小兒ノ神經系ハ感動シ易ク、疾病ヲ受ケ易ク、最幼時ニ於テノミ、後年ヨリ感動スルコト微弱ナリ、容易ニ痙攣ヲ起シ屢々腦ノ痙攣性疾患ニ罹ルモノナリ、而シテ早時ノ亞爾個保兒、咖啡、茶等ノ飲料ハ容易ニ障害ヲ招クモノナリ、

哺乳兒中樞ノ官能ニ就テハ甚ダ不明ニシテ只其一邊ヲ知ルノミ、分産後最



五官ノ發育

視神

初ハヒツチハ氏中樞尙ホ官能作用無シ、而シテ漸次其官能狀態ニ達スルモ  
 ノナルコトハ明ナリ、又最初ハヒツチハ氏中樞ト線狀體ノ傳導ナシ、是レ分鏡  
 後ハ隨意運動ヲ管マザルニヨリ容易ク理解シ得ベシ  
 視神 初生兒ハ羞明アリ而シテ第三週ノ終リニ至レバ眼瞼ヲ閉鎖セ  
 ズシテ光線ニ堪ヘ得ヘシ、第八日ニ至レバ頭部ヲ明所ノ方ニ向ク、是ヲ  
 以テ明暗ヲ辨別スルヲ知リ得可シ、第四週ニ至レバ燭光ヲ動カセバ眼  
 之レニ隨フ、然レハ眼球運動ハ左右不等ナリ、而シテ此ノ運動ハ多クハ  
 第七、八、九ヶ月ノ終末マテ存ス、而シテ第六ヶ月ヲ經過スル迄ハ常ニ存  
 在スル者トス、  
 初生兒ノ眼ハ近視ナリ、然レハ第一年後半期ニ於テハ初生兒ノ角膜強  
 穹窿ノ減少スルニ依リ遠視トナル、而シテ小兒學校ニ入學スルト共ニ眼  
 ハ不良ノ關係ニ遭遇シ、屢々再ビ近視ヲ發ス、初生兒ノ近視ハ只角膜ノ  
 強穹窿ニ依リ、學校近視ハ矢狀眼軸ノ延長ニ依リ起ル者トス、  
 聽神 各初生兒ハ初一時間、屢々又テ第一及ビ第二日ノ間ハ聾ナリ、如

聽神

觸神

味神及ヒ嗅神

骨及ヒ筋肉系

何トナレバ鼓室粘膜ノ上皮下組織ハ甚ダシク腫脹シ、以テ耳小骨ノ突  
 出ニ必要ナル空隙ヲ充填スルヲ以テナリ、此ノ腫脹ノ消失ハ規則上二  
 十四時間後ニ終結シ、之レト同時ニ聽ク可キ機能ヲ始ム、而シテ初メハ  
 尙ホ僅カナレバ直ニ著シク増進シ已ニ六乃至八週ニ至レバ頭部ヲ中  
 等強ノ騒鳴ノ方ニ向フルニ至ル、然レハ小兒ハ大ナル振動鳴ヲ不快ニ  
 感シ、且ツ容易ク驚怖シ號叫スルニ至ル、小兒若シ反射的機能甚シク興  
 奮スルトハ驚愕ハ屢々戰慄、痙攣性抽搐ヲ發シ、素因アルモノハ急痙ヲ  
 合發ス  
 觸神 溫度ノ區別ハ已ニ初生兒ニ於テ知リ得ヘシ、之レ入浴ニ當リテ  
 知リ得ヘシ、又初生兒ハ壓及觸ニ感シ得ル如シ、夫レニ反シテ皮膚ノ部  
 位ニ練習ニ依リ養成セラル  
 味神及ヒ嗅神 味神ハ初生兒ニ於テ已ニ現在ス、嗅神モ亦タ已ニ備レ  
 ル不完全ナリ

骨及ヒ筋肉

總論、健康小兒、骨及筋肉系

骨系統ハ、小兒期殊ニ初年ノ間ハ脈管ニ富ミ、柔軟ニシテ且ツ屈撓シ易シ、此ノ血管富饒ハ、厥衝性疾患ノ素因トナル、此ノ柔軟ハ屈撓及ヒ彎曲ノ原因ヲ爲ス、而シテ下肢及脊椎ノ二部分ハ最も多ク其性ヲ備フ、下肢ノ屢々屈曲スルノ理ハ、頭部ヲ有スル軀幹ノ全重量ヲ負擔スルコトニ依リテ容易ク了解シ得可シ、然レ屢々來ル脊椎屈曲ノ原因ハ次ニ論ズルコトニ依リ明瞭ニ知り得ベシ

總脊椎ハ初メハ軟骨様ナリ、分娩時化骨點ハ已ニ骨膜表面ニ迄達ス、而シテ上下端即チ隣脊椎ニ近接スル部ニハ、化骨點ノ上ニ尙ホ多クノ軟骨ヲ認ム、此ノ部ノ軟骨ハ椎間靱帶ノ纖維軟骨中ニ移行ス、此ノ解剖的關係ハ、全脊椎ニ著シキ柔軟性ヲ與フルコト自ラ明ナリ、分娩時ノ脊椎ハ後年ノ如キ形ヲ成サズ、特有ノ彎曲ハ生活中直立體ノ體位及ビ負擔ノ結果ニヨリ形成スル者ナリ、初生兒ノ脊椎ハ殆ンド直線ニシテ、容易ク後方、前方、側方ニ屈曲セラシムル者ナリ、腰椎ノ固有屈曲ヲ生ズルノ理ハ、プウドケ氏ニ從ヘバ先ツ小兒ガ起立ヲ學バント欲スルヤ、其重點ヲ支點ニ轉置スルヲ以テ脊椎ヲ後方ニ

屈曲セザルベカラザルヲ以テナリ、而シテ脊椎ハ此ノ場合ニ於テ薦骨岬ヲ固定點トシテ屈曲ス、バランデン氏ニ從ヘバ頭部ノ第一固有彎曲ハ、小兒第三ヶ月ニ於テ頭部ノ舉上ヲ試ミ、而シテ頸筋ヲ働作セシムルニ形成ス、腰椎部固有彎曲ハ、其後小兒兩脚ヲ伸展スルニヨリ形成ス、即チ吾人若シ机上ニ仰臥セシメタル小兒ノ上腿ヲ伸展シ、机上ニ壓スルニハ腰部ノ前屈ヲ形成スルコトニ依リ、容易ニ證明スルヲ得、之ニ依リテ腰椎部ノ特有ナル前方ニ向ヒタル凸面ヲ成形スル所以ヲ知ル、第一年ノ終末ニ至リ小兒直立ヲ始ムレバ、重點ハ已ニ腸骨軸ノ前ニ在ラズシテ恰モ腸骨軸ノ上ニアリ、強度ノ上腿伸展及ビ坐骨脊椎筋ノ強働ノ結果ニヨリ、已ニ成立セル腰椎彎曲ハ愈々増加ス、夫レ故ニ常ニ機械的作用例令バ筋ノ働作、脊椎ノ頭部負擔ニヨリ屈曲セラルル者ニシテ、脊椎ノ變化ハ毫モ自動的ナラズ

初生兒ノ長骨ハ、一個ノ骨幹ト二個ノ骨端部ヨリ形成セラル、而シテ前者ハ充分化骨セルモ、後者ハ軟骨ナリ、然レ屢多少ノ化骨點ヲ含有ス、血管ニ富饒ナル骨膜ハ、骨幹部ヨリ斷絶スルコトナク骨端部ノ軟骨膜ニ移

行ス、骨ノ生長ハ、骨幹部ノ末端即チ骨幹部ト骨端部ノ間ニアル軟骨部即チ母骨ヨリ發育シテ其長サヲ増加シ其太サハ骨膜及ヒ軟骨膜ノ下面ニアル層ヨリ増大ス、骨膜ニ生ズル所ノ骨ハ強固ニシテ軟骨境界ヨリ新生スル骨ハ海綿様ナリ、而シテ骨幹部ノ内部ニ於テ成立セル骨組織ノ融解ニ依リ骨髓腔ヲ形成ス、扁平骨ハ骨膜ヨリ發育ス、

頭蓋ノ複雑ナル成長ハ、讀者解剖書及ヒゲルハルト氏小兒科學第一卷ニ就テ見ルベシ、骨盤ノ發育ニ就テハフエーリソング氏婦人科寶函第十及ヒ余ノ小兒衛生學(千八百八十一年)三一六頁中ニ就テ看ル可シ、胸廓ノ發育ハゲルハルト氏小兒科學第一卷第一章ヲ參看ス可シ、齒ノ發生ノ緊要ナル所ハ已ニ上文ニ掲載セリ

筋ノ發育  
初生兒ノ筋系統ハ比較的薄弱ニ發育ス、即チ大人ハ總體重ノ四三、〇九「プロセント」ナルモ小兒ハ二三、四「プロセント」ナリ、加之筋ハ淡色ニシテ水分ニ富ミ、脆弱ナリ而シテ容積ト堅固トノ増進ハ、一般發育ト練習トニ正比例ス、夫レ故ニ初メハ其働カ比較的小僅少ナリ、然レ此ノ働

起立ヲ學ブ時期

力ハ直チニ發達シ、六乃至七歳ニハ大人ノ半量、十四歳ニ於テハ六分ノ五ノ量ニ達ス、小兒ノ最初ノ運動ハ不隨意性、衝動性、反射性運動ナリ、最初ノ意識運動ハ、吾人ハ第二年ノ初メニ於テ目撃ス、而シテ起立ヲ試ミントスルハ第五ヶ月ノ終末或ハ第六ヶ月ノ初メニシテ、第一年ノ終リ又ハ第二年ノ初メニ於テ歩行ヲ初ム、而シテ十四乃至十五ヶ月ニ至テ尙ホ歩行ヲ學ハザルモノハ病的筋薄弱即チ一般孱弱ノ爲ナルカ、過去ノ疾病ニ原因スルカ將タ尙孱弱ノ結果ナルヤ疑ヲ容レザル可カラズ、骨及ビ筋ヲシテ生理的ニ發育セシメント欲セバ須ラク有機體構造ニ必要ナル材料ヲ充分ニ供給スル所ノ營養品ヲ與ヘザルベカラズ然レモ亦々適當ノ練習ニヨリ發育ス

小兒健全學

### 第二章 小兒健全學ノ原則

小兒健全學ハ、身體及ビ精神ノ健康上ノ保護ニ注目セザルベカラズ、故ニ後章ノ各條ニ留意スベシ、

第一 小兒ノ營養

總論、健康小兒、小兒健全學ノ原則

營養

營養ノ種類  
(天然營養及ヒ人工營養)

人工營養ヲ行ハザルベカラザル場合

- 第二 皮膚、衣服、褥ノ保護
- 第三 住居
- 第四 骨及ヒ筋系統ノ保護
- 第五 五神ノ保護
- 第六 精神的健全ノ保護

營養

哺乳兒ノ天然營養トハ母乳ノ營養ナリ、而シテ他ノ方法ヲ以テハ天然營養ト同様ナル成長ヲ得セシムルヲ能ハズ、亦ク體質ノ抵抗力ヲシテ強カラシムルヲ能ハズ、且ツ初生活時ノ最モ困難ナル危險ヲ防禦スルヲ能ハズ、故ニ天然營養ヲ第一トシ、人工營養ハ法則ニ從テ用ザル可カラズ、吾人ハ只一定ノ定約内ニ於テ天然營養ヲ廢止スルヲ得、或ハ廢止セザルベカラズ、即チ

- 第一 母乳分泌量過少ナルキ
- 第二 母乳成分ノ不完全

人乳ノ性状

- 第三 生母結核及ヒ梅毒ヲ病ムキ
- 第四 生母薄弱萎黃病或ハ神經衰弱症ヲ病ムキ
- 第五 母ノ妊娠セルキ
- 第六 生母ニ月經來リ、小兒ハ其間ノミ容体悪シキノミナラズ、一般ニ尋常發育ヲ取ラザルキ
- 第七 乳頭ノ甚クシク小ナルキ、健康ノ母乳ハ帶黃白色ニシテ亞兒加里性反應ナリ、比重ハ凡一〇三〇、〇ニシテ大約二プロセントノ蛋白、三、五プロセントノ脂肪、五プロセントノ糖、〇、二プロセントノ鹽類ヲ含有シ、決シテ小有機體ヲ含マズ、分娩後八日間ノ乳汁ハ蛋白ニ乃至九プロセント、鹽類(〇、三プロセント)ニ富ミ脂肪(二、五プロセント)及ヒ糖分(三、六プロセント)ニ乏シ、而シテ良ク營養セラレタル婦人ノ乳汁ハ、營養惡シキ婦人ノ乳汁ヨリモ脂肪ニ富ミ、長年婦人ノ乳汁ハ、若年婦人ノ乳汁ヨリ脂肪ニ乏シ、貧血性、萎黃病性、新妊娠婦人ノ乳汁ハ、健康婦人ノ乳汁ヨリ凡テ成分ニ乏シキモノナリ、一

定ノ傳染性疾患及ビ乳房ノ脈衝性疾患ニアツテハ乳汁中ニ病的小體ヲ發見ス

人乳ノ消化

人乳ハ凡ソ九七「プロセント」消化シ。糖分ハ全ク蛋白ハ全ク或ハ殆ソド全ク脂肪ハ九七「プロセント」鹽類ハ九〇「プロセント」消化ス

初生兒授乳時期

初生兒ノ最初ノ授乳ハ已ニ分娩日ニ於テ初ム、而シテ母乳尙ホ少シモ分泌セザルキハ、人工乳皮混合物一分、水十四分或ハ殺菌牛乳一分、水三分ノモノヲ與ヘ、決シテ茴香茶、カミルレ茶、砂糖水等ヲ與フ可カラズ

授乳ノ度數

授乳ノ食量

授乳ハ毎日殆ソド七回トシ、可及的早時ヨリ食物ノ規律ヲ立ツ可シ授乳時ト授乳時トノ間ハ二時四分ノ一乃至二時二分ノ一時間ヨリ決シテ早カル可カラズ各授乳時間ハ凡ソ二十分時間ニシテ毎日與フル乳汁ノ量ハ凡ソ體重ノ七分ノ一量ヲ與フ、即チ第四日ニハ二五〇〇瓦第四十日ニ於テハ六五〇〇瓦、第百五十日ニ於テハ凡ソ九二〇〇瓦、第百八十日ニ於テハ凡ソ一〇〇〇瓦ノ乳汁ヲ與フ

換食ノ時期

シテ可及的漸次ニ行ヒ十二日乃至十四日間ヲ費シテ離乳ス可シ、然レテ第十ヶ月ニ於テ通例ノ體重増加ヨリ少ナキキハ、已ニ離乳ヲ行ハザル可カラズ、已ニ第七ヶ月乃至第八ヶ月ニ於テ體重増加通例ヨリ少キキハ天然營養法ヲ改良スルヲニ注意ス可シ、而シテ事情ノ許スキハ離乳ハ決シテ夏期ニ行フ可カラズ

乳母選擇法

若シモ母乳ヲ授與スルヲ能ハザルキハ、只ダ乳母營養ヲ以テ此レニ換ヘザル可カラズ、此ノ如キ場合ニ於テハ、乳母ノ撰定ヲ正確ニ行フ可シ其撰定法ハ左ノ如シ

第一 乳母ハ健康ニシテ、非結核性、血族ナラザル可カラズ、而シテ腺病、尙使

病ヲ病マズ、勿論梅毒ノ感染ナク、疥癬及ビ蜜果癬ヲ病ム可カラズ、

第二 乳母ハ十八年ヨリ若カラズ、而シテ又三十二年ヲ越ユ可カラズ、此ノ

如キ乳母ハ十八年ヨリ若ク或ハ三十二年ヨリ長シタル乳母ニシテ

其乳ノ分泌量及ビ成分ニ富ムヲ疑ヒナキモノヨリモ更ニ其乳ヲ充

分ニ分泌スルヲ保證シ得可キナリ

第三 乳母ノ分娩時ハ可成小兒ノ分娩ニ近接セザル可カラズ、然レモ乳母ハ少ナクトモ四週以前ニ分娩セシ者ヲ撰ブ可シ

第四 乳母ハ能ク發育セル乳房ト乳頭ヲ有セザル可カラズ、而シテ適當ノ壓迫ニヨリ乳頭ヨリ數條ノ乳汁ヲ噴出セザル可カラズ

第五 乳母ノ乳汁量ハ授乳ス可キ哺乳兒ニ充分ニシテ、其性質ハ善良ナラザル可カラズ、而シテ其可否ヲ判断センニハ第一ニ乳母ノ小兒ヲ検査スルヲ要ス、即チ其小兒ハ體重輕カラズ、蒼白且ツ枯瘦セズ、皮膚發疹及ビ疑ハシキ鼻加答兒無ク、腸ノ排泄尋常ナラザル可カラズ、而シテ其小兒若シ死セルモ其乳母ニ價值ヲ置クハ、小兒ノ死因ヲ探索シ、而シテ現時尙ホ營養スルニ充分ナル乳量ヲ分泌スルヤニ注意ス可シ、如何トナレハ小兒ノ吸引スルヲ無キモハ乳腺分泌ハ非常ニ速ニ減少スルヲアレバナリ、其他乳汁ノ色、濃淡、反應、比重、脂肪含有量及ビ顯微鏡的關係ニ注意ス可シ、而シテ一回ノ分泌ヲ檢スルモ眞ノ價值ヲ知ルヲ能ハザルガ故ニ乳汁乳腺内ニ充分滿タル時、半ハ分泌セシ

人工營養法

時及ビ全ク分泌セシ時ノ三種ノ乳汁各三、五乃至五、〇立方仙迷ヲ推取シ、之ヲ可及的速ニ検査ス可シ

乳兒ノ各人工營養法ハ、可及的前述セル天然營養法ヲ模範トシテ行ハザル可カラズ

人工營養法ニ關スル要點ハ即チ左ノ如シ

- 一 小兒身體ノ保持及ビ發生ニ樞要ナル營養物ヲ充分ニ給ス可シ然レモ又過度ニ給ス可カラズ
- 二 人工營養物ハ、可及的善良ナル母乳ノ如キ性分ヲ有セザル可カラズ
- 三 人工營養物ハ、其母乳ノ如ク容易ニ消化スル性状ナラザル可カラズ
- 四 人工營養物ノ濃淡ハ、母乳ニ一樣ナラザル可カラズ
- 五 母乳ノ如ク凡ソ攝氏三十八度ノ溫度ヲ保タザル可カラズ
- 六 人工營養品ハ酸、腐敗、腐敗及ビ醱酵素及ビ毒素ノ如キ害ヲ與フル物質、或ハ物體ヲ含有ス可カラズ、
- 七 人工營養物ハ乳汁ノ如ク凡テ徐々ニ且ツ法則ニ隨フテ與フ可シ

夫レ故ニ左ノ條件ハ禁止ス可シ

(一) 各非液體食物

(二) 多量ノ澱粉及ビ植物纖維ヲ含有スル各食物

(三) 多量ノ糖分ヲ含ム食物

(四) 同化シ難キ蛋白質ヲ含ム各食物

人○工○ノ○營○養○法○ニ○向○テ○最○良○ノ○材○料○ハ○動○物○乳○ナリ、而シテ動物ノ乳類中ニ於テ實際上ノ便宜ニヨリ多分ハ牛乳ヲ撰用ス、然レモ牛乳ハ人乳ヨリ多量ノ蛋白質及ビ鹽類少量ノ糖分ヲ含有シ、蛋白質ハ人乳中ノ蛋白質ノ如ク容易ニ消化セズ、而シテ牛乳ノ運搬中ニ種々ノ菌芽、酸酵素及ビ腐敗素、時トシテ傳染病毒ヲ混入ス、此ノ原因ニヨリ牛乳ヲ撰拔スルニ注意ヲ要ス、即チ先ヅ第一ニ健康ニシテ良ク飼養セラレタル牝牛ノ新鮮ナル乳汁ヲ撰ブ、而シテ數種ノ牛乳ヲ混合セシモノヲ良トス、然レモ若シ一牛常ニ平等ニ且ツ正當ニ飼養セラレ、其牛乳ヲ優レリトス、牛結核、脾脫疽、肺結核、齋瘡、口、シラウエン、ツイ、病ヲ病メル牛乳其他猩

牛乳ノ撰擇法

紅熱、或ハ實布帝里恢復期ノモノヨリ抽出シ、或ハ病室ニ貯ヘタル乳汁或ハ窒扶斯、或ハ猩紅熱ノ浸襲シタル家ノ各乳汁、及ビ酸性、褐色、赤色、及ビ粘稠ナル、或ハ粘液様乳汁ハ宜シク禁止ス可シ、正當ニ撰拔シタル牛乳モ、哺乳兒營養ノ目的ニ向テ尙ホ適當ナル處理ヲ要ス、即チ牛乳ヲ貯藏シ、乳汁中ニ存在スル酸酵素及ビ病毒ヲ無害ニナシ人乳ニ可及的類似セシム

牛乳ノ貯藏法并ニ殺菌法

乳汁ノ酸性變化ヲ防禦シ、且ツ乳汁中ニ存在スル菌芽ヲ撲滅センガ爲メニ熱ノ作用ヲ使用ス、乳汁ハ絞搾後直チニ煮沸スル一五乃至十分時間ナルモ、少ナクトモ二十四時間貯藏シ得可シ、而シテ同時ニ總テノ菌芽及ビ乳汁中ニ存在スル各病毒ヲ無害ト爲シ得可シ、乳汁中ノ全小有機體ヲ撲滅センガ爲メ、乳汁ヲ乳汁殺菌裝置中ニ置キ半時乃至四分三時間水蒸氣ヲ通過セシム、此ノ目的トシテ「ソックスレット」氏ノ牛乳殺菌器或ハ之レニ類似スル殺菌器ヲ供用ス、又適當シタル殺菌法ニヨリ乳汁ヲ一日間貯蓄シ、且ツ病的菌芽ヲ撲殺シ得可シ、即チザイデンスチッケ

牛乳ノ稀釋法

ル氏殺菌装置中ニ十五分時間先ツ暖メ七十五度ニテ十五分間熱シ而シテ後三十分間冷却ス

牛乳ハ人乳ヨリ多量ノ蛋白質及ビ鹽類ヲ含有スルガ故ニ水ヲ以テ稀釋セザル可カラズ

余ハ善良ノ乳汁(蛋白質四)プロセント(脂肪三、六)プロセント(ニ)付キ左ノ法則ニ隨テ稀釋スルヲ最モ適當ナリトス

第一日及ビ第二日	間	一分ノ乳汁	三分ノ水
第三日ヨリ第三十日	間	ニ分ノ水	
第三十日ヨリ第六十日	間	一分ノ水	
第六十日ヨリ第八十日	間	0.75分ノ水	
第八十日ヨリ第一百一十日	間	0.5分ノ水	
第一百一十日ヨリ	間	0	

然レ凡牛乳ハ只稀薄スルノミナラズ糖分ヲ加入セザル可ラズ、如何トナレバ人乳ハ多量ノ糖分ヲ含有スレバナリ、人乳ハ五(五)プロセント(牛乳

牛乳ニ糖分ヲ加入スル

ハ三、七五乃至三、八(八)プロセント)ヲ含ム、故ニ稀薄セザル牛乳ノ一〇〇〇立方仙迷中ニ一、二〇瓦或ハ凡ソ三茶匙ノ砂糖、牛乳及ビ水等分ノ混合物二〇〇立方仙迷中ニ六、三瓦ノ砂糖或ハ凡ソ一茶匙半ノ砂糖ヲ加入セザル可カラズ、而シテ蔗糖或ハ乳糖ヲ用ユルモ同一ナリ、水及ビ砂糖ノ加入ニヨリ調製セル牛乳ハ只化學的集合ヲシテ人乳ニ類似セシメタリト雖モ、牛乳ハ尙ホ依然トシテ牛乳ナリ、故ニ人乳ヨリ消化シ難シ、夫レ故ニ當時此ノ缺點ヲ除クコトヲ得ザルヤ否ヤ研究中ナリ

消化佳良ナルキハ、酸酵素ヲ撲滅シ、殺菌作用ヲ爲スモノナリ、而シテ此ノ酸酵素ノ生存ハ容易シ消化障害ヲ起ス可キ酸酵素産生物ヲ形成スルモノナリ、牛乳ノ消化ヲ佳良ナラシムルノ方法ハ、大麥或ハ裸麥ノ蒸汁ヲ以テ水ノ加入ト同様ノ比例ヲ以テ牛乳ヲ稀釋スルニアリ、牛乳ニ脾液素ヲ混ズルヲ以テ一層ノ價值アルモノトス、若シ爲シ得ベシハ蛋白質ノ一部分(ペプトン)化セル良好ノ味アル製劑即チラールマン氏

牛乳ヲ消化シ易カラシムル法



ノ人工的母乳ノ如キモノヲ用ユルヲ善シトス

然レモ此ノ終末ニ記載セシ二品ハ若シ小兒殺菌牛乳ニ堪ヘザルノモ  
ニノミニ使用ス

牛乳ノ温度

牛乳ノ温度ハ凡ソ攝氏ノ三十八度ニ近カル可シ而シテ授乳時間中  
モ亦タ此ノ温度ヲ保有セシム此ノ目的ニハ吾人ハ乳瓶ヲ毛氈或ハ  
ふらんねる片ヲ以テ被包ス

哺乳器

哺乳ノ時間

飲料器ハ善良ノ哺乳瓶ヲ用ユ此ノ瓶ハ内容物ヲ自カラ流出スルコトナキモ  
能ク吸飲シ得ザル可カラズ此ノ目的ニ小孔ヲ開口ス然レモ此ノ孔ハ全ク  
小ナラシムル可カラズ之レ哺乳ノ際甚シク努力ヲ費サシメザラシメンガ  
爲ナリ而シテ乳兒ノ哺乳ハ十八乃至二十二分時間トナス可シ吸口ハ多ク  
ハ長圓乳頭形ニシテ金屬ヲ含マザル護膜ヨリ製セルモノヲ良シトス骨或  
ハ象牙ヨリ成ルモノハ乳兒ノ膈キ粘膜ニ對シテ硬固ニ過ク可シ善良ニシ  
テ容易ク清潔ニナシ得ル瓶ハ獨國ノ專賣特許二七、六五二號ヲ良シトス此  
ノ瓶ハ鉛ヲ含マザル(ブリタンニア)金屬栓ヲ有シ木栓及ビ護膜管ナクシテ

哺乳器ノ清潔法

只硝子管及ビ球瓣ヲ有ス其哺乳器ハ極メテ丁寧ニ清潔ニセザル可カラズ、  
法ハ粗ナル刷毛、細少白色ノ砂及ビ沸水ヲ以テ洗滌ス而シテ護膜吸口及ビ硝  
子管ハ注意シテ清潔ニセザル可カラズ  
清潔ニセル硝子瓶ハ、菌芽ヲシテ少シモ附着セザラシム可シ而シテ此瓶中  
ニハ前述ノ原則ニ隨テ調理セル營養品ヲ容レ共ニ殺菌スルヲ最モ良トス、  
瓶ヲ清潔ニスルニハ先ヅ温水ヲ入レ、次テ熱湯ヲ充滿シ冷却ニ至ル迄放置  
ス可シ

人乳營養ト牛乳營  
養ト哺乳時間及ヒ  
其分量ノ差異

牛乳營養ニ於ケル哺乳度數ハ天然營養ヨリモ多カル可カラズ殊ニ天  
然營養ヨリ哺乳時ヲ早ム可カラズ如何トナレハ牛乳ハ人乳ヨリモ少  
シク消化スルコト遲キヲ以テナリ  
人工營養ニ於ケル各哺乳時ノ乳汁量ハ經驗的天然營養ノモノヨリ多  
シ其多量ヲ要スル所以ハ牛乳ノ營養分少ナキニヨル之レ牛乳ハ少ク  
トモ初期ニ於テ稀薄セラルレハナリ加之牛乳營養ノ價值ハ人乳ヨリ  
凡ソ三分ノ一少ナキモノトス然レモ資性、體重及ビ乳汁ノ性質ニ關係



二年乃至六年小兒ノ營養

事〇〇數〇ハ一日ニ五乃至六度ニシテ食物ノ溫度ハ微温ナルヲ要ス、

### 三年乃至六年小兒ノ營養

第二年ノ經過スルト共ニ消化器ハ漸次抵抗力ヲ増シ、疾患ニ罹ルノ度ヲ減ズ、然レモ此ノ年齢ノ小兒ニ在テモ亦タ尙ホ硬固食物ハ消化シ難シ、而シテ植物纖維ニ富ム食物モ亦タ然リ、植物性ノ營養品ノ習慣嗜好ハ腺病質之レヲ促スモノナリ、蓋シ此ノ場合ニ於テ同時ニ不攝生ノ共同スルヲアレハ殊ニ來リ易シ、茶、咖啡、酒及ビ麥酒ハ尙ホ此ノ時期ニ於テ害アリ、如何トナレハ此ノ物質ハ刺激シ易キ神経系ヲ甚ダシク興奮セシムレハナリ、而シテ甘味ハ消化器ヲ容易ク障害スルモノナレハ避ケザル可カラズ、

三年乃至六年小兒ノ食物ハ、液體糜粥或ハ軟質ナラザル可カラズ、即チ此ノ食品ヨリ注意シテ調理セラル乳〇汁〇乳〇乳〇乳〇乳〇乳〇、牛〇卵〇肉〇牛〇酪〇加〇阿〇羅〇麵〇、小〇麥〇麵〇、麵〇類〇米〇、碎〇磨〇セル大豆〇粉〇、些〇少〇ノ馬〇鈴〇薯〇、胡〇蘿〇蔔〇、玉〇菜〇、百〇部〇根〇、然〇セル果〇實〇、乾〇燥〇果〇實〇、其〇他〇肉〇、乳〇汁〇及ビ砂〇糖〇ヲ混〇シ〇タル稗〇麥〇、咖啡〇或ハ小〇麥〇、咖啡〇ナ

リ、食時ノ數ハ一日五回トス

### 七年乃至十四年小兒ノ營養

七年乃至十四年小兒ノ營養

第七年以後ノ小兒ハ其消化器ノ機能及ビ抵抗力漸次大人ニ類似ス、十一年乃至十二年ニ於テハ實ニ屢々大人ヨリ勝ルヲアリ、第十一乃至第十二年ノ時期ニ於テ最モ注目ス可キヲハ、女子ハ多クハ男子ヨリ早ク筋肉重量ノ増加盛大トナリ、以テ第十四年ニ至ル、而シテ毎日ノ増加ハ九乃至十年ノ小兒ハ只四、七乃至五、瓦ナルモ、十一年乃至十二年ニ至リテハ七乃至八、瓦、十三年乃至十四年ニ至リテ一二、七、瓦ヲ増加ス、之レニ順シテ食物即チ蛋白質ノ需用ハ甚ダ多量ナルモノトス、  
食物ノ撰擇ニ就テ論ズレバ、實ニ大人ニ堪ユル食物ヲ以テ目的ヲ達シ得ルモ植物纖維ニ富メル食物ハ尙ホ常ニ注意ヲ要ス可シ、而シテ動物性蛋白質ハ常ニ注意シテ少ナカラシメズ、可及的需用ノ半ヲ超過セシム可シ

### 口及ビ齒ノ保護

口及ビ齒ノ保護

口内清淨ハ各人ノ健康ニ向テ缺ク可カラザルモノナリ、殊ニ哺乳兒ニ於テ然リ、如何トナレバ口内ニ殘留スル乳汁ハ小寄生物ニ向テ最良培養基トナリ、口内粘膜ニ甚ダ損傷ヲ起シ易ク、且ツ容易ニ齶口瘡ヲ發スルヲ以テナリ、哺乳兒ノ口内ハ清潔ナル柔軟麻布片及ビ清水ヲ以テ注意シテ良ク洗滌ス可シ、然レモ第一週ニ於テハ麻布ノ強ク觸ル、ニヨリ粘膜ノ破瘡(ベドナル氏亞布答)ヲ形成スルコトアルヲ以テ須ラク注意セザル可カラズ

「ルツチゴイトル」(二度燒麩麩、砂糖及牛乳ノ混合物)ヲ麻布ニ包ミ小兒ヲシテ吸嚙セシムルモノハ嚴重ニ禁止セザル可カラズ、如何トナレバ彼ノ表面ニ附着セル有機酸及ビ微菌ヲ以テ成立セル不潔物ヲ口腔内ニ輸送セラルレバナリ

生長セル小兒ノ口内清潔法ハ、毎朝及ビ毎食時必ズ洗滌スルニアリ、口腔内ノ清淨ニ注意スルハ、齒牙ヲ保護スルノ主眼ニシテ、其初メハ上述ノ如ク保護シ、而シテ後毎日少クモ一回ハ粗ナル麻布或ハ中硬ノ刷

皮膚ノ保護

浴湯ノ溫度

入浴ノ度數

入浴時ノ心得

毛ヲ以テ清潔ニ爲ス可シ、而シテ此ノ局所保護ノミチ行フヲ以テ足レリトセズ、亦タ凡テ齒牙ニ向テ直接及ビ間接ニ障害ヲ及ボス食物、即チ甘味アル、熱キ又ハ寒冷ナル食物及ビ飲料等ヲ避ケザル可カラズ

皮膚ノ保護

身體ノ清淨ハ入浴及ビ洗滌ヲ用ユ、第一ノ浴ハ臍帶切斷後直チニ行フ、而シテ攝氏三十五度即チ列氏二十八度ノ温水ヲ用ユ、浴ハ毎日之レヲ行ヒ、其入浴時間ハ凡ソ三分時間トス、而シテ六ヶ月ニ至レバ列氏二十七度、十二月ニ至レバ列氏二十六度トナス可シ、一乃至二年ノ小兒ハ隔日ニ行ヒ、尙ホ成長セル小兒ハ每週一乃至二回行フ

入浴ノ他局處洗滌ハ、缺ク可カラズ、初生兒及ビ哺乳兒ハ温水ヲ以テ皮指及ビ他ノ不潔物ノ附着セル處ヲノ部分殊ニ腋窩、股間、膝窩、肛門部、陰部及ビ頭部ヲ注意シテ洗滌セザル可カラズ、頭部皮膚ノ清潔ハ殊ニ注意ヲ要ス、即チ二ヶ月ノ乳兒ニ就テ頭門ノ部位及ビ其周圍ニ上皮細胞、皮脂及ビ不潔物

臍ノ保護

ノ混合ヨリ成立スル所謂脂肪漏ト名クル所ノ黄灰色ノ鱗狀管ヲ附着ス、若シ之レヲ正當ニ除去セザルキハ、甚ダ屢々其下ニ小膿疱ヲ發生シ、其内容物脂漏ト混合シ不快臭ヲ放ツ所ノ痂皮ヲ造ル、而シテ此ノ下ニ膿汁集積シ、外方ニ流出スルコト能ハザルヲ以テ、屢々全痂皮ノ下ヲ通行ス、之ヲ防グニハ宜シク頭部ヲ充分ニ清潔ニ爲サザル可カラズ、新生シタル剝皮ハ清潔ナル阿列布油或ハ石鹼水ヲ以テ軟化シ、然ル後ふら入れる片ヲ以テ之ヲ拭去ス可シ

初生兒ノ臍ハ最モ注意シテ保護ス可シ、如何トナレハ臍ハ充分ニ癒痕ニ至ル迄ハ病的小有機體殊ニ破傷風「バチルス」丹毒「コッケン」膿球「コッケン」ニ向テノ甚ダ侵入シ易キ關門ニシテ、加之危險ナル出血ノ原因トナレハナリ、而シテ臍ノ保護ヲ舉行スルニハ先ヅ手ヲ清淨ニシ、次テ消毒ス、結紫ハ健康時ニアリテハ、先ヅ脈搏ノ停止後清淨ノ麻紐ヲ以テシ消毒シタル缺ヲ以テ切斷ス可シ

臍帶殘痕ハ二「プロセント」ノ「リグール」水或ハ三「プロセント」石炭酸水ニ

衣服

ヲ洗滌シ、之レヲ上左方ニ少シク曲ゲ、撒爾矢兒酸綿ヲ以テ被包シ、臍帶ニ固定ス、繃帶ハ毎日交換ス、其際殘痕ヲ牽引又ハ動搖ス可カラズ、殘痕脫離スルキハ、創面ヲ毎日一度三「プロセント」石炭酸水ヲ以テ洗滌シ、撒爾矢兒酸綿ヲ以テ拭ヒ乾燥シ、五「プロセント」硼酸軟膏ノ附着スル布片ヲ以テ被包ス、若シ表面頑固ニ化膿スルキハ三「プロセント」石炭酸水ヲ以テ之ヲ洗滌シ、之レヲ拭ヒ後二「プロセント」硝酸銀水一滴ヲ滴下シ、後一分ノ硼酸末三分ノ澱粉ヨリ製スル粉末ヲ撒布ス、而シテ癒痕形成後ニ至リテモ尙ホ結紮糸ヲ留ム可シ、如何トナレハ薄弱部ハ容易ク「プロ」ル「フ」ヲ形成スレハナリ

初生兒及ビ乳兒ノ衣服ハ適當ニ溫暖ニシテ夏ク乾燥シ、皮膚ヲ壓迫セズ、孱弱ナル皮膚ヲ刺戟セズ、呼吸、血液循環及ビ運動ヲ妨ケズ、而シテ容易ニ着シ或ハ脱スルヲ得ルヲ要ス、衣服ハ釦或ハ紐ヲ用ヒ、決シテ帽子針ヲ以テ固定ス可カラズ、第一週ノ衣服ハ尤モ適當トシテ、軟麻布ノ下腹部ニ達スル肌着、腰部、陰部、上腿ヲ被フ三角形麻布ノ襠褌、胸部及ビ脚

部ヲ纏絡スル所ノ四角形ふらんねるノ襦袢袖ヲ有スル短上衣及ビ麻布ノ頭巾ヲ用ユ是レ等ニ紐ヲ要セズ、四角ノふらんねる襦袢ハ腕ヲ避ケ適當ニ固ク胸部ヲ卷キ固定シ、而シテ各襦袢ノ足端ヲ超ユル部分ヲ後方ニ折り上ク可シ、頭巾ハ室内ニアルキハ必用ナラズ、只ダ寒冷ノ時季外出スルキニ於テノミス、而シテ其頭巾ハ網様ニ穿孔スルモノヲ用ユ、上述ノ着衣ハ第三ヶ月ノ中頃或ハ終末迄使用シ、然ル後肌着ヲ上腿ノ中央ニ達スル迄長クス、而シテ膝ニ達ス可キ無色ノ毛製靴足袋ヲ用ユ、然レモ決シテ膝部ヲ紐ニテ固定ス可カラズ、而シテ靴足袋ノ足部ニ毛製靴ヲ穿タシム、肌着ノ上ニハふらんねる短表衣ヲ着セシメ、紐ヲ以テ足部ニ達スル所ノ下着ト固定ス、而シテ短上衣及ビ下着ノ上ニハ長キ足部ニ達スル胸衣ヲ着ス、腰部、上腿、陰部ニハ再ビ三角形ノ麻製襦袢ヲ置キ、此ノ下端ハ前方ニ折り上ゲ、下腹ノ前ニテ固定ス、小兒歩行ヲ試ムルキハ下着ヲ少シク胸着ヲ多ク短縮ス、毛製靴ノ代トシテ軟皮ヨリ製セル靴ヲ穿タシメ、襦袢ノ代トシテ軟麻ヨリ製スル小

袴衣ヲ用ユルモ可ナリ、衣服ハ長ク濕潤ヲ止ム可カラズ、随テ多クノ衣服ヲ準備シ置カザル可カラズ、衣服殊ニ腹部纏絡布ノ充分ナル清淨ヲ要ス、成長シタル小兒ノ衣服ハ「ウツェルマン」ノ小兒健全學(一八八一年發行第二八三頁)ヲ見ヨ

臥床

臥床、乳兒ハ特ニ臥床ヲ設ケ、充分ニ清潔ノ空氣ヲ呼吸セシメ、壓迫ノ危險ナカラシム、而シテ固定セル脚ヲ有セル籠臥榻ヲ最モ適當トス、小兒ヲシテ惡習セシメザルキハ、搖床ハ實ニ缺ク可カラズ、然レモ激烈或ハ不寧ニ動搖スルキハ障害ヲ招クニ至ル可シ、臥床ノ裝具ニハ臥褥(馬毛)、枕(馬毛)臥床ノ上ニ二重ニ置ケル毛布、ぐつたべるか製ノ蓆、麻布ノ被覆、一或ハ二ノ蒲團ヲ要ス、而シテ初三ヶ月ノ間ハ羽毛ヲ其トス、臥床ノ位置ハ小兒ヲシテ明處ニ向ハシメズ、又光線ハ一方ヨリ強ク、一方ヨリ弱ク入ラシム可カラズ、小兒ハ臥床中ニアリテハ殆ンド水平ノ位置ヲ取ラシメ頭部ヲ僅ニ高クス

### 住居

小兒ノ住居ハ可及的廣潤ニシテ乾燥ナル可シ、可及的良ク換氣シ日光ヲ入ラシム。而シテ南方ニ向フナ良シトス、冬ノ温度ハ列氏十五度ヲ保タシム、即チ暖爐ヲ以テ暖メザル可ラズ、暖爐ノ周圍ハ鐵柵ヲ以テ圍ム可シ、夏時ハ注意シテ朝夕屢々空氣ヲ交換シ又々時々格子窓ヲ外シテ冷却ス可シ、人工的照明ハ釣らんぶヲ用ユルヲ最モ良トシ、寢室ハ可及的南方ニ置キ、若シ能ハズンハ東南方或ハ西南方トス、室ハ廣潤ナ良トス、冬時ハ成長セル小兒ハ列氏十度乃至十三度、而シテ三年迄ハ列氏十三度乃至十五度ニ暖ム可シ。

### 骨及ビ筋系統ノ保護

骨及ビ筋系統ノ適當ナル保護ハ已ニ上述セシ如ク、小兒ノ正シキ營養並ニ軀幹及ビ四肢自由運動ノ各障害ノ除去ヲ第一トス、其他發育ノ生理的順路ニ反シタルヲ及ビ小兒ノ勢力ヲ強カラシメントシテ強テ早時ニ起坐、起立、及ビ歩行ヲ營マシメザルヲ必要トス、歩行椅子及ヒ走行

椅子ハ不用ニシテ、引紐(小兒ノ歩行ヲ習ハス爲メ)ハ無益有害ナリ、乳兒ノ骨及ビ筋肉ハ柔弱ナル故ニ、體位ハ大ニ注意ヲ要ス、第六ヶ月ノ間ハ常ニ水平ニ置ク可シ、而シテ其後ト雖、凡テ鉛直ニ抱ク可カラズ、學童ノ保護ニ就テハ學校病ノ條下ヲ見ヨ、小兒若シ歩行ヲ學ブニ至ルキハ、筋肉ノ練習ハ全ク其天性ニ放任シ、只ダ之ヲシテ損傷セシメザルヲ注意スレバ足レリ、成長セル小兒ニアリテ練習ノ緊要ナル方法ハ運動的遊戯ナリ、學童年齢ニアリテハ整式ノ體操、平原ニ於ケル運動、游泳、水滑ナリ、球遊等最モ効アリ、

### 五官器ノ保護

初生兒ノ眼保護ハ光線ヲ防禦スルニアリ、即チ生後第三週ニ至ル迄ノ間ハ羞明アルヲ以テ先ヅ初メハ薄暗所ニ居ラシメ、然ル後漸次日光ニ習慣セシム、學童ノ眼ハ近視ヲ起スノ危險アリ、此ノ豫防法ハ學校病ノ下條ヲ看ヨ、初生兒膿漏性結膜炎ハ其條下ニ就テ見ル可シ、眼ノ練習ハ種々ノ形狀ヲ有スル物體ヲ示スヲ以テ最モ良トス、而シテ

聽神ノ保護

幾何學的圖、色彩ノ教授ニヨリ、就中廣野、星天及ビ平原ニ於ケル物體ノ目擊ニヨリ練習セシム

小兒ノ聽神保護ハ初生兒期ニ於テ殊ニ必要トス、初生兒ハ強騒鳴ヲ嫌忌シ、且ツ之ガ爲メノ反射興奮甚ク大ナルヲ以テ、勉メテ之ヲ避ケザル可カラズ、猩紅熱及ビ腦脊髓膜炎ニアツテハ深ク注意ス可シ、如何トナレハ強騒鳴ニヨリ病勢ヲ増進セシムレバナリ

聽神ノ練習ハ戲曲、唱歌、音樂ニヨリテ其目的ヲ達ス可シ

精神ノ保護

精神的生活ノ保護

小兒ノ全精神的生活ハ五官上即チ有形的外界ノ事物ニ隨伴スル者ニシテ、小兒ハ其初メニ當リテハ久シク無形のノ觀念ヲ有セザルモノナリ、而シテ育兒ノ急務ハ先ツ此ノ事實ニ注意スルニ在リ

其レ故ニ小兒ノ精神養育ハ即チ其五官ノ養育ニ外ナラズ、而シテ其主要トスル所ハ小兒ノ五官秩序的ニ發育スルヤ否ヤ、及ビ其刺激ヲ感受スルコト正當ナルヤ否ヤヲ注意スルニアリ

又小兒ハ不絶働作シ、摸倣ヲ好ミ、衆人ト共ニ居ルコトヲ欲シ、或ハ事物ヲ知ラントチ務ムル等ノ性質非常ニ顯著ナルヲ以テ、吾人ハ宜シク其行為ノ方針ヲ指導シ、且ツ其行為ヲ正ニ其小兒ニ適セシメザル可カラズ、是故ニ小兒ノ教育ハ、夙ニ其健強ナル感動力ト、堅固ナル思想力トヲ養成シ、行為ニ對スルノ自治、及ビ苦痛ト缺乏トニ對スルノ忍耐ヲ學ハシメザル可カラズ

學術上ノ教育ハ假令ヒ其最モ單簡ナルモノトスルモ、滿七歳ニ至ラザレバ、決シテ之ヲ授ク可カラザルコトハ、腦ノ發育ニ關スル研究ニヨリ生シタル確定ノ成績ナリトス、蓋シ此ノ時期ニ於ケル神經系統ノ中樞、殊ニ考慮ヲ司ル部分ノ發育ハ、其五歳前及ビ永遠ノ後年ニ於ケル時ニ比シテ著シク強大ナルヲ以テナリ、斯ノ如ク發育強大ナル機關ハ、其保護モ亦タ甚ク周到ナラザル可カラズ、彼ノ小兒ヲシテ極メテ早ク學事ニ就カシムルモノハ、亦タ早ク精神ノ衰弱ヲ來シ、且ツ身體ノ健康ヲ害スルハ、已ニ幾多ノ經驗ノ證明スル所ナリ、又滿七歳ニシテ學事ニ就ク



モノハ、容易ニ其早ク已ニ學事ニ就ケル長者ニ追及シ若クハ凌駕スルヲ甚ダ多シトス。然レモ精神教育最後ノ目的ハ、各種ノ精神的能力即チ觀察、判斷、考慮、思想、感動、心情ノ諸力及ビ優美ト高尚トノ能力ヲシテ、可成的完全ニ、且ツ互ニ相並行シテ發育セシムルニアリ、特ニ或ル二三ノ能力ノ發育ヲ望ムモノニハ非ザルナリ。

追加

早産兒ノ保護

早産兒ノ保護、早産兒ハ凡テ刺戟即チ低温ニ向テノ抵抗力甚ダ弱ク、身體ノ官能甚ダ薄弱ナリ、故ニ謹慎ナル保護ヲ要ス。第一ニ温暖ニ保ツ可シ、其目的ニハ麻布被包ヲ用ヒズふらんれるヲ以テ纏絡ス、此ノ上チ尙ホ厚層ノ綿ヲ以テ被包シ臥床中ニハ仰たんにテ容ル可シ、亦タタルニール氏温箱或ハアウグアルド氏蒸氣床ノ如キ特別ノ温装置ヲ用ユ、而シテ病院ニ在ルチ最モ適當トス、(ミユルレル氏小兒治療年報第二十五卷第一七九〇頁ヲ看ミ、室内ノ温度ハ平等ニ列氏十六度ナラザル可カ

ラズ

薄弱ナル小兒ハ哺乳スル力弱ク且ツ其時間短キヲ以テ屢々營養ニ困難ナリ、夫レ故ニ温メタル人乳、或ハ水ニ混セル乳皮混合物ヲ茶匙ヲ以テ與フ、又營養品ハ鼻漏斗ヲ以テ鼻孔ヨリ或ハ食道消息子ニヨリ送ルヲアリ。小兒ヲ屢々抱クコトハ太ダ緊要ナリ、之レニ由テ小兒ヲシテ號泣セシメ、而シテ深ク呼吸セシメンガ爲ナリ、其他口内ヲ清潔ニスルチ必要トス、然レモ注意シテ粘膜ヲ損傷ス可カラズ、又各種ノ粗暴ナル動搖ハ必ず禁止ス可シ、早産兒ハ入浴セシメズ、生活力ノ旺盛ニ至ル迄只タ温水ヲ以テ洗滌ス可シ、小兒健全學ノ引用書目ハ次ノ如シ、ペドナル氏小兒養生論一八五七年、ゲルハルド氏小兒病論中ノヤコビー氏ノ説、ボウクワト氏ノ小兒衛生學一八七九年、ラーア氏小兒生理、病理及ビ治療學一八八三年、ビーアルト氏乳兒營養論一八八〇年、ウツフェルマン小兒衛生學一八八八年。

第三章 小兒疾病通論  
症候學及ビ診斷法ノ一般

總論、症候學及ビ診斷法ノ一般

小兒ノ機嫌ノ變化

病兒ハ共通症候ヲ呈ス、此ノ症候ハ小兒身體及ヒ精神ノ特別ナル性質ヲ熟知スル實驗家ノ最モ緊要トスル所ナリ、如何トナレバ小兒ハ甚ダ速ニ障害ノ存在ヲ示スモノニシテ、且ツ多クハ未ダ言語ヲ以テ自己ノ感覺ヲ告ケ、或ハ部位ヲ示スヲ能ハザルモノナレバナリ

小兒ノ健康ニ障害アルキハ、已ニ上述セシ如ク機嫌ノ變化ヲ以テ示ス、健康ナル小兒ハ爽快ニ且ツ毫モ介意セズシテ遊戯シ、莞爾ス、病兒ニアリテハ機嫌悪シク、獨語シ、獨居シ、屢々感動シ易ク、不快ニシテだましすかすヲナクテハ遊戯及ヒ莞爾セズ、重キ疾病ニ罹ルキハ多クハ欠伸シ、室内ヲ這回り、騒鳴及ビ光線ニ向テ感覺過敏トナル、平癒ニ趣クキハ速ニ機嫌良トナリ、獨居スルヲ或ハ感動シ易キヲ止ミ、莞爾シ又ダ遊戯スルニ至ル、而シテ莞爾ノ有無ニ由リテ病疾ノ有無ヲ判定スルヲ得可シ、急性病ニ罹レル小兒ハ假令ヒ戲言ヲ以テ笑ハシメントスルモ決シテ莞爾スルヲナシ、然レモ恢復期ニアリテハ若シ笑ヲ挑ムキハ愉快ナル顔貌ヲ爲シ自ラ莞爾ス、急性ノ腦疾患ノ初期ニアリテハ強キ刺戟性ヲ

病兒ノ顔貌

呈シ、末期ニアリテハ甚ダシク無感覺トナルモノナリ、又慢性病小兒ハ通例不機嫌ニシテ且ツ遊戯ヲ好マズ、而シテ我意ナルヲ恰モ教育ナキカ或ハ歌私帝里性ノ如シ、顔貌ハ腹膜炎、肋膜炎、肺炎ニアリテハ疼痛狀ヲ呈シ、新生ノ心臟疾患ニアリテハ驚怖狀ヲ呈シ、舊キ心臟疾患及ビ其他數多ノ慢性疾患ハ疲勞、愚鈍、憂苦ノ狀アリ、單純腦膜炎ニアリテハ剛直ニシテ眞面目、或ハ數々皺眉ヲ以テ恨ムノ狀アリ、結核性腦膜炎ニアリテハ容貌全ク變シ、皺額ヲ呈ス、アトロフィーニアリテハ老人ノ如キ容貌アリ、疾病小兒ノ顔貌ノ擬似ハツルトマン氏小兒病年報二十六卷ノ二〇六頁ヲ見ヨ

病兒ノ啼泣

小兒ノ啼泣ハ彼レノ思惟スル處ヲ報スルノ談話ニシテ、啼泣若シ小兒ノ教育悪クシテ我儘ナルニアラザルキハ常ニ不愉快ノ情態ヲ示スモノナリ、啼泣ノ種々ノ種類ハ種々ナル原因ニ相當ス、哺乳兒ノ屢々強ク振頭スル口唇ヲ以テスル高キ持續性啼叫ハ、多クハ飢渴ヲ示スモノナリ、上腿ヲ發作性ニ牽引シ、或ハ衝突性ニ號叫スルキハ、疝痛ヲ示シ、歪ナ

言語ノ變化

病兒ノ睡眠

ル疼痛様顔貌ヲ以テ持続性ニ強ク號叫スルキハ中耳炎或ハ創傷ヲ表示ス低聲ノ涕泣ハ腹膜炎肋膜炎ヲ現ハシ咳嗽發作ノ初メニ當リ顔面疼痛性歪チ現シ呻吟スルキハ肺炎肋膜炎ヲ示シ單獨ナル響キ波リテ貫ク如キ高聲ハ腦疾患腦水腫號叫ノ殊ニ重症ナルモノヲ示ス聲音啞嘶ハ加答兒性喉頭炎ニ來リ格魯布及ヒ實布帝里性喉頭炎ノ小兒ハ全ク特別ノ號叫ヲ爲ス重キ急性熱性病ノ小兒ハ流涙ナク號泣ス而シテ號泣ニ當リ涙ヲ流スニ至ルキハ疾病輕快ノ殆ンド確實ナル徵候ニシテ常ニ豫後ノ良ナルヲ示スモノナリ

又タ言語ノ變化ニモ注意ヲ用ユ可シ真正ノ格魯布ニアリテハ全ク無聲ナリ假性格魯布ニアリテハ聲音啞嘶シ若クハ破ルガ如シ肺炎肋膜炎腹膜炎ニアリテハ言語ヲ發スルコト少シ腦疾患ニアリテハ驚怖ノ狀ヲ以テ數回同言ヲ反覆ス

病兒ハ健康兒ノ如ク平等ニ安靜ニ睡眠セズ且ツ淺表性ニシテ僅カニ繼續シ或ハ著シク深シ睡眠ハ困難ニシテ多クハ習慣ノ位置ニ於テ眠

ラズ之レ殊ニ肺炎肋膜炎急性腦疾患ニアリテ見ル所ナリ或ハ不習慣ノ位置ニ腕ヲ置キ睡眠ス或ハ甚シキ衰弱情態或ハ腦貧血急性腦膜炎及ヒ結核ノ抑壓時期ニアリテ目撃スル處ノ半開眼瞼(兔眼)ヲ以テ睡眠スルハ之レ重症ナルノ徵候ト看做ス可キナリ開口ノ儘或ハ鼾聲ヲ以テ睡眠スルハ鼻或ハ咽頭ノ通路不充分ナルニヨル切齒及ヒ睡眠中ノ莞爾ハ腦疾患ニ來ル然レモ健康兒ニ於テモ亦タ來ルコトアリ驚怖性醒覺ハ屢々憂苦ノ夢ニ認ム(夜驚)ノ條ヲ見ヨ

病兒ノ眼

病兒ノ眼ハ健康兒ノ如ク快活ナル光澤ヲ有スルコト稀ナリ重症ノ病者ニアリテ瞳孔ノ左右不同ナルト縮小或ハ散大ニ過クルトハ常ニ腦疾患ノ疑ヲ起ス可シ疾病經過中ニ起ル所ノ斜視モ亦タ同様ノ疑ヲ起ス可シシカモ重症疾患ナリトス瞳孔ノ散大永ク繼續スルキハ腸虫ノ存在スルモノト診ス可シ

病兒ノ皮膚

皮膚ハ多ク小兒病ニアリテ速ニ其實性充血ヲ失ヒ弛緩シテ皸癢ヲ作り憔悴ス殊ニ漿液缺乏スルカ消費昂進スルカ或ハ營養品補給ノ減

退即チ營養素ノ消化吸收ノ減退スル疾病ニアリテ然リ脂肪過多症ニアリテハ肥滿緊張ス皮膚變硬症ニアリテハ硬固ニシテ皸裂ナシ皮膚水腫ハ硬固ナレト推粉ノ如シ急性熱性病ニアリテハ熱クシテ燒クガ如ク血液缺乏皮膚硬固皮膚水腫ニアリテハ寒冷ナリ頭部ノ皮膚温ト下肢ノ皮膚温ノ著明ノ差異ハ概ス結核性腦膜炎ニ見ル所ナリ鼻及ビ足ノ寒冷ハ重症麻痺症ノ初期ニ於テ主トシテ認ムル所ナリ腦脊髓膜炎ニアリテハ皮膚ノ觸神頗ル知覺過敏ナリ黃胆ニアリテハ皮膚黃色ヲ呈シ強キ貧血ニアリテハ皮膚蒼白色或ハ鉛色ナリ血行障害ニアリテハチアノ一ゼチ起シ丹毒ニアリテハ光澤アリテ平等ニ赤色ヲ呈ス癩疹風疹猩紅熱紫斑ニアリテハ斑點狀ニ赤色ヲ呈シ濕爛ニアリテ創面様赤色ヲ呈スルモノナリ  
 看○察○シ○得○ル○粘○膜○ハ○加○答○兒○ニ○ア○リ○テ○ハ○赤○變○シ○貧○血○萎○黃○病○ニ○ア○リ○テ○ハ○蒼○白○色○ト○ナ○リ○血○行○障○害○及○ヒ○呼○吸○障○害○ニ○ア○リ○テ○ハ○チ○ア○ノ○一○ゼ○チ○呈○ス○鉛○色○ノ○齒○齦○ハ○敗○血○病○又○ハ○變○硬○症○ニ○見○ル○潰○瘍○性○口○內○炎○ニ○ア○リ○テ○ハ○汚○穢○ニ○シ

病兒ノ粘膜

病兒ノ毛髮

脈搏

テ潰瘍ヲ呈ス粘膜上ニハ表在性質缺損潰瘍假性義膜新生物ヲ來スコトアリ  
 齒ノ状態ニ就ニハ已ニ上述セリ毛髮ニ就テ論スレハ后頭部ノ毛髮疎薄ハ佝僂病ヲ示シ頭部毛髮脫落限局性毛髮脫落ハ禿頭病眼瞼毛及ヒ眉毛ノ脫落ハ梅毒ニ見ル爪及ヒ角膜ノ變形ハ屢々梅毒ノ症候トナリ來ル  
 脈搏ハ可及的睡眠中或ハ充分ナル安靜時ニ於テ看察セサル可カラス而ノ最モ好キハ頸動脈ニシテ然ラサレハ橈骨動脈ニ於テ檢スヘシ小兒ノ興奮及ヒ發熱ニアリテハ迅速トナル腦疾患皮膚變硬症變硬症皮膚水腫及ヒ貧血ニ於テハ緩慢トナル脈搏不等缺滯不同ハ心臟或ハ腦疾患ノ疑ヲ起ス可シ矢走樣脈搏ハ結核性腦膜炎ノ疑アリ迅速ニシテ細少ノ糸狀脈ハ心臟或ハ神經系ノ麻痺ヲ起セシキニ認ム重複脈ハ窒扶斯ニ來リ騷擾脈ハ急痢中ニ或ハ聲門痙攣及ヒ百日咳ノ發作後ニ見ル所ナリ

體温

體温ハ第七年小兒迄ハ直腸内ニテ量ルヲ以テ適當トス、成長セル小兒ハ腋窩ニ於テ量ルヲ得可シ、直腸内ニテ計ルキハ骨盤ヲ固定シ腋窩ニテ量ルキハ、同側ノ腕ヲ檢者ノ手ヲ以テ固定ス可シ、病兒體温ノ狀態ヲ論ズレバ大人ト同様ナリ、然レモ小兒ニアリテハ比較的僅微ノ原因(不消化物ヲ食スル等)ニヨリ速ニ且ツ強ク上昇シ、而シテ亦ク速ニ再ビ下降スルヲ注意セザル可カラス、而シテ小兒ノ高温ハ大人ニ於ケル如キ價値ヲ有セザルモノナリ

舌

消化ヲ論ズルニ當リテハ先ツ舌胃及ビ腸ノ官能ノ關係ヲ知了セザル可カラズ、舌ハ乳兒ニアリテハ例令ヒ能ク清潔ニナスモ通例後半部或ハ後三分ノ一部ニ白色ノ苔ヲ帶ブ、此レ決シテ疾病ヲ示スモノニ非ラズ、只ダ舌ノ前部ニ苔ヲ帶ビ、然シテ柔軟麻布ヲ以テ輕ク拭洗スルモ消失セザルキハ、始メテ病的ト看做ス可キナリ、舌白疵疹並ニ舌ノ尋常赤色面ニ生ズル所ノ白色ノ彎曲線或ハ島嶼ハ健康上ニ關係ナキモノナリ、猩紅熱ノ舌ニアリテハ、深赤色ニシテ膨起セル乳嘴ヲ呈ハス(覆盆子

嘔吐及ビ下痢

乳兒吐乳ノ原因

舌(亞布答性)ノ口内炎ニアリテハ粘膜ノ表在性質缺損ヲ現ハス、潰瘍ハ梅毒ニ來リ、百日咳ニアリテ舌紫帶ノ部ニ實質缺損ヲ認ム、第一年小兒ノ口内殊ニ舌ノ粘膜ハ、齶口瘡ヲ發生シ易キ性質ヲ有ス、自他小兒ノ舌ハ大人ト同一ナル性狀ヲ有ス、小兒ノ疾病ニアリテ甚ダ屢々見ルハ嘔吐(小兒ノ所謂吐乳(俗ニ乳ヲ餘スト云フ)ハ病的ナラズ小兒若シ性急トナリ或ハ多ク哺乳シ或ハ哺乳後ニ動搖スルキハ、一定量ノ乳汁ヲ吐出スルモノナリ)及ビ下痢ナリ、嘔吐ハ殊ニ乳兒ニアリテ屢々ナルハ已ニ上述セル胃ノ特有ナル關係ト、乳汁ヲ以テ營養セラル、トニヨル、而シテ若シ胃ノ官能尋常ナラザルキハ乳汁ハ容易ク發酵ヲ起シ、其產生物鋭敏ナル粘膜ヲ刺戟シ以テ嘔吐ノ原因ヲ成ス、此ノ理ニヨリ乳汁ハ亦タ同シク乳兒及ビ成長セル小兒ニ於ケル下痢ノ原因トナルモノナリ、故ニ若シ乳汁ニ交フルニをもゆ或ハ卵白水ヲ以テスルキハ、嘔吐及ビ下痢ノ二症候ハ多クハ速ニ減退或ハ全ク消失ス、以テ其事實タルヲ證スルニ足ル

嘔吐ノ價值

嘔吐ノ程度

嬰兒ノ嘔吐ハ多クハ大人ニ必ズ起ル所ノ前徵即チ不快及ビ有痛ノ感覺等ナシテ發スルモノナリ殊ニ疾患ナキ哺乳兒モ容易ク嘔吐ヲ發ス之レ噴門筋薄弱ニシテ抵抗力微弱ナレバナリ稀レニハ嘔吐ノ前ニ疼痛現象ヲ呈スルコトアリ此ノ疼痛現象口角ノ有痛性形勢ヲ現ハスハ胃中ニ於テ強度ノ酸ヲ發生スルニヨル者ニシテ同時ニ嘔吐ノ原因トナルナリ腦底腦膜炎ノ小兒ハ甚ダ容易ニ嘔吐ス而シテ此ノ小兒ノ體ヲ起スルハ努力ナシテ屢々速カニ胃内容物ヲ吐出ス成長セル小兒ノ嘔吐ハ困難ニシテ多クハ不消化物ノ食後ニ來ル而シテ多分ハ不快不安胃部疼痛顔色ノ變化冷汗脈ノ疲勞等ヲ前驅ス

嘔吐ノ程度ハ一様ナラズ急性腦膜炎ノ小兒ハ病ノ初メヨリ麻痺期ニ至ル迄毎日四―六―八回乃至尙ホ多ク嘔吐ス而シテ嘔吐止ムキハ再ビ發セズ亦タ小兒ノ嘔吐ハ急性胃腸加答兒ニ於テ甚ダ屢々ナリ而シテ小兒若シ食物或ハ只ダ飲料ノミヲ取ルキハ其度毎ニ嘔吐ヲ發シ若クハ攝取度數ヨリモ更ニ屢々嘔吐スルコトアリ腹膜炎ニアリテモ亦タ甚

嘔吐物ノ性状

下痢ノ度數及性質

ダ屢々嘔吐ヲ發スレバ一般ニ大人ヨリモ少ナシ若シ不消化食物嘔吐ノ原因トナルキハ其度數ハ少ナシ屢々只ダ一回ナルコトアリ嘔吐物ハ變化シタル或ハ否ラザル食物或ハ粘液ナリ血液ハ稀レナレバ粘液ニ血液ヲ混スルハ稀ナラズ反應ハ時トシテ酸性或ハ全ク強酸性時トシテ中性或ハ全ク亞爾加里性ナリ亞細亞虎列刺ニアリテハ弱キ腐敗臭ヲ放チ腸閉塞ニアツテハ屢々糞樣物ヲ嘔吐ス

小兒ノ腸排泄ハ大ニ注意ス可シ腸排泄ノ度數及ビ性質ノ破格ハ實ニ緊要ナリ小兒虎列刺急性腸加答兒及ビ赤痢ノ排泄數ハ非常ニ多シ成長シタル小兒ノ腦疾患腹膜炎又ハ多クノ健康小兒ニアリテ若シ營養不規則ナルキハ便秘ス急性腸加答兒急性腸胃加答兒ニアリテハ水樣ノ粘液樣泡沫狀ニシテ赤痢ニアリテハ膠樣粘液樣而シテ同時ニ血樣ナリ慢性腸加答兒ハ膠樣ニシテ屢々血樣加之變化セザル食物ヲ混ズ消化ノ亞急性或慢性障害ニアリテハ帶綠黃色或ハ綠色ニシテ軟或ハ液樣ノ大便ヲ排泄ス黃胆ニアリテハ灰白色或ハ粘土狀ナリ脂肪下痢

渴

ニアリテハ軟膏様脂肪様ナリ、又同疾患ニヨリテ灰白黄色石鹼様ノ光澤アルモノナリ、亞細亞虎列刺ニアリテハ米泔汁様ナリ、嬰兒ノ多クノ亞急性或、慢性消化障害ニアリテハ強キ酸臭ヲ放ツ、急性或、慢性腸加答兒ノ甚ダ重症ニシテ豫後不良ナル状態ニアリテハ腐肉臭ヲ放ツ、高度ノ渴ハ吐瀉病ノ小兒ニ於テ概不見ル所ナリ、而シテ小兒ハ液體ノ物ヲ渴望ス、水ヲ與フレバ貪テ嚥下ス、其他高熱ノ急性病、腸壅箱、糖尿病ニ發スルモノナリ

病兒ノ呼吸

病兒ノ呼吸ハ呼吸數、呼吸整調、呼吸ノ深淺ニ甚シキ變化ヲ起ス、甚ダシキ呼吸頻數ハ凡テノ急性疾病ニ於テ見ル所ナリ、之レ常ニ然リ、而シテ實ニ多クハ急性病ノ前徵ナリ、若シ從來健康ナル小兒ニシテ呼吸頻數トナルキハ、常ニ診察ヲ要ス、呼吸頻數ハ殊ニ呼吸器ノ急性熱性病、毛細氣管枝炎、格魯布性及ビ加答兒性肺炎、肋膜炎、肺萎縮症ニアリテ見ル所ナリ、呼吸數ノ減少ハ變硬症、皮膚變硬症及ビ皮膚水腫ニ發ス、呼吸運動整調ノ變化ハ一定ノ脈疾患ニ於テ見ル、而シテ屢々同時ニ呼吸緩慢ト

咳嗽

ナルモノナリ、此ノ疾患ノ小兒ニアリテハ吸氣及ビ呼氣ノ時間、及ビ其間歇時ノ時間ハ僅ニ一二分時間内ニ著シク變更ス、又吸氣ノ淺深ヲ變更ス、或ハ忽ニシテ深ク、忽ニシテ淺ク、或ハ再ビ殆ソド通例トナル、毛細氣管枝炎及ビ肺炎ノ呼氣ハ強クシテ且ツ呻吟ス、聲門水腫ニアリテハ、吸氣ニ笛聲ヲ發ス、義膜性喉頭炎、實扶帝里性喉頭炎ニアリテハ吸氣及ビ呼氣ニ於テ笛聲ヲ發ス、呼吸困難ハ重症假性格魯布、喉頭實布帝里、聲門水腫、毛細氣管枝炎、格魯布性氣管枝炎、漫延セル肺炎、著シキ滲出液ヲ有スル肋膜炎、心内外膜炎ノ多數喘息、咽頭後部ノ膿瘍、聲門痙攣ノ一時性呼吸停止ニアリテ發ス、咳嗽ハ多クノ急性喉頭炎、各義膜性喉頭炎、各實扶帝里性喉頭炎ニアリテハ粗裂ニシテ吠ユルガ如ク、多クノ急性喉頭炎ノ第一期ハ乾性ニシテ力アリ、第二期ハ遲緩シ、急性肋膜炎ニアリテハ短ニシテ乾性ナリ、急性肋膜炎及ビ肺炎ニアリテハ有痛性ナリ、百日咳ニアリテハ數多ノ平等ナル衝突性咳嗽ヲ發シ、其咳嗽發作間ニ高キ笛聲ヲ發スル吸氣ヲ行

咯痰

フ  
咯痰ハ第七年迄ノ小兒ニアリテハ甚ダ稀ナリ、而シテ咳嗽ニ隨テ粘液ノ咽頭ニ來ルヲ見ルモ、幼兒ニアリテハ之ヲ嚥下ス、成長セル小兒ハ大人ノ如ク咯出ス

病兒ノ鼻及ヒ其分泌ノ價值

呼吸ニ來ル徵候ヲ論ズルニ當リテハ又々鼻腔ニ注意セザル可カラズ、鼻加答兒、鼻實扶帝里ニアリテハ分泌増加シ、高熱ノ各病ニアリテハ減少或ハ消失ス、強熱ニ於ケル分泌減少ト快復期ニ來ル再分泌トハ、彼ノ涙液分泌ノ減少及ヒ再分泌ノ如ク一定不變ノ徵候ニシテ緊要ナリ、吸氣ニ隨テ鼻翼ノ共動ハ呼吸障害ヲ示スモノニシテ、聲門或ハ氣管枝末端ノ狭小トナルカ、或ハ肺胞ノ大部分不通トナル時ニ來ル可シ、鼻呼吸スル小兒、呼吸不能トナルキハ、鼻腔或ハ咽鼻腔ノ急性又ハ慢性粘膜炎起或ハ増殖若シハ新生物ノ徵候トス、鼻尖ノ寒冷ハ心臟瓣膜不全ノ初期ノ前徵或ハ急性病ノ虛脫前徵ナリ、鼻口ヨリ、腐肉様臭ヲ放ツキハ、チエナノ症候トス

病兒ノ尿

病兒ノ尿ハ一般ニ大人ト同様ノ變化ヲ現ハシ、蛋白、圓柱、血液、糖、アチエトン、牛酪酸、インヂカン及ビグリーヌヲ含有ス、多クノ健康乳兒ノ甚ダ多量ノ尿ヲ分泌スルハ、營養分少ナキ食物ニヨリ、其尿量ノ少キハ食物ノ分量少ナキニヨルモノナリ、甚ダシキ沈澱物ハ消化器障害、佝僂病ノ疑ヲ起ス可シ、猩紅熱ノ經過中ニ淡綠色或ハ血様ノ尿ヲ少量ニ漏スキハ、腎臟炎ヲ起セシ疑アリ

大顛門ノ價值

次ニ病兒ノ頭部、胸部、下腹部ノ望診、觸診、打診、聽診ヲ論ズ、大顛門觸診ニ於テハ多少著シキ陷凹ヲ認ムルヲ稀レナラズ、之レ營養不充ナルカ、或ハ甚ダシキ液體消失、吐瀉病、慢性下痢ニ來ル、大顛門ノ強凸隆及ビ著ルシキ波動ハ結核性腦膜炎ニ於テ認ム、耳或ハ聽診器ヲ以テ大顛門ヲ聽診スルトキハ二十二週ノ小兒ニアリテハ多クハ呼吸雜音ノ他ニ特有ナル心収縮ト一致シタル吹性雜音ヲ聽取ス、以前ハ此ノ徵候ヲ常ニ佝僂病ノ症候トナシタレ、之レ誤レリ、之レニ反シテ若シモ觸診ニヨリ異常ニ大ナル大顛門ヲ認ムルカ、或ハ異常ニ久シク殘留スル大顛門



ノ他ニ尙ホ小顛門及ビ後頭骨及ビ顛頂骨ノ縁ニ於テ壓痕ヲナシ得ル  
 場所ノ存在スルヲ認ムルトキハ常ニ佝僂病ナルヲ知ル可シ  
 口内蓋ノ食道ノ望診ハ病兒殊ニ熱性病兒ノ診察ニ當リテ決シテ忘却  
 ス可カラズ如何トナレハ實布帝里ノ如キハ屢々其重症候ヲ現ハサス  
 シテ初マレハナリ而シテ此ノ疾病ヲ全治セシメ或ハ防禦セント欲セ  
 ハ病ヲ初期ニ於テ發見セザル可カラザレハナリ  
 口内ヲ望診スルニ生後最初ノ間ハ粘膜ハ深赤色ニシテ後年ノ如ク餘  
 リ濕潤ナラズ之レ生理的ニシテ數週ノ後漸次其性質ヲ失フ第四乃至  
 第六週間ノ小兒ハ概テ硬口蓋ノ中線ニ於テ帽針頭大ヨリ芥子粒大ニ  
 至ル灰白色ノ粟粒存在ス而シテ此ノ者ハ實ニ生理的ニアラズト雖モ  
 亦タ殆ソド病的ニアラズシテ常ニ健康上關係ナキモノトス此ノ小結  
 節ハエプスタイン氏ニ從ヘハ左右口蓋ノ結合後ニ殘留スル嚙裂内ニ  
 上皮細胞ノ填充セシモノナリホーン氏ニ從ヘハ閉塞セル粘液細胞ナ  
 リト口内臭氣ハ潰瘍性口内炎ニアリテハ腐敗臭ヲ放テ一定ノ慢性ノ

胃疾患ニアリテハ果實ノ如キ臭アリ多ク消化不良ニアリテハ弱腐  
 敗臭ヲ放ツ小兒ノ糖尿病ニアリテハアチエトノ臭ヲ放ツ  
 其他望診ニ當テ舌ノ表面齒齦ノ色澤及ビ硬度齒及ビ頰粘膜ノ状態ニ  
 注目セザル可カラズ扁桃腺部ノ望診ハ扁桃腺ノ突出スルカ或ハ否ラ  
 ザルヤ及ビ其粘膜ノ色澤義膜ノ存否等ニ注目ス可シ殊ニ扁桃腺ト口  
 蓋トノ移行部ヲ注意ス可シ此ノ部ハ屢々義膜ノ發生點トナル所ナリ  
 望診スルニハ小兒ノ頭ヲ腕ヲ以テ固定シ而シテ廣キ匙柄ヲ以テ舌ヲ  
 押下シ若シ小兒顎骨ヲ固ク閉ツルキハ鼻口ヲ壓摘ス可シ然ルキハ呼  
 吸センガ爲メニ直チニ開口ス速ニ左右口蓋ヲ視願ス可シ而シテ舌根  
 ナ僅カニ壓迫スルキハ小兒ハ嚙下運動ヲナス其瞬間ニ於テ口蓋及ビ  
 上述セル移行部ヲ明了ニ目撃シ得可シ此ノ法ニヨリ又咽頭ノ望診ヲ  
 行フ而シテ粘膜ノ色澤腫脹義膜ノ存否増殖(腺腫)ヲ檢シ咽頭後部ノ膿  
 瘍ノ疑アレハ咽頭後壁及ビ側壁ノ凸隆ヲ檢ス可シ喉頭鏡検査ハ困難  
 ナリ然レモ行ヒ得可シ

胸廓ノ望診

胸廓ノ望診ハ形狀廣狹全胸及ビ半胸ノ運動季肋ノ狀態上腹部吸氣時ノ半月狀部呼吸ノ數整調深淺ニ注目シ尋常ニ異ナル各變化ニ注意ス可キナリ之レ呼吸器ノ疾患腦ノ一定ノ疾病佝僂病ノ診斷ニ向テ緊要ナレバナリ胸廓矢狀經ノ増大橫經ノ減少及ビ肋骨ト肋軟膏ノ連合部ノ肋骨腫起ハ佝僂病ノ特徴トス而シテ矢狀經及ビ橫經即チ胸廓周圍ノ退縮前穹窿部ノ缺損ハ結核ノ素因ヲ示ス半月狀部上腹部及ビ肋間ノ吸氣時陷凹ハ肺胞ニ侵入スル空氣ノ障害ヲ示シ胸部中央ノ陷凹ハ佝僂病ヲ示ス呼吸ノ數整調及ビ深淺ハ上述ヲ見ヨ呼吸ニ當テ胸廓ノ左右不等ノ運動ハ肋膜炎滲出物及ビ肺炎ニ見ル所ナリ觸診ノ目的トシテ手掌(寒冷ナル可カラズ)ヲ以テ脱衣セル胸廓ノ前後ニ觸ルハ存在セル粘液ノ運動ヲ甚ダ容易ニ觸知スルヲ得可ク且ツ聲音振顫ヲモ容易ニ診知シ得可シ

胸廓ノ打診ハ幼兒ニ於テハ常ニ二指ヲ以テ之ヲ行フ而シテ決シテ強カル可カラズ決シテ速ニ打ツ可カラズ而シテ最深ノ吸氣及ビ最深ノ

胸廓ノ打診

胸廓ノ聽診

呼吸ノ瞬間ニ於テ行フ可シ打診ハ全胸ニ之ヲ行ヒ決シテ只ダ其背部ノミヲ以テ終ル可カラズ小兒若シ號叫スルキハ其打診音ハ安靜時ニ異ナリ而シテ號叫時ニ打診ヲ行フキハ全ク健康ナル小兒ト雖モ左肺ノ後側ニ輕濁音右肺後側ニアリテハ肩胛棘ニ至ル迄充分ノ濁音ヲ放ツ然レモ此ノ場合ニ於テ小兒吸氣ヲ行フ爲メニ努責及ビ號叫ヲ止メルニ至ル迄打診ヲ繼續スルキハ其瞬間ニ於テ通例ノ打診音ヲ放ツ是ニ於テ始メテ肺ニ變化ナキヲ認ムルヲ得可シ健康ナル小兒ニ就テ號叫ノ間胸部ヲ打診スルキハ貨幣鏽鳴音ヲ發ス凡テ打診ニヨリテ得タル結果ノ診斷的價値ハ大人ノ理學的診斷ニ從テ定ム可シ心濁音ハ小兒ニアリテハ已ニ第三肋骨ヨリ始マリ胸骨ノ左緣ヨリ左乳房線ニ達シ心尖衝動ハ後年ヨリ少シク外方ニ位ス而シテ氣管枝分岐部ニ相當スル前後面ハ甚ダ注意シテ打診ス可シ之レ氣管枝分岐部ニアル腺ノ腫起ヲ知ランガ爲ナリ

聽診ノ注意ニ就テハ左ノ如シ聽診ハ前後及ビ左右側面悉ク行フ可シ

而シテ耳ヲ以テ聽診ス可シ、若シ變化ノ部分ヲ精密ニ確定セント欲セ  
 ハ聽診器ヲ用ユ可シ、若シ聽診器ノ必用ナキハ耳ヲ以テ行フ可シ、如  
 何トナレバ多クノ小兒ハ耳ヲ用ユルキハ驚怖スルヲ稀レナレモ、聽診  
 器ヲ用ユルキハ殆ンド常ニ驚怖スルモノナレバナリ、而シテ安靜ノ狀  
 態ハ頗ル診察ヲ容易ナラシムルモノナリ、病兒ニ於ケル聽診ノ結果ヲ  
 正シク判別セント欲セバ、健兒ノ聽診ニ勉メテ練習セザル可カラズ、健  
 兒ノ肺胞呼吸音ハ大人ヨリモ鋭ク響ク、故ニ醫師ハ最モ注意シテ銳響  
 ノ爲メニ誤診ヲナス可カラズ、水泡音ニ就テハ久シク同一部分ニ局限  
 スルヤ、或ハ否ラザルヤヲ確定スルヲ必要トス、即チ前者ハ肺炎、後者ハ  
 氣管枝炎ノ疑ヲ存セシムレバナリ、一定所ニ於テ吸氣ノ銳利ナルカ、或  
 ハ呼氣氣管枝音ノ頑固ニシテ變ゼザルキハ肺炎ト決定ス可シ、眞ノ捻  
 髮音ハ決シテ單純ノ氣管枝加答兒ニ來ラズ、細ナル管聲樣喘鳴ハ粘  
 膜腫脹ニヨリ氣管枝腔甚ダシク狹窄スルニヨリ起ル、肺胞音消失シテ  
 小喘鳴ノ來ルキハ單純氣管枝炎ノ毛細氣管枝炎ニ變症セシモノナリ、

心臟ノ聽診

小兒心臟ノ聽診ハ異常ヲ發見スルヲ稀ナリ、殊ニ初一年間ニ於テ然リ、  
 然レモ胸廓診察ニ缺ク可カラズ、而シテ小兒ノ坐位ニ於テ行フナ良シ  
 トス、如何トナレバ心臟ハ胸廓前壁ニ近接スレバナリ、小兒健康ナルキ  
 ハ心窩ニ於テ「ブツツ」ノ如キ音ヲ聞ク、而シテ各個ノ音ヲ充分ニ注  
 意スルキハ「ホーホ」ノ如ク、小兒心臟ノ聽診論千八百九十年維納  
 府ニ於テ「ホーホ」ノ如ク、主張スル如ク、少ナクモ初年小兒ニアリ  
 テノ收縮性音ハ開張性音ヨリ著明ニシテ心尖部ニ於テ最モ高ク響ク、  
 然レモ開張性音ハ左第二肋間部ノ肺動脈口ニ於テ最モ著明ニ聞ク、而  
 シテ年ヲ經過スルニ從ヒ收縮性音ノ卓越ハ開張性音ニ反シテ漸次減  
 少シ、開張性音ハ春期發動期ニ於テ尤モ高響トナル  
 小兒心臟雜音ハ大人ノ如ク現ハル然レモ小兒ニアリテハ規則上弱シ、  
 ホーホ「ブツツ」ノ如ク、心雜音ハ固有ノ心音ト全ク交代セズ  
 シテ心音ニ混同ス、然レモ開張時雜音ハ開張性音ヲ殆ンド常ニ掩フト、  
 然レモ此ノ事實ハ余ノ實驗ニ於テハ又收縮性ニ來ルヲ稀レナラズシ

腹部ノ診察

テ實ニ屢々ナリ(心臟ノ診察ニ就テハ一千八百八十九年發行ノステッフ  
 エン氏ノ心臟論ヲ看照セヨ)  
 腹部ノ診察モ亦タ望診測定觸診打診ヲ行ハザル可カラズ望診ハ臥位  
 坐位立位ニ於テ行ヒ測定ハ臍圍及ビ上下腹部ニ行フ觸診ハ仰臥位ニ  
 於テ下肢ヲ屈曲セシメ下肢ノ硬軟剛柔知覺ヲ檢シ打診ハ肝臟脾臟膀  
 胱周圍ノ異常液及ビ瓦斯ノ蓄積ヲ檢ス可シ而シテ健康初生兒ノ肝臟  
 ハ成長小兒及ビ大人ヨリ大ニシテ肋骨緣ヨリ乳線ニ於テ凡一五仙迷  
 下方ニ突出シ而シテ健康兒ノ脾臟ハ第八及ビ第十肋骨間ヨリ第十一  
 肋骨迄達スルモノト知ル可シ肥大セル脾臟ノ打診ハ小兒ニアリテハ  
 確實ノ結果ヲ得ルヲ稀ナリ時トシテ觸診ニヨリ腫脹セル腸間膜腺盲  
 腸炎及ビ盲腸周圍炎ノ腫瘍及ビ瘰癧ヲ證明シ得可シ  
 透見シ得ル靜脈ヲ有スル薄キ皮膚ハアトロフィ及ビ腹水症ノ下腹ニ  
 就テ之ヲ見ル遲緩セル皮膚ハ小兒虎列刺慢性腸炎ニ來ル腦底腦膜炎  
 ニアリテハ腹部ハ陷凹シテ木鉢様ヲナス鼓脹症ニアリテハ膨起シ腹

小兒診察時ノ心得

膜炎ニアリテハ大鼓様ニシテ知覺過敏トナリ腹水ニアリテハ桶形ニ  
 シテ空虚ナル打診音ヲ呈ス胃疾患ニアリテハ上腹部隆起シ膀胱中ノ  
 尿或ハ骨盤内液體ノ蓄積ニアリテハ下腹隆起ス尙僕病ニアリテハ梨  
 子狀ヲナス初生兒ノ疾患ニ就テハ最モ注意シテ臍部ノ色剛柔知覺ヲ  
 檢ス可シ  
 診斷ノ好成績ヲ得ント欲セハ安靜ナル詳言スレハ興奮セザル小兒ヲ  
 診ス可シ若シ小兒驚怖シ又ハ號叫スルキハ實ニ容貌呼吸脈加之固有  
 體温ヲ變ズ可シ故ニ診察ス可キ小兒ヲ先ツ安靜ニナスヲ實ニ必要ナ  
 リトス此ノ目的ニ向テ醫師ハ如何ナル方法ヲ用ユベキヤ自カラ詳ニ  
 述ブル能ハズ然レモ興奮セル小兒ノ安靜ニナルヲ待テ得ルノ忍耐ヲ  
 有セザルモノ及ビ小兒ニ對シテ親密ナルモ或ル必要ナル場合ニ於テ  
 ハ全ク嚴肅ニナシ得ザルモノハ寧ロ初メヨリ診察及ビ治療ヲ擔任セ  
 ザルニ若カズ其他診斷ヲ行フニ先チ小兒ヲ睡眠セシムルヲ最モ利益  
 アリ睡眠中ニアリテハ小兒ハ安靜ニシテ容貌呼吸脈等總テ神經系與

有熱小兒ノ症候

奮ノ影況ヲ蒙ムルコトナシ、醫師ハ臥床ニ靜ニ進デ小兒ノ位置、腕ノ位置、口、鼻翼、眼瞼ノ状態ニ注目シ、吸氣及ビ呼氣並ニ深淺、整否ニ注目シ、然ル後示指(寒冷セルルキハ温ム可シ)ヲ輕ク鎖骨上窩ノ頸動脈上ニ置キ、次デ手掌ヲ輕ク前額、頰部、大顛門ニ置ク可シ、然ルキハ小兒ノ多クノ緊要ナル機能ヲ甚ダ精密ニ診知スルヲ得、且ツ醒覺時ノ診察ヨリモ確實ニ局所ヲ定メ得可シ、小兒醒覺シ居ルカ或ハ醒覺セシメタルキハ、其姿勢ノ定マルヲ待ツ可シ、小兒ノ醒覺セシ直後ハ診察ニ向テ甚ダ不便ナリトス

附録。有熱小兒急性熱性病ノ初期ハ小兒ニアリテハ多分ハ甚ダ著シキ病候ヲ現ハサズ、只々不活潑、遊戯ヲ樂マズ、不機嫌室内ヲ留ヒ廻リ、反復欠伸頭痛(此ノ症候ハ屢々缺クルコトアリ、殊ニ學齡前ニハ實ニ稀ナリ)等ヲ表ハスノミ、急性病ノ初メニ於テハ眞ノ惡寒(戰慄)ヲ起サズ、只々成長セル小兒ニアリテ目撃スルノミ、又前驅惡寒、口唇蒼白色、指爪藍色ヲ呈スルコト屢々ナリ、然レモ極メテ幼稚ナル小兒ニアリテハ甚ダ惡寒ノ代リニ嘔吐、痙攣、性搐

有熱小兒ノ新陳代謝

熱性小兒ノ消化不良

熱性小兒ノ分泌

病時トシテ急性病發作ヲ起スコトアリ、故ニ倉卒ニ胃加答兒或ハ腦膜炎ト誤診ス可カラズ、熱ノ上昇ハ小兒ニアリテハ已ニ上述セル如ク概テ大人ヨリ速カナリ、而シテ其下降スルコトモ亦著シク速ナリ、然リ而シテ熱性病ノ減退期ハ亦迅速ナリトス、又々熱性病ノ急性増悪ハ後年ノ如ク正規ナラズ、殊ニ體温ノ夕刻上昇ハ不定ナリ

小兒ノ新陳代謝ヲ論ズレバ、有熱状態ノ間ハ規則上窒素排泄ヲ昂進ス可キモノトス、然レモ患者熱中ニ其ク營養セラレ、其ハ窒素排泄ハ通常界ノ内ニ止マルヲ得可シ、炭素ノ消耗ハ大人熱性病ノ如ク増加ス、之レニ反シテ一般ニ關係的磷酸排泄ノ量ハ減少ス(ビヒンゲン氏)

熱性消化不良ハ又小兒年齡ノ急性病ニ見ル、然レモ後年ニ於テ來ル所ノ同一ノ疾病ニ比スレハ強カラズ、其詳細ハ病兒ノ一般攝生及ビ治療法ノ章ヲ見ヨ

急性熱性病ニアリテハ天然分泌即チ鼻粘膜、淚腺、腎分泌ハ常ニ減少ス、而シテ熱度昂進スルキハ已ニ述べシ如ク鼻腔ハ全ク乾燥シ、流淚ナクシテ號哭

ス、故ニ二者ノ分泌消失ハ甚ダ價值アルモノニシテ、其再現ノキモ亦々然リトス、熱性病兒ノ尿ハ此ノ二者ト共ニ價值アルヲアリ、急性熱性病ニアリテハ不安、興奮、安眠、死亡、不快ノ靜臥、嗜眠、不機嫌、無關係等ヲ現ハス、急性病ニアリテハ愉快ナル機嫌、通例ノ睡眠、習慣セル事物、周圍ノ者及ヒ朋友ニ向テノ興味等快復スルキハ即チ其徵候ナリ、然レモ吾人ハ常ニ不機嫌ハ全ク無關係ニナルヨリモ、後上頁ナリト認ム、如何トナレバ乙ハ強度ノ衰弱或ハ腦ノ重症ニ來ル症候ナレバナリ

### 第四章 病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

病兒治療ノ最モ大切ナル原則ハ、可及的只ダ攝生ノミヲ以テ其疾病ニ打勝ツニアリ、而シテ藥劑ハ不得止ノ時ニ於テノミ使用シ且ツ勉メテ注意シテ用ヒザル可カラズ、一般ノ治療法ハ單純ナル法則即チ刺戟ノ除去、新陳代謝ノ催促、規則正シキ營養及ヒ善良空氣等ニヨリ自然機能ヲ補助スルニアリ、而シテ此攝生の療法ハ大ニ小兒療法ニ向テ適合セルモノナリ、如何トナレバ單ニ此ノ一事ヲ以テ屢々疾病ヲ良經過ニ導

攝生の治療法

クニ足ルヲアレバナリ、小兒體ニアリテ體ノ生活ニ必要ナル部分ハ規則上尙ホ大人ノ如ク變質セズ、夫レ故ニ小兒ニアリテハ恐クハ大人ヨリモ屢々全保護ヲ正シク行フノミニシテ快癒ニ至ルヲ得可シ、自然治癒ニ任スルヲ得ル疾病ハ格段ナル療法ヲ施サズシテ、其療法ヲ爲スモノヨリモ却テ確實ニ且ツ速ニ治癒スルモノナリ、藥劑ハ緊要ニシテ缺ク可カラザルキニ於テノミ使用ス、而シテ其使用法ハ大人ト同様ナルモ小兒ノ療法ニ向テハ全ク特別ノ注意ヲ要ス、如何トナレバ小兒ハ藥劑ニ向テ概テ甚ダ過敏ニシテ時トシテハ全ク堪ヘザルヲアレバナリ、夫レ故ニ吾人ハ病兒ニ向テハ凡テ可及的善良ノ攝生の關係ヲ運行セザル可カラズ、即チ先ヅ可及的清潔空氣ノ中ニ住居セシムルヲ注意セザル可カラズ、蓋シ如何ナル疾病ニ於ケルモ同一ナリトス、重症ナラザル患者ハ廣開地即チ空氣清潔ニシテ強風ヲ遮ギリ得ル場所ニ送ル可シ、慢性病兒ハ海濱、高所、田舎、森林中ニ久シク住居セシム可シ、爾他ノ小兒ハ若シ空氣ノ尙ホ良キ場所アレバ單ニ移住セシム

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

病室

病室ノ温度

病室ハ靜肅、廣潤、高層、乾燥ナルヲ撰ビ南方、東南或ハ西南方ニ向ハシム、日光ノ射入スル所ヲ其シトスルモ、其直射ヲ遮ギル豫備装置ナカル可カラズ、而シテ其ク換氣シ其ク温メ得ザルベカラズ、清潔空氣ヲ得ンガ爲メ少クモ毎二回窓、戸ヲ開キ之レニヨリ塵埃及ビ之レニ付スル小有機體ヲ放逐ス、其間ハ小兒ヲ同温度ヲ有スル他ノ室ニ移居セシム

病室ノ温度ハ如何ナル場合ニアリテモ同一ナラシムルハ不可ナリ、疾病ノ性質、患者ノ年齢及ビ體質ニ隨ハザル可カラズ、呼吸器ノ疾患ニシテ咳嗽アレバ健康兒ヲ住居セシムル温度ヨリ少シク高温ナラシム、急性發疹病、腸鼠扶斯、赤痢、實布希里、腸膜炎及ビ凡テ熱性病者ニシテ呼吸器ノ侵サレザル疾、病ニアリテハ、健康兒ノ住居スル温度ヨリ少シク低カラシメ、貧血及ビ虛弱ノモノハ健康體質ノモノヨリモ少シク高温ナラシム、初生兒ハ成長小兒ヨリ少シク高温ナラシム可シ、一般ニ温度ハ列氏十二、五度乃至十五度ニ在ラザル可カラズ、而シテ若シ爲シ得クンバ病室ハ常ニ平等ノ温度ヲ保タシム可シ

冬時ハ夏時ヨリモ前述ノ温度ヲ作り易シ、之レ室ヲ温ムルハ冷却スルヨリモ易ケレバナリ、然レモ室ノ冷却ハ夏時ニアリテハ多クノ病者ニ向テ勉メテ行ハザル可カラズ、殊ニ小兒虎列刺ノ豫防法トシテ緊要ノ治療法ナリ、吾邦(譯者曰ク著者ノ本國ナリ以下同シ)ノ氣候ニアリテ病室ノ空氣ヲ冷却セント欲セバ每晚數時間戸及ビ窓ヲ同時ニ開放シ日遮ニヨリテ日光ノ直接射入ヲ遮リ、且ツ室内所々ニ水片ヲ盛リタル桶ヲ置ケ可シ

暖室法ヲ行フニ當リテハ常ニ善良ノ寒暖計ニヨリテ監督セザル可カラズ、而シテ所望ノ温度ニ達セザル以前、既ニ空氣ヲシテ不潔ナラシムルノ暖室装置ハ之ヲ用ニ可カラズ、最モ適當トシテ吾邦ノ氣候及ビ自宅病室ニ向テハ勿論暖爐ヲ用ニ、如何トナレバ之ヲ用ユルハ最モ適當ニ温ムルヲ得且ツ過温ノ憂害ナキヲ以テナリ

病室ノ空氣ヲシテ適當ニ温潤セシムル亦必要ナリ、比較的温潤ノ要用ナル處ハ凡ソ五五「プロセント」トス可シ、而シテ常ニ四〇「プロセント」ヨリ下ル可カラズ、之レ殊ニ義膜性咽喉炎、格魯布性氣管枝炎、肺炎ニアリテ必要ナル

病室ノ清潔法

チ以テナリ、凡テ濕潤ニ過ケル空氣ヲ含ム室ハ病室ニ適セズ、腺病兒及ビ慢性呼吸器加答兒ヲ病ムモノハ、不斷濕潤ニ過ケル空氣ヲ含ム室中ニテハ快復シ得ズ

尿及糞ノ消毒法

小兒病室ノ清潔法ハ最良トシテ毎日二回小兒ヲ隣室ニ移シ、其間ニ上述セシ如ク全ク空氣ヲ交換シ、而シテ又々塵埃及ビ床ノ不潔物ヲ濕布ヲ以テ拭ヒ、汚穢物ハ五「プロセント」ノ石炭酸水或ハ五「プロセント」ノ「クソール」水ヲ以テ洗滌ス、然レモ室ハ再ビ小兒ヲ入ル、前ニ全ク乾燥セシム可シ  
尿及ビ糞ハ排泄後直チニ取除キ、其不潔ナル襪履及ビ布片ハ決シテ室内ニ置ク可カラズ、糞ノ消毒ニハ最モ良ク硫酸石炭酸(五分ノ石炭酸、二分ノ硫酸、九十三分ノ水)或ハ石灰乳ヲ用ユルチ最良トス、硫酸石炭酸ハ糞便ト等分ニシ、石灰乳(二〇「プロセント」)ハ糞便百瓦ニ付キ五瓦ヲ加フ、而シテ少ナクトモ一二時間放置ス可シ、傳染性襪履及ビ床布ハ三「プロセント」ノ石炭酸水ニ入レ、可及的直チニ煮沸シ、然ル後乾燥ス可シ  
略談及略出セル物ハ小兒ニアリテハ麻布片ヲ以テ拭ヒ取ルチ最適當トス、

略談ノ仕末

病兒ノ營養法

而シテ粘液等(實布帝里、百日咳、結核)ノ乾燥セザル前ニ燒捨或ハ煮沸ス可シ  
治療後ノ病室、衣服、臥床等ノ消毒ハ消毒學ニ論ズル所ノ原則ニ隨フ可シ  
病兒ノ營養ニ付テハ凡テ疾病時ノ營養法之ニ適當ス、故ニ茲ニ之ヲ論ゼス、然レモ次章ニ掲載セル事項ニ注意セザル可カラズ、乳房ニヨリ養ハルハ、小兒ハ若シ疾病ニ罹ルキハ、其疾病ノ種類ノ如何ニ關セズ、反覆スル強キ嘔吐及ビ下痢ナキ限りハ先ツ母乳ヲ與フ可シ、此ノ規則ハ實驗ニ由リ正確ナルモノトシテ知ラル、乳房兒ハ各病ニアリテ若シモ天然營養ヲ止メズシテ連用スルチ得ルキハヨク其疾病ニ堪ユルチ得可シ、然レモ或ル疾病ニアリテハ大人ノ如ク以前ノ食物ヲ持續セシムルチ得可シ、各急性熱性病ヲ病ム小兒ハ攝生ニ向テ注意セザル可カラズ、而シテ小兒ノ此ノ病ハ大人ヨリ速ニ經過シ、小兒ノ消化器ノ機能力ハ僅カニ障害セラレ、且ツ甚ダ嫌惡ス可キ衰弱ノ合併ハ小兒ニハ全ク稀レニ見ル所ナリ、只タ此ノ障害ハ初十八ヶ月間ノ急性病ニ於テノミ屢々來ルモノナリ、凡テ小兒ハ長時間ノ食物停止ハ堪ヘ難シ、如何トナレ

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法



ハ小兒ノ新陳代謝ハ頗ル強盛ナルモノナレバナリ而シテ初第一年及  
 ビ第二年ノ小兒ニアツケハ食物ヲ停止スルコト甚ダ不可ナリ凡テ急性  
 熱性病兒ハ其營養ヲ佳良ニスルコト極メテ必要ナリ而シテ若シ特ニ止  
 ムヲ得ザル原因アルトキハ彼レニ細密ノ食物ヲ與フルコト得可シ而  
 シテ此ノ食物ハ只一兩日ノミ與フルヲ得可シ勿論急性熱性病ニアリ  
 テハ只ダ左ノ食物ノミヲ與フ可シ即チ消化シ易キモノ殊ニ流動性食  
 物ヲ與フ可シ就中牛乳ヲ以テ最良ノ食物トス而シテ最モ適當ナルハ  
 少許ノ粘滑液又ハ温水ヲ以テ稀釋シ或ハ乳ヲツブトシテ用ユ若シ此  
 ノ食物ノ爲メニ嘔吐或ハ下痢ヲ起シ或ハ已ニ嘔吐及ビ下痢ノ存在ス  
 ルキハ大麥粉ヲツブ或ハ卵白水ヲ以テ之ニ代ヘ哺乳兒ニアリテハ人  
 工乳皮混合物ヲ以テ之ニ代フ可シ若シ下痢ナキキハ清良ナル冷水ヲ  
 少量宛或ル場合ニハ少量ノ氷水及ビ麵麩水ヲ以テ最良ノ飲料トス成  
 長セル小兒ニハ又果實汁ヲ混和セル水ヲ與フ與奮藥ノ必用ナルキニ  
 シテ若シ強キ藥劑ヲ用ユルコト能ハザルキハ先ツ鳩肉及ビ鰾肉ノ羹

慢性熱性病兒ノ營  
 養法

汁ヲ用ヒ強興奮ヲ要スルキハ濃厚ノ牛肉羹汁牛肉煎咖啡及ビ茶ヲ與  
 フ若シ此ヲ以テ効ナキキハ亞爾個保兒劑ヲ用ユ然レモ之ヲ用ユルニ  
 ハ大ニ注意ヲ要ス如何トナレバ小兒ニハ屢々甚ダ不良ニ作用シ飲用  
 セシ後高度ニ興奮スレバナリ然リ而シテ第二年乃至三年ノ小兒ニア  
 リテハ少クモ同量ノ水ヲ以テ稀薄セシモノヨリ濃厚ナルモノヲ飲マ  
 シム可ラザルヲ了知ス可シ  
 慢性熱性病兒ハ其病兒ノ消化機能ニ相當シテ急性熱性病兒ヨリ多量  
 ニ營養セザル可カラズ然シテ食物ハ流動體或ハ軟質ナラザル可カラ  
 ズ如何トナレバ硬固ナル食物ハ甚ダ容易ク障害ヲ起シ熱度ヲ上昇セ  
 シメ消化器ノ官能ヲ害シテ充分ニ其營養ヲ収ムルコト能ハザレバナリ  
 第一ニ用ユ可キハ脂肪性食品ニシテ脂肪ハ熱ノ存在スルニヨリ高進  
 スル所ノ蛋白質ノ費消ヲ節減シ得ルモノナリ而シテ脂肪若シ體中ニ  
 貯蓄セラルキハ病的生産物ヲシテ脂肪變性ヲ爲サシメ以テ其ノ吸  
 収ヲ促スモノナリ故ニ慢性ノ熱性病兒ニハ容易ニ消化ス可キ脂肪牛

病兒營養ノ注意

酪脂肪、卵黃脂肪ヲ同化シ得可キ程ノ量ヲ與フルヲ良シトス、又合水炭素ハ蛋白質及ビ脂肪ノ費消ヲ減少セシムルガ故ニ大量ヲ與ヘ得可シ、蛋白質ハ夫レニ反シテ只マ適當量ヲ與フ、之レ多量ハ體蛋白費消ヲ甚マ高進スレバナリ、此ノ如キ患者ハ彼ノ年齡及ビ消化能力ニ相當シテ脂肪乳、乳そのぶ半熟卵、幼鳥、野獸、犢肉、牛肉羹汁、胸腺、臘乾ノ薄片、小麥麵麩、牛酪果實煮汁、加々阿煮、卵黃加牛肉羔汁ヲ最良トス、食慾亢進及ビ消化器ノ奮勵ニ向テハ頻回ノ亞爾個保兒ヲ用ユ、此ノ目的ニ最モ適當トシテ赤酒「チント」酒ヲ用ユ、而シテ成長セル小兒ニハ稀薄セズ、嬰兒ニハ稀薄シ與フ

無熱病者ノ食物ハ一概ニ論ズルヲ得ズ、各個ノ場合ヲ考ヘテ適合セシム可シ（無熱病ノ食物ニ付テノ說明ハ各論ヲ見ヨ）

一般ニ小兒病ニアリテハ、凡テノ情態ニ於テ食物ヲ一定時間ニ與ヘザル可カラス、食物ノ規則正シキヲハ食物ノ消化ヲ迅速ナラシメ、且ツ消化不良及ビ現存セル消化不良ノ増進ヲ防禦ス、食物ノ不規則ハ已ニ健康兒ニアリテ

病兒皮膚ノ保護即チ入浴法

モ、屢々胃及ビ腸加答兒ヲ起スモノナリ、殊ニ病者ニアリテハ更ニ之レヨリ甚シトス、而シテ可及的善良ノ營養ハ多クノ疾病ニアリテ治療上大ナル要索トナルモノナリ、其他病兒ニアリテ食慾ノ保存或ハ亢進ノ爲メニ可及的口内ヲ清潔ニセザル可カラズ、殊ニ初二年以内ノ小兒ニ於テ然リ、之レ清潔ノ不充分ナルキハ露口瘡ヲ發スルノ虞アレバナリ、而シテ慢性病ニアリテ各種營養品ノ影響ヲ明了ニセント欲セバ、屢々體重ヲ測定ス可シ

病兒ニ向テ大ニ治療上ノ價值ヲ有スルハ皮膚ノ保護ニアリ、而シテ一定ノ狀態ニアリテハ實ニ治療上缺ク可カラザルモノナリ、各病兒ハ各健康兒ノ如ク皮膚ヲ清潔ニ保タザル可カラザル所以ハ委シク説明セズ、只マ世俗ノ病床ニ在ル病兒ハ洗滌ス可カラズトノ臆說ヲ信ズルノ誤解タルヲ一言スルニ止ム可シ、如何ナル疾病ヲ論セス、手、顔面、肛圍ノ清潔ハ規則正シク行ハザル可カラス、健康哺乳兒ノ浴ハ毎日一回成長兒ハ每週一回乃至二回行フ可シ、然レバ浴譯者曰ク浴トハ溫浴ノミノ謂ニアラズ、總テ冷浴、溫浴、藥浴等一般ヲ指スハ或ル病兒ニアリテハ停

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

止セザル可カラス、殊ニ新鮮ナル急性鼻加答兒、急性喉頭炎及ヒ氣管枝炎ヲ病ム者ニ然リ、又貧血ニシテ太ダ衰弱セル小兒ニハ浴湯ヲ行ハズシテ只ダ拭フノミニ止ムベシ、如何トナレバ浴ニヨリ體温掠奪セラレ或ハ若シ甚ダ暖メラル、キハ衰弱ノ状態ヲ増進スレハナリ、其他衰弱セル小兒ヲ入浴セシムルキハ、一般ニ浴ノ温度ハ健體ニ行フモノヨリモ少シク高フスルノ原則ヲ固守ス可シ、

孱弱小兒ニ適スル浴湯ノ温度

浴湯ノ温度ハ左表ニヨル、	列氏	二十八度半乃至二十九度
六ヶ月ノ孱弱小兒	ニ	二十七度半乃至二十八度
十二ヶ月ノ孱弱小兒	ニ	二十七度
三年ノ孱弱小兒	ニ	二十六度

浴ハ腺病性小兒、温度ニ甚ダ過敏ナル小兒、感冒ニ罹リ易キ小兒、常ニ反覆シテ咽頭炎、喉頭炎、氣管枝炎ヲ病ム小兒ニハ欠ク可カラズ、浴ハ亦ダ治療上小兒ノ高熱及ビ一定ノ皮膚病ニ缺ク可カラザルモノナリ

病兒ノ衣服

病兒ノ衣服ハ其疾病ノ性質、年齢及ビ體質ニ從テ異ナリ、薄弱ナル貧血小兒ハ健康兒ヨリ温暖ナラシム、殊ニ早産ノ薄弱ナル小兒ニ於テ然リ、氣管枝炎、肺炎、結核、關節痲質斯ニ傾キタル小兒ハふらんねる、毛織、毛絹ノ下着ヲ用キザル可カラズ、此ノ下着ハ病兒ノ幼少ナルト皮膚ノ薄弱ナルトニ從ヒ益々柔軟ナラザル可カラズ、常ニ屢々咽頭炎ニ罹リ易キ性質アル小兒ハ廣キ布片或ハ毛布ヲ以テ頸部ヲ纏絡ス可シ、亦タムらんねる或ハ狭キ絹布ニテモ足ル可シ、而シテ皮膚強健トナリタル後ハ一二時間空氣ニ觸接スルヲ試ム可シ、皮膚ノ強健ヲ促スニハ毎日頸部ノ寒冷洗滌ヲ良シトス、急性熱性病兒ハ床中ノ温度ヲ高フス可カラズ、一歳乃至七歳ノ小兒ニアリテハ只ダ襯衣ヲ着セシメ、而シテ其上半ニ麻製ノ寝衣ヲ着セシム可シ、蒲團ハ毛製ノモノヲ最良トス、急性及ビ慢性腸胃加答兒ニアリテハ必ズ陰部ニ達スル毛製腹巻ヲ用ユ可シ、急性發疹病、氣管枝炎、毛細氣管枝炎、肺炎、關節痲質斯、腎炎ニアツテハ注意シテ能ク之レガ衣服ヲ撰用ス可シ、此等ノ恢復期ハ殊ニ温度變換ニ向

病兒筋肉ノ保護

テ感覺過敏ナリ、故ニ疾病ノ平癒後ト雖モ、一定時ヲ過キ身體ノ抗抵力ヲ恢復スルニ至ル迄ハ、少シク温暖ニ着衣セシム可シ。

筋肉ノ保護ハ幼年ノ健康者ニアリテハ身體ノ正規的發育ニ缺ク可カラズ、又病者殊ニ畸形、筋肉薄弱、神經質、血液造構不完全ナル場合ニ於テ缺ク可カラズ、筋肉保護ハ主トシテ小兒體ヲ強盛ナラシムルニ必用ナリ、而シテ小兒ノ學校ニ於テ受クル所ノ多クノ損害ヲ償フニハ筋ノ保護ハ甚ダ緊要ナリトス、殊ニ腺病、佝僂病及ビ結核素因アル者ノ治療上格段ノ價值アルモノナリ、急性熱性病兒ハ可及的運動セシメズ、且ツ可及的早ク床中ニ就カシメザル可カラザルハ一般ニ知ル所ナリ、又按摩法ハ小兒體ニモ使用シ得可シエ、クレー及ウオルツェンドルフ氏按摩法書ヲ看照セヨ、

精神の療法ハ小兒科ニ於テ贅物トシ、若クハ全ク附屬物ト看做スハ不可ナリ、健康兒ノ如ク亦病兒ニアリテモ、常ニ親シキ言ヲ以テ導カザル可カラズ、疾病アル哺乳兒ノ不安ハ屢々母ノ可愛ナル歌ニヨリ、成長

精神の療法

藥劑的療法

セル病兒ノ不安ハ温言ニヨリ、或ハ贈物ノ約束ニヨリ減少スルカ、或ハ全ク靜止スルモノナリ、然レモ又藥劑服用ヲ拒絕スル等ノコアルモ、其情態ニヨリ適當ノ嚴重ヲ要スルノ已ムヲ得ザルコアリ、然リ而シテ身體的懲罰ハ注意セザル可カラズ、殊ニ一定ノ病疾即チ百日咳ノ如キモノニ對シテハ其疾病ノ治スル迄ハ柔和ナラザル可カラズ、殊ニ小舞蹈病、遺尿症ニアリテハ懲罰ハ毫モ益スルコナシ、小兒ノ歌私帝里、大舞蹈病、精神疾病、吃、疾病習慣ニ對スル精神療法ハ疑問ニ屬ス。

藥劑的治療ニ至リテハ、已ニ上述セシ如ク常ニ小兒體ノ特有性質ニ注意セザル可カラズ、而シテ殊ニ消化器粘膜炎及ビ神經系ノ過敏ヲ藥劑ノ撰拔ト分量ノ心算中ニ入レザル可カラズ、胃及ビ腸ノ官能ヲ變シ、殊ニ金屬性物質ノ如ク永ク其障害ヲ留ムル如キ藥劑、及ビ麻醉劑ノ如キ神經系ノ中樞ヲ強ク抑制スル藥劑ハ可及的避ケザル可カラズ、殊ニ初生兒ニアリテ然リトス、分量ハ多數ノ藥劑ニアリテハ大人ニ與フル分量ノ中等量ヲ基本トシ、而シテ此ノ分量ヲ小兒ノ年齢ニ對比シ、次ノ表ニ

小兒ニ對スル藥劑ノ用量

從ヒ減少ス

大人ノ分量	一〇瓦	四 年小兒分量	〇、二〇瓦
十四年小兒分量	〇、七	二 年	〇、一五
十二年	〇、六	一 年	〇、一〇
十 年	〇、五	八ヶ月	〇、〇八
八 年	〇、四	六ヶ月	〇、〇六
六 年	〇、三	二ヶ月	〇、〇二

然レモ此ノ換範ハ只一ノ標準ニシテ、各場合及ビ各藥劑ニ向テ適合スルモノニハ非ラザルナリ、強壯ナル小兒ハ一般ニ薄弱ナル小兒ヨリ少シク多量ヲ用ユ、而シテ各個ノ藥物ハ小兒ニ向テ常ニ上述ノ系数ニ隨テ處方シ得ズ(下表ヲ比較セヨ)藥物ノ應用ニ當リ若シ其小兒ノ性態ヲ尙ホ詳シク知ラザルモ、常ニ先ツ試驗分量ヲ與フルヲ必要トス

下劑、緩和劑、下劑ハ先ツ那度倫石鹼ノ肛門坐藥及ビ微温湯ノ浣腸ナリ、之レ三年小兒ニ向テハ多クノ場合ニアリテ他ノ藥劑ニ優レリトス、又々大黃(大黃末、水製大黃丁幾、大黃丁幾、大黃舍利別)假性麻風濕矢亞(苦土大黃散、フヘラン)氏小兒散(滿那那舍利別其他)スピナ舍利別、蓖麻子油(此ノ油ハ味ノ爲メニ小兒療法ニ用ユルコト少ナシ)、答麻林度果肉ハ緩下劑ニシテ甘柔ハ少シク強ク作用ス、假令ヒ唾液瀉ノ來ルコト大人ヨリ遲シト雖モ使用スルニ當リテハ注意セザル可カラズ、尙ホ強劑ナルハ瀉利鹽、芒硝、旋那葉ニシテ、旋那葉ハケルマイン氏ノ緩下劑トシテ用ユ、此等ノ藥劑ヲ以テ常ニ小兒療法ニ足レリトス、余ハ未ダ小兒療法ニ於テ一圖ダモ緩下劑ノ一ヲモ使用スルノ必要ヲ見ザリキ

下劑

收斂劑

收斂劑 固有ノ收斂藥ハ小兒ニアリテハ慢性腸加答兒及ヒ慢性膀胱加答兒ノ治法ヲナス時ニノミ使用セラル、下痢若シ急性或ハ亞急性ニ來ルモ只攝生ヲ嚴ニシ、或ハ只ダ下痢ノ原因ヲ治スルノ藥劑即チ炭酸石灰(貝殼製劑)、炭酸麻風濕矢亞、少量ノ甘柔、鹽酸、阿片劑(腸蠕動機ノ抑制)即チ單阿片丁幾阿片末ヲ用ユルヲ以テ足レリトス、此ノ總テノ藥劑中小兒ノ下痢ニアリテハ炭酸石灰最モ價値アルコト疑ナシ、而シテ屢々固有ノ治療藥トナルコトアリ

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

吐劑

尙ホ下痢ノ慢性トナルニ於テモ亦々然リ、収飲藥ハ小兒療法ニアリテハ最  
 多ク格倫撰根ヲ煎劑トシ、番木甙ヲ丁幾トシテ用ヒ、又ダ「ウラウルシ」葉ヲ  
 用ユ、煤酸ハ最モ僅ニ使用ス、如何トナレハ容易ニ食慾ヲ損害シ消化不良ヲ  
 起セバナリ

吐劑ハ總テノ吐劑中吐根(粉末或ハ濃厚浸劑)ハ其効力確實ナルト、有害ナル  
 副作用ノ缺乏スルニヨリ利用セラル、即チ粉末〇、四乃至〇、五瓦ヲ水ニ攪拌  
 シテ與ヘ、後ニ微温水ヲ飲用セシメ、十分時後ニ第二粉末及ビ微温水ヲ飲マ  
 シメ、嘔吐ヲ起スニ至ル迄反覆ス、然レモ通常ニ或ハ三粉末ニテ効アリ而シ  
 テ粉末ヲ小兒ニ用ユルコト能ハザルモ、吐根浸(二〇)一〇〇〇ヲ每十分時ニ  
 一茶匙或ハ一小兒匙ヲ各年齡ニ應ジテ與フ、余ハ殆ンド常ニ此ノ藥劑ヲ以  
 テ其目的ヲ達セリ吐石ハ粉末或ハ溶液トシテ用ユ其効力ノ確實ナルコ  
 ト吐根ニ異ナラズ、然レモ精神抑壓、虛脱及ヒ腸胃炎ヲ起スノ憂アリ、硫酸銅ノ  
 多量モ亦々其効力同ジトス、鹽酸亞銅莫爾比涅ハ皮下注入トシテ用ヒ、鎮性  
 吐劑ノ如ク強度ニ精神抑壓セザルヲ以テ價値アリトス、小兒ノ吐劑使用ニ

祛痰劑

向テ緊要ナル規則トセラル、所ハ大凡次ノ如シ、既ニ吐劑ヲ用テ其目的ヲ  
 達スルモハ直チニ連用ヲ停止ス可シ、只ダ其小兒ニ向テ止ムヲ得ザルノ原  
 因アリテノミニ二回使用スルコトアルモ、若シ已ニ心衰弱ノ症候アルモハ決シ  
 テ用ユ可カラズ、又通例量ニヨリテ直ニ効ナシト雖モ、決シテ分量ノ増加ニ  
 ヲリ嘔吐作用ヲ試ム可カラズ

祛痰劑 祛痰劑トシテ余ハ又常ニ吐根ヲ採用ス如何トナレバ胃及ヒ腸ヲ  
 害スルコト最モ少ナク、且ツ發汗作用ヲ有スレバナリ、此ノ作用ハ呼吸器ノ疾  
 病ニ向テ屢々甚ダ希望スル所ナレバナリ、攝温瓦根ハ甚ダ之レニ類似ス、而  
 シテ不快ナル副作用ヲ起スノ恐レナシ、其他類似セル價値ヲ有スルハ、礞砂  
 加亞尼私精、鹽酸亞銅莫爾比涅ノ内服及ビ皮下注入ナリ、エセル水、チロペ  
 ルザルツ、水等ハ僅カニ用ユルニ足ル、如何ナレバ容易ニ胃ヲ害スレバナリ、  
 礞砂、金硫黃、安息酸花モ亦々之ニ同ジ、又々常ニ吐根及ビエセル水ヲ温牛  
 乳ニ加ヒテ用ヒ、若シ少シク強ク亢奮センメント欲セバ攝温瓦根浸、礞砂加  
 亞尼私精ヲ加ヒタルモノヲ用ユ

麻醉劑

興奮劑 小兒ニ用ユル興奮劑ハ上ニ述ベタル安母尼亞劑ノ他ニ、龍腦、蘇香、依的兒ヲ用ユ、而シテ外用ニ於テハ芥子末、薄荷ノ如キモノヲ用ユ、凡テ此ノ種ノ藥劑ハ注意シテ使用セザル可カラズ、殊ニ終ノ二品ニ於テ然リ、之レ幼兒ニアリテハ甚ダ容易ニ尿閉ヲ起シ、加之尿道ノ炎症ヲ起セバナリ

麻醉劑 麻醉藥ハ小兒年齡ニアリテハ、只ダ絶對的必要ナル場合ニ於テノミ使用シ、常ニ其作用上ニ注意シテ用ヰザル可カラズ、英○爾○比○混○ハ○喘○乳○兒○ニアリテハ殆ンド全ク禁ズ可シ、而シテ只ダ他ノ麻醉劑ノ効ナキキニノミ用ユ、又阿片ハ初六ヶ月ノ小兒ニアリテハ細心熟考ノ上缺ク可カラザルモノト決斷スルルニノミ用ユ可シ、(英爾比混ハ一回ノ量ハ一年小兒ニアリテ○三三密瓦ヨリ多カル可カラズ、三年小兒ト雖モ一密瓦ヲ超ユ可カラズ、單阿片丁幾ノ一回量ハ六ヶ月小兒ニアリテハ凡ソ三分一滴、二年小兒ニアリテハ凡ソ一滴、而シテ分量ニ付テハ詳細ハ各病ノ章下ニ就テ見ヨ、英○爾○比○混○ハ内服、皮下注射、洗腸トシテ用ヰ阿片丁幾ハ内服及ビ洗腸トシテ用ヰ、バ○ル○テ○ロ○ト○ハ味ノ不長ナルヲ以テ使用セズ、從來小兒ニ就テハ○ズ○ル○ホ○ナ○

*Paraldehyde*

鎮痙劑

シト少シ、手術ニ際シ及ヒ痙攣ノ各個ノ場合ニ於テ嘔吐、眩暈、ハ缺ク可カラズ、抱水格、公刺兒ハ小兒病ニアリテハ其利用甚ダ廣大ナリ、又タ古加乙混ハ注意シテ用ヰザル可カラズ、又知覺及反射機能ヲ減少セシムルノ目的ヲ以テ苦扁桃水ヲ用ユ、即チ毎日三回乃至四回、小兒年齡ニ應ズルノ滴數ヲ與フ、

鎮痙劑 麻醉劑ノ他ニ刺戟ノ緩和藥トシテ用ユ可キモノハ臭素劑ナリ、而シテ臭素安眠尼亞及ビ臭素那度倫ヲ臭素加里ヨリモ稱用ス、如何トナレバ凡テノ加里劑ハ心臟ニ向テ容易ク不長ノ作用ヲナセバナリ、各臭素抱合物ハ殊ニ百日咳ノ痙攣性咳嗽、定期性夜間咳嗽、上眼瞼痙攣、聲門痙攣及ヒ急痙攣ニ用ユ、喉頭及ビ氣管枝炎ノ刺戟咳嗽ノ減少ニ向テ安息香酸阿片丁幾ト吐根ノ合劑ヲ藥劑水劑等トシテ用ユ、尿排泄ノ疼痛ヲ緩解セシムルニハ屢々龍腦ヲ稱用スレモ、小兒ニアリテハ通常用ヰズ

神經強壯劑 ニハ規尼混ヲ以テ最良トス、就中鹽酸規尼混或ハ鞣酸規尼混ヲ稱用ス、又タ、コッフエイン、ハ枸橼酸、コッフエイントシテ神經痛、神經性頭痛ニ用

神經強壯劑

強壯劑

變質劑

井、番木甙ハ番木甙丁幾トシテ内服ニ一乃至五滴ヲ與ヘ、硝酸斯萬里幾尼混トシテハ十分一乃至五分一乃至二分一密瓦ヲ皮下注射トシテ不全麻痺並ニ全麻痺ニ用ユ、此ノ場合ニ於テハ電氣流通ヲモ亦々用ユ、亞鉛ハ酸化亞鉛或ハ羧草酸亞鉛トシテ舞蹈病、癩癩ニ用井、硫酸亞鐵、亞鐵、比濕ハ牙關緊急、遺尿症ニ内服或ハ注射トシテ用井、初生兒ハ二百分一密瓦、成長セル小兒ハ内服トシテ二十分一乃至十分一密瓦、最モ多クハ十分二密瓦ヲ以テ一回ノ量トス。

強壯劑ハ小兒療法ニ於テハ規尼混ト共ニ鐵ハ缺ク可カラズ、而シテ乳酸鐵、蛋白鐵、沃度鐵、舍利別トシテ用ユルヲ最良トス、成長セル小兒ハ魚性磷酸鐵水ヲ用ユ。

變質劑 所謂變質劑ハ小兒ニアリテハ沃度及ビ沃度加里、水銀及ヒ砒石ヲ用ユ、沃度ハ沃度丁幾トシテ外用シ、沃度加里ハ軟膏トシテ外用ス、溶液トシテハ内服ニ腺病及ビ炎性滲出物ノ殘查並ニ腺ノ浸潤ニ向テ内用セシム、水銀ハ軟膏トシテ灰白軟膏、赤降汞、黃色沃度化汞用井、甘汞トシテ梅毒、腺病疾

利尿劑

發汗劑

解熱劑及ヒ解熱法

患ニ向テ内用セシム、砒石ハホルレル氏液トシテ殊ニ注意シテ慢性ノ皮膚病、小舞蹈病ニ與フ、又々燒ハ當時尙優病ニ多ク用井ラレシ。

利尿劑 利尿藥ハ小兒ニアリテハ最モ緩和ノ藥劑ヲ用ユ可シ、如何トナレバ尿分泌ト尿排泄ノ臟器ハ之レガ爲メ甚ダ刺戟セラレ易ク、且ツ銳敏ナレバナリ、此ノ如キ緩和利尿藥ハ醋酸加里、レウカイスチ根、オノニス根、杜松子、トロゼル水、乳酸及ヒ撒里矢爾酸那萬留讓テオプロモン(利尿素)等ヲ用ユ、凡テ峻劇ナル利尿劑ハ如何ナル場合ニモ決シテ用ユベカラズ、之レニ反シテ實答利私ハ適應症ニアツテノミ之レヲ用ユルヲ得可シ。

發汗劑 發汗藥ハ小兒ニ只ダ甚ダ稀レニ用ユルノミ、此ノ代用トシテハ通例熱キ乳汁、燗酒等ヲ以テ足レリトス、若シ藥劑ヲ用ユルキハ醋酸安母尼亞接骨木花ヲ瓦シトス、只ダ特別ナル適應症ニアリテ必魯加爾比混テ(皮下注射)用ユルノミ。

解熱劑 解熱藥劑ハ小兒療法ニアリテハ大人療法ノ如ク屢々使用セズ、如何トナレバ一ニハ小兒ハ屢々高熱ニ達スルモ格段ナル療法ヲ施サズシテ



自カラ解熱シ、二ニハ小兒ハ實驗上大人ヨリモ高熱ニ堪エ得ルモノナレバナリ(夫レ故ニ小兒ノ心臟ハ通例熱ノ爲メニ侵サレサルモノナラン)、凡テ小兒ニアツテハ早時ニ解熱藥ヲ要セサルモノナリ、若シ熱度突然昇進シ而シテ原因不明ナルキハ先ツ適當ノ攝生ニヨリ自カラ減少或ハ停止セサルヤニ注意セサル可カラズ、而シテ已ニ中等度ノ高熱(攝氏三十九度乃至三十九度五分)ニ達スルモ、蓋リニ解熱劑ヲ用ユ可カラズ

今小兒ノ解熱療法ヲ述ベンニ、常ニ大人ニ用ヰラル、所ノ各藥劑ハ小兒ニ向テ悉ク使用スルコトヲ得ズ、小兒若シ抗抵抗力ヲ有シ、貧血ナラサルキハ、規則上躊躇セズシテ冷浴、冷濕擦、冷濯液、水瀝ヲ施ス可シ然レモ余ハ過度及ビ久時ノ體溫擦奪及ビ殊ニ生後十五ヶ月間ノ頭部水電法ノ繼續ハ實ニ戒心セリ、強度ノ冷却法ハ最モ不快ナル場合ニ於テハ容易ク虛脱ヲ起スモノナリ故ニ極端ニ旨フキハ禁止ス可キモノナリ、熱性不安及ビ不眠ハ攝氏二十七度ノ浴中ニ五分間入ラシメ、熱性嗜眠狀態ニアリテハ溫浴中ニ於テ冷濯液ヲ行フテ最モ有効ナリトス、解熱劑ニ就テ余ハ多年ノ經驗ニ由リ規尼涅劑

殊ニ鹽酸規尼涅或ハ硫酸規尼涅ヲ他ノ各解熱劑ヨリモ常ニ服用セリ、該藥劑ハ定期性發熱、肺炎、及ビ腸壁扶斯ニアリテハ心臟衰弱ヲ豫防スルニ適當ナルモノナリ、規尼涅ハ心臟ヲ衰弱セシムルヨリモ寧口之レヲ強ムル所ノ解熱劑ナルコトハ爭フ可カラズ、三年小兒ハ〇、二瓦、八年小兒ハ〇、四瓦、十四年小兒ハ〇、七五瓦チ一回量トシテ與フ、噉里矢留酸曾達ハ只ダ熱ヲ下降セシムルノ作用ヲ有スレモ、亦々直ニ心臟ノ作用ヲシテ弱カラシムルモノナリ、又多クノ小兒醫ノ贊賞スル安賀比林ハ屢々不快ナル嘔吐刺戟、加之虛脱ニ似タル症狀ヲ副發スルコトアリ、其量ハ三年小兒ニハ〇、二瓦、八年小兒ニハ〇、五瓦、チ三回每一時間ニ與フ、アソチエアリシハ前者ヨリモ害少ナシ、只ダ稀ニ嘔吐刺戟ヲ副發スルノミ(然レモ先ツ試驗量チ一年ニ就キ〇、〇一瓦宛チ與フ可シ)、三年小兒ニアリテハ一乃至三回〇、〇五瓦、八年小兒ニハ〇、一瓦、十四年小兒ニハ〇、二瓦チ與フ可シ、硫酸タルリウムハ七倍ノ冷水ニ溶解シ用ニハステッフエン氏及ビビードルト氏等ノ說ニ從ヘバ小兒ノ腸壁扶斯ニアリテ其効アリト云フ、余ハ實驗上熱ニ向テ此ノ藥劑ノ其効アルヲ確定セリ

藥劑用法ノ種類

ト雖モ、規尼涅ヲ用ユルコト能ハサルキニノミ使用ス、分量ハ毎二時間ニ三年ニアリテハ〇〇一瓦、八年ニアリテハ〇〇二瓦、十四年ニアリテハ〇〇四瓦、ヲ用ユ(マルリン)ハ心瓣膜病及ヒ腎臟病ニ向テ禁忌ス可シ)

藥劑用法ノ種類 調劑ノ種類中丸劑、錠劑及ヒチヅラ(ト)ハ十年以上ノ小兒ニ用ユル者ニシテ、是ヨリ以下ノ者ニハ全ク用ユルヲ得ズ、製劑種類中最モ小兒ニ適當ナル者ハ液體ナルベキヲ勿論ナリ、故ニ水劑、振盪劑、舍利別劑、錠劑、乳劑等固ヨリ適當ナル者ナリ、若シ散劑ヲ小兒ニ與ヘントスルキハ大人ニ與フル如ク水ヲ以テ嚥下セシメズシテ、其散劑ノ性質ニ從テ水、砂糖水、葡萄酒、粘滑液若クハ乳汁ニ混シ能ク之レヲ攪拌シテ服用セシム、而シテ若シ爲シ得クンバ通例ノ飲料若クハ食品ニ加ヘテ與フルヲ良シトス、長シタル小兒ニハ其他煉劑ヲ與フルヲ得、煎餅劑或ハ錠劑ハ殆ソド總テノ小兒ニ用ユルヲ得、例之ハ珊瑚寧、蝦性麻、偲涅矢亞、重碳酸那篤、留謨、鞣酸、磷酸石灰、咖啡涅、阿片、乳酸鐵、百弗頓化鐵、沃度加留謨、規尼涅、酸化亞鉛等之レナリ、此ノ形狀ノ藥劑ヲ用フルキ

皮下注射及灌腸法

ハ殆ソト常ニ小兒ノ抗拒ヲ禦グヲ得可シ、小兒若シ我意強キカ、或ハ藥劑ノ味佳ナラザル爲メニ甚シク怒リテ、到底其抵抗力ニ勝ツコト能ハザルキハ、皮下注射或ハ灌腸法ヲ行フ、而シテ其ノ藥劑ノ性質ニ從テ處置スベキヲ勿論ナリトス、若シ患兒失神狀トナリ嚥下スルコト能ハザルキハ此ノ二法ハ直ニ其必用ヲ生ズル者ナリ、皮下注射若クハ灌腸法ヲ行フキハ其藥劑ノ量ハ内服量ヨリ少シク小ナルヲ要ス、灌腸液ノ全量ハ四年以下ハ五十乃至六十立方仙迷、四年以上八年以下ハ六十乃至七十五立方仙迷、八年以上十四年以下ハ七十五乃至百立方仙迷トス

小兒ヲシテ強テ液體ノ藥劑ヲ内服セシメントスルニハ、小兒ノ兩腕ヲ確ク持テ、而シテ鼻孔ヲ壓迫ス可シ、然ルキハ小兒ハ口ヲ開カザルヲ得ズ、是ニ於テ其瞬間ニ藥劑ヲ迅速ニ舌上ニ置ク可シ、然ルキハ小兒ハ能ク藥劑ノ全量ヲ嚥下ス可シ

藥劑ノ分量ハ大人ニアリテモ充分精密ナルヲ要スレド、小兒ニ在テハ殊ニ一層ノ注意ヲ要ス、若シ食匙、兒匙、茶匙、及ビ滴盃ヲ以テ藥劑ヲ與ヘ

小兒ニ水劑ヲ内服セシムルノ法

藥劑分量ニ關スル注意

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

ント欲セハ其都度其藥劑ヲ量ラザルベカラズ何トナレハ藥劑ニヨリ其重量一ニシテ其ノ容量均シカラザレハナリ其他又主治醫ハ各病家ニ確實ナル匙及ビ滴蓋ヲ備ヘ置ク可シ

茲ニ液劑ヲ小兒ニ與フルニ甚ダ便利ナルモノアリ即チ磁器製ノ嘴樣碗形ノ匙ニシテ其上下ハ閉鎖シ廣キ一端ニ穴アリテ藥劑ヲ入ル、口トシ、狭キ一端ニハ小圓穴アリテ此ノ端ヲ小兒ノ口中ニ入ル、此ノ匙ヲ用ユルキハ小兒背位ニアリテ動かザルモ、ヨク一滴モ失フヲナクシテ藥劑ヲ與フルヲ得ル者ナリ

要用ナル藥劑ノ極量

附錄 要用ナル藥劑ノ極量表

藥名	一年未滿	三五年以下	十八年以下
靚羅誤化安母尼亞	〇・一	〇・三五	〇・五
安知布親林	〇・〇一	〇・〇五	〇・一
安知必林	〇・一	〇・三	〇・五
亞劉英爾比涅(祛痰劑)	〇・〇〇〇八	〇・〇〇三	〇・〇〇六

甘草	〇・〇一	〇・〇三	〇・〇五
鹽酸規尼涅	〇・一	〇・三	〇・四一〇・五
綿馬越幾斯馬拉低葛	〇・五	三〇	五〇
乳酸鐵	〇・〇一	〇・〇二五	〇・〇五
靚羅誤化加留誤	〇・一	〇・三五	〇・五
格魯兒酸加留誤	〇・〇六〇・一	〇・二	〇・三
沃度化加留誤	〇・〇一	〇・〇四	〇・〇八一〇・一
鹽酸英爾比涅	.....	〇・〇〇一	〇・〇〇三
磷	.....	〇・〇〇〇五	〇・〇〇一
吐根(吐劑)	〇・二	〇・四	〇・五
珊篤尼涅	.....	〇・〇一	〇・〇二
沃鐵舍利別	一滴	四滴	八―十滴
單阿片丁幾手兒	1/4―1/2滴	一―二滴	三―四滴

外用藥

外用藥劑ノ應用ハ小兒ニアリテハ注意ヲ要ス、如何トナレハ小兒ノ皮膚ハ甚ダ銳敏ナレハナリ、故ニ強ク塗擦シ、及ビ一處ニ長時間塗擦シ置クヲ避ケサルベカラズ、若シ必用アリテ強キ皮膚ノ刺戟藥(芥子、芫菁)

總論、病兒ノ一般ノ攝生法及治療法

吸入

ヲ用ユルキハ短時間ヲ限ル可シ、吸入ハ小兒説諭ニヨリテ平穩ナルカ  
若シハ睡眠スルカ、又ハ充分ナル知覺ノナキキニ於テ用ユ可シ、又タ口  
内ノ洗滌藥及ビ含嗽藥ハ只ダ五年乃至六年以上ノ小兒ニノミ用ユル  
ヲ得可シ、風送(鼻)咽頭ハ孰レノ年齢ニアリテモ行フヲ得

### 小兒ノ浴

藥湯

浴藥ノ容量及其溫度

#### 甲藥湯

小兒ノ全身浴ニ要スル浴ノ容量ハ、年齢ニ從テ五十乃至百乃至二百リ  
ルトシ、半身浴ハ三十乃至六十乃至百五十リ、リテルトス  
冷水浴ノ溫度ハ列氏二十度乃至二十四度トシ、微温浴ハ列氏ノ二十五度乃  
至二十八度トシ、温浴ハ列氏二十八度乃至三十二度トシ、熱浴ハ列氏ノ三十  
二度乃至三十六度トス

芳香浴

芳香浴 ハ「カミル」花「キロ瓦」若クハ半「キロ瓦」ノ「カミル」根ヲ「リ」テ  
ル牛ノ水ニ滲出シテ浴湯中ニ投ズ

糠浴

糠浴 ハ「キロ瓦」半ノ小麥糠ヲ麻製ノ袋ニ納レテ其口ヲ絞リ、四乃至五リ

麥芽浴

「リ」タルノ水ヲ以テ半時間釜中ニ煮了シ、其ノ煮汁ヲ浴湯中ニ投ズ  
麥芽浴 ハ「キロ瓦」ノ麥芽ヲ五「リ」タルノ水ニテ煮之レテ濾過シ、温浴湯  
中ニ投ズ

石鹼浴

石鹼浴 二〇〇乃至二五〇瓦ノ細末ニセル那篤留膜石鹼ヲ「リ」テ  
ルノ熱湯中ニ溶解シ、之レヲ温浴湯中ニ投ズ

芥子浴

芥子浴 一〇〇乃至二〇〇瓦ノ芥子粉ヲ麻製ノ小盞中ニ入レ、其口ヲ  
絞リ、温浴湯中ニ投シ、攪ス

鹽浴

鹽浴 一乃至二乃至三「キロ瓦」ノ海鹽或ハ「スター」フルト「リ」ノ浴鹽ヲ浴湯中  
ニ溶解シ、列氏二十四度乃至二十七度トナス

昇汞浴

昇汞浴 一〇瓦ノ昇汞ヲ半「リ」タルノ水ニ溶解シテ之ヲ浴湯中ニ加フル  
者ナリ

温泉及養病處

乙 獨逸、埃國、瑞西、白耳義、和蘭、典國、及ビ伊太利諸國ニ於ケル小兒  
治療ニ要用ナル温泉及ビ養病處ハ左ノ如シ  
但シ泉名、地名等ハ全ク譯スノ必要ナキヲ以テ略ス

- 第一 海水浴
- 第二 鹽泉
- 第三 單溫泉
- 第四 硫黃泉
- 第五 鐵泉
- 第六 亞爾加里鐵泉
- 第七 小兒ニ適スル田舎ノ養病處
- 第八 高爽養病處
- 第九 冬時養病處
- 第十 肺患者ノ養病處

### 第五章 小兒ノ疾病統計

小兒ノ年齡ニ從テ其ノ罹ル所ノ疾病同シカラズ而シテ各箇ノ年齡ニ從テ其ノ最モ多ク罹ル處ノ疾病等シキヲ得ズ、小兒ノ最モ多ク疾病ニ罹ルハ第一年ニシテ、最モ少キハ第十年乃至第十五年ノ間トス、殊ニ健

#### 小兒ノ疾病統計

早産時ノ疾病

初生兒ノ疾病

第四週ノ終ヨリ第二  
年ノ初ニ至ル小  
兒ノ疾病

康ヲ損シ易キハ第一ヶ月及ビ離乳時トス、早産小兒ノ最モ多ク罹ル疾病ハ一般孱弱、肺萎縮、肺炎、消化不良、齶口瘡、哺乳力不充足ニ因スル飢餓、メレナトス、初生兒ノ數々罹ル疾病ハ一般孱弱、消化不良、齶口瘡、黃疸、膿漏性結膜炎、產褥性傳染病、丹毒、臍血管炎症、牙關緊急、破傷風、痙攣等ナリトス

第四週ノ終ヨリ第二年初ニ至ル間ニ最モ多ク疾患スルハ、消化器病殊ニ急性腸胃加答兒、慢性胃加答兒、慢性腸加答兒ニシテ、之レニ次グチ呼吸器病即チ喉頭加答兒、氣管枝加答兒、毛細氣管枝炎、加答兒性肺炎等トシ、之レニ次グ者ハ、神經系統ノ疾患ニシテ、急痙、聲門痙攣、腦膜炎、皮膚病、濕疹、濕爛、小膿泡疹、又チ之レニ次グ、此ノ年齡ニアリテハ、傳染病ハ比較的稀ナリ、只ダ麻疹及ビ百日咳、稍々多ク、猩紅熱及ビ實布の里ハ大ニ稀ニシテ、腸室扶斯ノ如キハ極メテ稀有ニ屬ス、之レニ反シテ、結核ハ遙ニ多數ニシテ、其ノ發現ノ徵候一樣ナラズ、第九ヶ月ニ至レバ、主トシテ結核性腦膜炎トシテ發現ス、體質的ノ諸病ハ、佝僂病ニシテ多數ハ第

第二年ヨリ第六年ノ終ニ至ル小兒ノ疾病

一年ノ終リニ來ル、先天性ノ梅毒ハ若シ最初潜伏セルトキハ生後六ヶ月以内ニ發スル者トス、腺病ハ通例此ノ年期ニハ未ダ發セザルモノナリ、  
第二年初ヨリ第六年ノ終リ迄小兒ハ他ノ年齡ノ小兒ニ比シテ呼吸器病ニ罹ルコト多ク之レニ反シテ消化器病ニ罹ルコト少ナシ、其他容易ニ麻疹、蓋薇疹、百日咳、耳下腺炎、水痘、實布の里ニ罹ル者トス、又此ノ年齡ニ於テハ腺病始マリ、佝僂病ノ固有經過ヲ取ル、而シテ此ノ年期ニ至レバ

第六年乃至第十五年ニ至ル小兒ノ疾病

神經系統疾病ノ數減少ス、  
第六年乃至第十五年即チ小兒最後ノ年齡ニアツテハ主トシテ所謂學校病、即チ近視、眼、脊椎側彎、神經症、筋衰弱、習慣性頭痛、習慣性衄血等ニ罹リ易ク、其他又タ學校ノ媒介ニヨリ傳染スル所ノ傳染病、即チ猩紅熱、他ノ年齡ニ比シテ多數ナリ、麻疹、痘疹、水痘、實布の里等ニ罹ル者トス、消化器病ハ比較的稀有ナレド呼吸器病ニハ罹リ易ク、殊ニ加答兒性肺炎ヨリモ格魯布性肺炎ニ罹ルコト多シ、加答兒性肺炎ハ殊ニ第一年ニ多ク、而

シテ常ニ殆ンド單獨ノ肺炎トシテ來ル、佝僂病及ヒ腺病ハ此ノ年期ニアリテハ其ノ結果タル徵候ヲ留ムルノミ、  
小兒年齡ノ諸病中消化器病ヲ以テ最も多數トス、之レニ次グハ呼吸器病ニシテ傳染病之レニ次ギ、神經系統ノ疾患及ヒ所謂體質的病又之レニ次グ、而シテ比較的ニ稀有ナル者ハ血行器病及ヒ泌尿器病ナリトス、  
最も危險ナルハ第一年ノ小兒ニ於ケル疾患ニシテ、殊ニ最初ノ四週間ナリトス、疾病ノ危險ノ度ハ年齡長加ノ度ニ從テ減少ス、春期發動機ニ接近スル年齡ニ於テ發スル疾病ハ、該期以後ニ發スル疾患ト大差アルコトナシ

第一編 全身病 第一章 原弱 Allgemeine Schwäche

一定ノ疾病ナクシテ全ク健康ナラザルノ小兒數多アリ、之レヲ原弱小兒トナス  
早産小兒ハ即チ原弱小兒ノ模範ヲ示スモノニシテ、體量ハ(二五〇〇、〇瓦以下)輕ク、身長四八仙迷以下、胸圍(二三乃至三四仙迷以下)共ニ小ナリ  
皮膚ハ枯瘦シテ脈冷シ、老人様ノ顔貌ヲ呈シ、脈搏及ビ心臟ノ力弱ク、體温平温以下ニ在リ、哺乳ハ強ク且ツ長クナスヲ能ハズ呼吸ハ淺ク、疲勞シテ唸ル如キ號泣ヲナシ、常ニ睡眠ヲ貪ボル低温ニ向テ非常ニ感シ易ク、全身官能ノ働作總テ著シク微弱ナルモノナリ、小兒若シ分娩時ニアタリテ體重一〇〇〇〇瓦以下、身長二七仙迷以下ニシテ、温暖ニ保ツト雖、體温攝氏三十五度ニ登ラザルモノハ成育スルヲ稀ナリトス、然レモ第三週ノ終末ニ至リ體重増加シ、哺乳力強クナルキハ、多クハ生活ヲ保チ得可シ、然リト雖モ其ノ發育ハ又成熟分娩兒ニ著シク後ル、モノ

ニシテ、規則上全小兒期ノ間加之全生活期間モ亦タ軟弱ニシテ抵抗力微弱ナルモノナリ、(ミルレル氏小兒病學年報第二十五卷第一七七頁ヲ比較セヨ)早産ノ保護ニ就テハ總論ヲ見ヨ  
其他原弱小兒ニ就テハ次ニ論述ス可シ  
原弱小兒ノ多數ハ一見シテ以テ其體重、身長、身幅ノ通常ヨリ多少退縮セルヲ知り得可シ、如此小兒ハ十二歳ニアリテ七歳或ハ八歳、十四歳ニアリテ九歳或ハ十歳ノ外觀ヲ呈ス、而シテ吾人ハ尙痿病、腺病ノ痕跡及ビ貧血等ハ勿論、其他全ク固有ノ疾病ヲ發見セズ、精神ハ規則上一般ニ通例ナリ、時トシテハ特ニ發達スルコトアリ、而シテ體重、身長、周圍ノ僅ナルノ他、顔色快活ナラズシテ粘膜ハ赤色ナラズ、皮膚ハ軟弱ニシテ脂肪組織少ナク、骨ハ纖長ニシテ筋肉軟弱ナリ、脈搏ハ強實ナラズ  
此ノ種ノ小兒ハ疾病ノ爲メ早時ニ死セザルキハ、永ク軟弱ニ止マルモノナレモ、又數々一定ノ時期、通例十歳、十一歳或ハ十五歳ヨリ、原因不明ナレモ發育頗ニ盛大トナリ、長經及ビ幅經ハ著シク速ニ増加シ、體重ハ

速ニ昇リ、而シテ其他缺クル所ノ諸點ハ直ニ回復シ、筋ハ廣袤ヲ増シ機能ヲ備ヘ、顔色快活トナルコアリ

孱弱小兒中亦々長經短ナラズシテ却テ屢々通例ヨリ長キコアリ、然レ此之レニ反シテ幅經、胸圍ハ僅少ニシテ、顔色及ヒ粘膜ハ蒼白、骨纖長、筋肉軟弱、脂肪僅少、靜脈甚シク透見シ、脈搏軟弱ナリ、而シテ疲勞シ易ク、甚ダ興奮シ易シ、又甚ダ外製刺激ニ感シ易シ、而シテ證明ス可キ機器ノ疾患ナシ如此小兒ハ其年ヲ經過スルモ缺乏ハ回復セズ、幅經、胸圍ハ通常ニマテ達スルコト能ハズ、筋肉ノ機能ハ充分トナルコト甚ダ稀ナリ斯カル小兒ハ身體常ニ細長且ツ薄弱ニシテ、甚ダ疾病ニ罹リ易ク、又々結核ノ素因ヲ有ス、此ノ如キ小兒ノ多數ハ結核或ハ他ノ疾病ニヨリ早時斃ル、モノナリ

又體容積體重通例ヨリ少ナカラズ且ツ固ヨリ貧血ナラズト雖、色澤活快ナラズシテ、筋肉甚ダ弛緩シ、筋肉働作甚ダ弱ク、外製ニ向テ甚シク感シ易キ孱弱小兒アリ、如此小兒ハ正規ノ保護ヲ怠ラザルキハ強壯ニ

原因

豫防法及治療法

貧血

發育セシムルコトヲ得ン、然レ此保護ヲ與ヘザルキハ終身孱弱ニシテ終ルカ或ハ早時ニ併發スル疾病ノ爲メニ斃ル、ニ至ル可シ

孱弱ノ原因ハ甚ダ種々ニシテ先天性ニ來ルコト最多シトス、即チ兩親ノ早婚、疾病、虛弱、梅毒、結核ノ爲メ或ハ妊娠中疾病、心勞、危難ニ遭遇セシキニアリ、然レ此亦々後天性ニ來ル、實ニ不充分或ハ不適當ノ營養(比較的甚ダ屢々小兒ノ孱弱ハ新タニ懷妊セル母若クハ乳母ニ就キ永ク哺乳セシムルコトニヨリ來ル)消化器管ノ疾病、保護ノ不完全、住居ノ不健康、筋肉練習ノ不充分、身體及ヒ精神ノ過早過強ナル勞働、有害ナル習慣(手淫)經過緩慢ナル疾病及ヒ成長早キニ過グル等ニヨリ起ル

豫防法ハ貧血病ノ豫防法ヲ見ヨ

治療法モ亦々貧血病ノ治療法ヲ見ル可シ

第二章 貧血 Anämie.

貧血ハ赤血球ノ減數(血中赤血球ノ病的減少)及ヒ血色素量ノ減少ニ關係ス、患者ノ顔面ハ鉛色或ハ土色、粘膜ハ蒼白色、皮膚ハ實性充血ニ乏シ



惡性貧血

經過

ク、眼ハ倦怠ノ外觀ヲ呈シ、體及ビ精神ハ容易ク疲勞シ、屢々頭痛アリ、怒  
 リ易シ、尿ハ淡色ニシテ比重輕ク、食慾缺損シ、消化不良ニ陥リ易キ傾向  
 アリ、而シテ注意シテ善ク診察スルモ只ク軟弱ニシテ甚ダ興奮シ易キ脈  
 搏ト心臟(最モ著シク)第二肋間胸骨緣ニ於テ肺動脈ニ聽ユ、而シテ呼吸  
 樣性質ヲ有ス、及ビ頸部大靜脈ニ貧血性雜音アルノ他、一ツモ異常ヲ認  
 メズ、實ニ此ノ雜音モ亦ク第一年及ビ第二年ノ貧血小兒ニハ屢々全ク  
 缺ケ或ハ只ダ微カニ認メ得キコアリ  
 甚ダ強度ノ赤血球ノ減數ト、高度ノ多形赤血球ヲ有セル惡性貧血ハ、小  
 兒年齡ニ於テ非常ニ稀ナリト雖モ、又之レナキニアラズ、然ルモ大人  
 ト同一症候、即チ甚シキ蒼白、甚シキ疲勞、消化不良、僅ナル勞力ニヨリ呼  
 吸困難、鼻出血及ビ内臟出血、體温上昇ヲ發ス  
 貧血ノ經過ハ慢性ナリ、然レモ種々ニシテ時トシテ一二週、屢々一二ケ  
 月ノ經過ナルコアリ、然レモ若シ原因持續シ且ツ正當ノ保護ヲ行ハザ  
 ルモハ屢々數年ニ渡ルコアリ、小兒ハ屢々貧血ヲ幼年時中患フト雖モ、

豫后

診斷

多クハ貧血ヲ起ス素因ノ結果ニヨリ他ノ疾病ノ爲メニ斃ル、モノナ  
 リ此ノ如キ貧血ノ素因ハ腺病及ビ結核並ニ呼吸器、神経系疾患ナリ、而  
 シテ貧血症ヲ患フル小兒若シ下痢、痲疹、百日咳ニ罹ルモハ、健全小兒ヨ  
 リモ死スルコト甚ダ多數ナリトス、惡性貧血ハ孱弱ノ常ニ増加スル爲メ、  
 規則上比較的速ニ死ニ導カル、然レモ又若シ原因ノ治スルモハ全治ス  
 可キモノナリ  
 特發性貧血ノ豫後ハ一般ニ良ナリ、小兒ノ貧血ハ正規ノ保護ニヨリ必  
 ズ大人ノ貧血ヨリ速ニ治癒スルモノナリ、如何トナレハ小兒體ハ大人  
 ヨリモ回復能力ニ富メハナリ、不正ノ保護ニアリテハ貧血小兒ハ併發  
 スル疾病ニヨリ貧血大人ヨリ速ニ斃ル、モノナリ、繼發性貧血ノ豫後  
 ハ原因疾病ニ關係スルコト論チ俟タズ、而シテ惡性貧血ノ豫後ハ甚ダ不  
 良ナルコト上述ノ如シ  
 貧血ノ診斷ハ困難ナルコト稀ナリ、貧血ハ脾臟肥大ノ缺乏、白血球剩數ノ  
 缺乏及ビ白血病ニ來ル數多ノ核ヲ有スル白血球ノ缺乏ニヨリ白血病

全身病、貧血

ト區別ス、小兒ノ假性白血性貧血ニ就テハシヤクシニ氏論説ヲ見ヨ。萎黄病ハ皮膚蠟樣蒼白ニシテ、貧血ノ皮膚ハ青白黄色樣蒼白ナリ、又萎黄病ハ發育ノ最モ盛ナル年齢ニ來ルモノナリ、貧血ハ特發ナルヤ、將タ只ダ他ノ疾病ニ繼發セルモノナルヤハ、各場合ニ於テ看破スルヲ容易ナラズ、貧血ハ通例ノ血液形成ヲ妨グル所ノ種々ノ疾病、即チ梅毒、結核ノ如キモノヨリ來ル、而シテ原因疾病ハ尙ホ全ク特有ノ徵候ヲ現ハサルルニ已ニ貧血ヲ發スルモノナリ、夫レ故ニ貧血ナル診斷ノ不満足ナル各場合ニハ、益々注意シテ既往症及ビ全身ノ診察ニヨリ、貧血ハ特發ナルカ又ハ否ラザルカ、而シテ乙ノ場合ニ於テハ原因疾病ノ如何ナル性質ナルヤヲ研究ス可シ。

原因

原因 貧血ハ小兒ニ比較的屢々目撃ス、蓋シ怪ムニ足ラザルナリ、發育シツ、アル有機體ハ比較的少量ノ營養品ヲ要ス、如何トナレバ身體諸機關ハ現ニ造構中ニシテ、新陳代謝ハ後年ヨリ亢盛ナレバナリ、夫レ故ニ若シ輸送ノ需要ニ足ラザルキハ、大人ヨリ容易ニ障害セラル、ハ勿

先天性貧血ノ原因

論ニシテ、而シテ先ツ初ニ血液ノ状態ニ變化ヲ及ボスハ自然ノ理ナリ、貧血ハ小兒ノ各時期ニ發スルモ、最屢、初十八ヶ月内ニ、次テ春季發動期及ビ體ノ速ニ發育シ殊ニ大量ノ營養品ヲ要スル時期ニ來ル、此ノ時期ノ間ハ屢々學年期ニ於ケル屋外運動ノ不充分、血液形成ヲ妨ゲラル疾病ハ先天性ナルヲアリ、此ノ場合ニアリテハ兩親ノ孱弱、或ハ疾病、或ハ酒家、或ハ早婚、又ハ妊娠中ノ疾病、心勞、或ハ過度ノ運動ヨリ素因セラ

后天性貧血ノ原因

貧血又ク後天性ニ發生ス、第一ニ不充分、或ハ配合其當ヲ得ザル食物、馬鈴薯食、又ハ保護ノ不完全、殊ニ住居ノ不健康、光線及清潔空氣ノ缺乏、其他筋肉ノ不充分ナル練習、或ハ又體及ビ精神ノ過早、或ハ過強勞用、惡キ習慣、手淫、寄生蟲、回蟲、縲蟲、十二指腸蟲、身體ノ漸次衰弱スル疾病、及ビ血液或ハ液汁消失、臍出血、胃出血、頑固ノ鼻出血、白帶下、繼續性下痢ニヨリ起ル、梅毒、及ビ結核ノ非常ニ屢々血液形成ノ妨害ヲ起ス、ハ已ニ上述セリ。

先天性貧血ノ預防

先天性貧血ノ預防ハ主トシテ早時結婚並ニ孱弱者及ビ疾病者ノ結婚ノ有害ナルヲ説諭シ其他妊娠中ハ可及的過度ノ運動ヲ止メ而シテ可及的良ク營養ス可シ

後天性貧血ノ預防

後天性貧血ヲ防クニハ小兒ノ保護凡テ完全ナラザル可カラズ營養品輸送ノ分量及ビ性質ニ付テハ注意シテ監督セザル可カラズ而シテ身體及ビ精神ノ過強及ビ過早ノ働キヲ避ケザル可カラズ有害ナル習慣ハ初期ニ防止シ重症ノ恢復期ハ可及的短縮セシムルヲ試ムベシ

治療法

治療法 現在セル貧血ハ凡テ原因療法ヲ行フ而シテ多數ハ成シ得可シ例之ハ保護ノ不完全ナル點現在セル消化不良梅毒結核寄生蟲ハ除去セザル可カラズ原因療法ニ對シテ特別ノ着目點ヲ發見セザルキハ醫師ハ營養法皮膚及ビ筋ノ保護法ヲ調ヒ住居狀態ヲ衛生的原則ニ隨テ整理セザル可カラズ營養品ニ付テ論ズレハ貧血小兒ハ全營養素ノ輸送ヲ緊要ナリト心得可シ然レモ規則上弱キ消化器ニ於テハ惡シ蛋白質ノ沈着即チ血球ノ新生ヲ獎勵スルニハ中量ノ蛋白質ニ大量ノ脂

肪及ビ少量ナラザル含水炭素營養鹽類殊ニ血色素形成ニ緊要ナル鐵ヲ多量ニ與フ可シ營養品ハ甚ダ消化シ易キヲ與ヘ無益ノ食物ヲ與フベカラズ夫レ故ニ動物性食物即チ乳汁例之ハ牛乳驢馬乳其他半熟卵肉類殊ニ生牛肉ノ薄片或ハ臘乾薄片ロースピロフ野獸鳥類肉メプトン蛋白製劑等ヲ適當トス植物性食物ニ就テハ殊ニ考慮ヲ要ス即チ小麥麵粉小麥粉豆粉製食品加々阿シヨコラーテ嗜好品中ニ就テハ善良ノ赤酒ポルト酒チント酒トカイル酒善良ノ麥酒乳汁咖啡肉羹及ビセリ酒加ブルンチングレーベル氏蛋白肉汁ヲ撰用ス  
食慾缺損スルキハ成長セル小兒ニアリテハ其ノ亢進ノ目的トシテ燕肉又ハビシヨーフ酒或ハポルテル酒ヲ與フ  
貧血ノ乳兒ハ假令ヒ其原因乳房ノ不充分ナル分泌ニアラズト假定スルモ先ヅ乳房ヲ放チ善良ノ乳母ニ之レヲ托ス可シ而シテ赤酒或ハ肉羹汁ニヨリ食慾ノ興奮ヲ計ル可シ  
貧血ノ人工營養乳兒ニアリテハ善良ノ性質ヲ有スル殺菌牛乳ヲ最モ

良トス、而シテ此ノ營養物ニ肉羹汁或ハ酒ヲ加入ス可シ  
 天然食物ノ他ニ清潔ノ空氣、海適當ノ高山地方、療病院ノ滞在ハ  
 卓効アリ、實ニ屢々只ダ場所ノ變換ノミニニ已ニ効ヲ奏スルコトアリ  
 若シ力量ニ適當スルキハ、筋肉ノ法式的體操ハ著シキ治効アルモノト  
 ス、之レ殊ニ貧血性學童ニ向テ然リ  
 入浴ハ停止ス可シ、如何トナレバ冷浴ハ過度ノ温ヲ奪ヒ、温浴ハ之レニ  
 反シテ衰弱セシメ睡眠ヲ高ムレバナリ  
 藥劑ハ可及的使用スベカラズ、而シテ原因ノ除去ト正當ノ保護トニヨ  
 リ目的ヲ達セザル可カラズ、此ノ如クシテ希望ヲ達セズ、貧血ハ高度ニ  
 シテ衛生的食物の規則モ其効ヲ奏セザルモ、鐵劑ハ缺ク可カラズ、而  
 シテ胃ヲ害セザル鐵劑ヲ撰拔ス可シ、殊ニ乳酸鐵ヲ良シトス、其處方左  
 ノ如シ

處方

乳酸鐵

二、五

枸橼油糖或ハ白糖

三〇〇

右混和散劑トナシ、硝子瓶中ニ貯ヘ、毎日三回一小刀尖宛(五年小兒ニ向テ)、  
 其他次亞磷酸鐵液(次亞磷酸鐵〇、三、水一〇〇〇)ヲ與フ、而シテ毎日三  
 回乳汁ト共ニ、或ハ食時中ニ半或ハ一酒盞ヲ與フ、之レ只ダ八乃至十歲  
 ヲリ以上ノ小兒ニ適スルモノニシテ、幼兒ニハ乳酸鐵ヲ用ヰザル可カ  
 ラズ、鐵泉療法ハ八歲以上ノ貧血小兒ニ行フ、而シテ「ピルモン」ト「ドリ」  
 「ブルグ」シ「ユワル」ハ「フ」ラ「ンツ」エ「ン」ス「バ」ド「」タ「ラ」ス「プ」  
 「サ」ント「モ」リ  
 ツ「チ」良「ト」ス  
 小兒若シ食慾缺損スルキハ上述セル攝生ノ他ニ最モ適當トシテ複方  
 機那丁幾、毎日三回五滴乃至十滴ヨリ二十滴マデ年齢ニ隨テ葡萄酒或  
 ハ「ピシ」ヨ「フ」酒中ニ混シ食事ノ真前ニ與フ可シ

引用書目

Lauche, Die Anämie 1883 und Deutsche med. Wochenschr. 1884, Nr. 43.  
 Henoch, Vorlesungen über Kinderkrankheiten, 6. Aufl, Capitel, "Anämie."  
 Bouehau, Gaz. des hopitiaux. 1875, Nr. 19.

良トス而シテ此ノ營養物ニ肉羹汁或ハ酒ヲ加入ス可シ  
 天然食物ノ他ニ清潔ノ空氣海適當ノ高山地方地方ノ療病院ノ滞在ハ  
 卓効アリ實ニ屢々只ダ場所ノ變換ノミニノ已ニ効ヲ奏スルコトアリ  
 若シ力量ニ適當スルキハ筋肉ノ法式的體操ハ著シキ治効アルモノト  
 ス之レ殊ニ貧血性學童ニ向テ然リ  
 入浴ハ停止ス可シ如何トナレバ冷浴ハ過度ノ温ヲ奪ヒ温浴ハ之レニ  
 反シテ衰弱セシメ睡眠ヲ高ムレバナリ  
 藥劑ハ可及的使用スベカラズ而シテ原因ノ除去ト正當ノ保護トニヨ  
 リ目的ヲ達セザル可カラズ此ノ如クシテ希望ヲ達セズ貧血ハ高度ニ  
 シテ衛生的食物の規則モ其効ヲ奏セザルキハ鐵劑ハ缺ク可カラズ而  
 シテ胃ヲ害セザル鐵劑ヲ撰拔ス可シ殊ニ乳酸鐵ヲ良シトス其處方左  
 ノ如シ

處方

乳酸鐵

二、五

枸橼油糖或ハ白糖 三〇〇

右混和散劑トナシ硝子瓶中ニ貯ヘ毎日三四一小刀尖宛(五年小兒ニ向テ)  
 其他次亞磷酸鐵液(次亞磷酸鐵〇三、水一〇〇〇)ヲ與フ而シテ毎日三  
 回乳汁ト共ニ或ハ食時中ニ半或ハ一酒盞ヲ與フ之レ只ダ八乃至十歲  
 ヨリ以上ノ小兒ニ適スルモノニシテ幼兒ニハ乳酸鐵ヲ用ヰザル可カ  
 ラズ鐵泉療法ハ八歲以上ノ貧血小兒ニ行フ而シテ「ピロモノト」  
 「ドリ」  
 「ブルグ」  
 「シユワ」  
 「ハッ」  
 「フ」  
 「ランツ」  
 「ユン」  
 「ス」  
 「ハ」  
 「ド」  
 「タ」  
 「ラ」  
 「ス」  
 「プ」  
 「サ」  
 「ント」  
 「モ」  
 「リ」  
 「ツ」  
 「チ」  
 「良」  
 「ト」  
 「ス」  
 小兒若シ食慾缺損スルキハ上述セル攝生ノ他ニ最モ適當トシテ複方  
 機那丁幾、毎日三回五滴乃至十滴ヨリ二十滴マテ年齡ニ隨テ葡萄酒或  
 ハ「ピシヨ」  
 「酒中ニ混シ食事ノ真前ニ與フ可シ

引用書目

Loache, Die Anämie 1898 und Deutsche med. Wochenschr. 1884. Nr. 43.  
 Henoch, Vorlesungen über Kinderkrankheiten, 6. Aufl, Capitel, "Anämie."  
 Bouchut, Gaz. des hôpitaux. 1876, Nr. 19.

Förster in Gerhardt's Handbuch der Kinderkrankheiten III, 1.  
 Solmann, Jahrb. f. Kinderheilkunde VIII, S. 175.  
 Quinke, Volkman's Sammlung von Vorträgen. Nr. 100 (Pernie Anämie).  
 H. Podwissorzky, Jahrb. f. Kinderhk. 29. S. 223. Kjellberg, Nord. med. Ark. XVI, 2.  
 Schapiro, Zeitschr. f. Klin. Medicin. XIII, S. 416.  
 V. Yaksch, Wiener med. Wochenschr. 1889. Nr. 22.

### 第三章 萎黄病 Chlorose.

萎黄病

症候

原因

萎黄病ハ主トシテ發育時期ニ發生スル所ノ全身病ニシテ、貧血ノ如ク赤血球ノ減數並ニ血色素量ノ減少ヨリ來ルモノナリ、而シテ恐クハ脈管系統ノ一定ノ病的變化ニ起因スルモノナラン

症候。小兒年齢ニ於テノ萎黄病ノ症候ハ、後年ニ來ル萎黄病ノ症候ト同シ、夫レ故ニ茲ニ記載セズ、而シテ只々大人萎黄病ニ屢々發スル所ノ胃痛ハ小兒ニアリテハ稀ニシテ且ツ微弱ナリ

原因。萎黄病ハ小兒ニアリテハ甚ダ稀ナラズ、殊ニ十二歳乃至十四歳ノ小兒ニアツテ然リトス、而シテ只々八歳以下ノ小兒ニハ稀有ナリトス、女子ハ男子ヨリ罹リ易ク其原因多クハ發見セラレズト雖モ、規則上

豫防法

治療法

發育ノ最モ盛ナル時期ニ於テ血液形成ヲ害セラル、キニ起ルモノナリ、萎黄病ハ小兒ニアリテハ不充分ノ食物、殊ニ鐵ニ貧キ植物性食物、其他不健康ノ住居、學校内長座、屋外ノ運動缺乏、筋肉操練ノ缺乏、不充分ノ睡眠、懷郷病、驚愕及ビ他ノ精神働作等ニヨリ發スルモノナリ

豫防法。萎黄病ノ豫防法ハ、後天性貧血ノ豫防法ト同様ナリ、故ニ貧血豫防法ノ如ク無論原因ニ隨フテ行フ可シ

治療法。之レ亦タ貧血ノ療法ト同様ナリ、要點ハ衛生的攝生的規則ニシテ、即チ正當ノ營養液汁ニ富メル赤色肉類ノ規則正シキ供給、澱粉及ビ糖分多キ物質ノ制限等ノ他、尙ホ屋外ノ運動ヲ勉メシメ、然ル後充分ノ睡眠ヲナサシメ、衣服ニヨリ呼吸及ビ胸廓ノ運動ヲ妨ゲザル様ニナス可シ

藥劑。ハ又容易ニ同化スル鐵劑ヲ用ユ、即チ乳酸鐵「ペプトン」鐵次亞磷酸鐵(貧血ノ條ヲ見ヨ)之レナリ

引用書目

全身病、萎黄病

Förster in Gerhardt's Handbuch der Kinderkrankheiten. III, 1, s. 203  
Virchow, Ueber die Chlorose 1872.  
Bouchut, Gaz. des hopitaux 1875, Nr 19.  
Nonat, Traité-theor. et prat de la chlorose. Paris 1864

### 第四章 白血病 Leukämie.

白血病

白血病ハ白色ナル、即チ所謂有核血球ノ増加ヲ以テ特徴トス、而シテ大人ニ來ル所ト同症候ヲ呈ス、故ニ簡單ニ記述ス可シ、患者ハ蒼白色トナリ、不機嫌ニシテ倦怠ヲ訴ヘ、僅ナル勞力ニヨリ呼吸困難ヲ來タシ、且ツ頭部、關節、脾臟部ノ疼痛及ビ眩暈ヲ訴フ、食慾ハ多クハ長ナレド、大便ハ下痢或ハ便秘ス、體温ハ通例ナルカ或ハ上昇ス、殊ニ合併症アルキハ容易ニ上昇ス、下腹ハ膨滿シ殊ニ肝臟及ビ脾臟ハ肥大ス、之レヲ脾白血病トナス、他ノ場合ニアリテハ多クハ表在淋巴腺、扁桃腺、縱隔膜腺腫起ス、之レヲ淋巴白血病トナス(髓白血病ハ小兒ニ甚ダ稀ナリトス) 疾病ハ殆ンド常ニ慢性ニ經過ス、規則上症候ハ次第ニ不良トナリ、足、手及ビ顔面ノ浮腫、腹水、屢鼻、口、腸ノ出血、皮膚ノ溢血ヲ來シ或ハ強キ虚脱

脾白血病

淋巴白血病

經過

合併症

或ハ肺水腫又ハ肺就下充血ノ症候ニテ死ス、屢々來ル惡キ合併病ハ毛細氣管枝炎及ビ肺炎ナリ、經過ハ時々急性トナルモノナリ、治療ハ稀ナルモノニシテ、且ツ甚ダ緩慢ナリ 白血病ハ幼兒ニハ稀ナレド後年ニハ間々見ル所ナリ、而シテ原因ハ大人ノ白血病ト同シク不明ニ屬ス

診斷

診斷ハ小兒ノ色澤、上述セシ腫起、及ビ血液ノ試驗ニヨリ行フ可シ 治療法ハ凡テ攝生ヲ整理シ容易ク消化スベキ蛋白ノ他脂肪及ビ含水炭素、生肉、乳汁、卵、豆粉、粥、牛酪、肉羹、蛋白質、白血病乳兒ニハ貧血乳兒ノ食物ニ同シ等ヲ與ヘ、且ツ勉メテ屋外ニ在ラシム可シ 効力アル藥劑ハ鐵ヲ乳酸鐵或ハ沃鐵舍利別トシテ與ヘ、淋巴白血病ニ向テハ「ホールレル」水即チ十年小兒ニハ毎日二回一滴宛與フ可シ

治療法

引用書目

V. Jaksch, Wien, med. Wochenschr. 1889, 22, 23.  
Ortner, Jahrb. f. Kinderthk. 32, Heft 3.  
Birch-Hirschfeld, Gerhardt's Handb. 3, 1.

全身病、白血病

Kating, Amer. med. News, 1895, Nr. 28. Gutmann, Berlin, Klin. Wochenschr. 1891, 46.  
Ueber Pseudoleukämie (Hodgkin's Krankheit), die bei Kindern nicht oft beobachtet wird, siehe Birch-Hirschfeld, a. a. O.

### 第五章 脂肪過多症 Fettsucht.

脂肪過多症

症候

脂肪過多症ハ體ノ健康ヲ害スル程強度ノ脂肪沈着ヲ現ハス疾病ヲ云フ  
症候 疾病ハ一般ニ徐々ニ發生スルモ幼年ノ小兒ニアツテハ大人ヨリモ遙カニ迅速ナルモノナリ、身體ハ肥滿シテ圓キ外形ヲ呈シ、皮膚ハ通例ヨリ緊滿シ、殊ニ上腿、顔面、頸部、手部、足、下腹ノ皮膚ニ於テ然リ之レニ反シテ頭ノ毛髮部、前額、眼瞼、鼻、耳ノ皮膚ハ全ク緊滿ナラザルカ或ハ僅ニ緊滿ス、而シテ體重ハ平均數ヨリ甚ダ重シ、一年小兒ニアリテニ六〇〇〇、〇瓦(ウツメルマン氏)、四年小兒ニアリテハ四一〇〇〇、〇瓦(ケストナル氏)十年小兒ニアリテハ一〇九五〇〇、〇瓦(エッセンマイエル氏)脂肪沈着ノ増加スルニ隨テ全状態ハ遲鈍トナリ、運動怠慢トナル、脂肪過多小兒ノ多クハ顔貌ハ活潑ナル赤色ヲ帶ビ、顔面脈管ハ強ク充血シ、脈

多血性脂肪過多症

貧血性脂肪過多症  
經過

ハ強實、食慾亢進シ、良ク消化ス、而シテ患者ハ怠惰性ニシテ、強筋肉ニ關ラズ運動ヲ行フノ傾向少ナク、容易ク呼吸息迫シ心悸亢進シ、非常ニ容易ク發汗ス、(多血性脂肪過多症)他ノ場合ニハ顔面蒼白、口唇、齒齦、結膜ハ青白色ヲ呈シ、心悸動弱ク、脈ハ小ニシテ弱シ、食慾缺損シ、筋肉弛緩ス、而シテ人事不省ニナリ易ク、常ニ疲勞セル感覺アリ、而シテ容易ク發汗シ、少シノ興奮ニヨリ疲勞ス、血液ハ赤血球ニ乏シ(貧血性脂肪過多症)、脂肪過多症ハ甚ダ慢性ニ經過ス、而シテ多クハ同一ノ症候ヲ呈ス、乳兒ニアリテ已ニ初一年内ニ高點ニ達ス、而シテ第二年ノ間ニ徐々ニ減シテ、二年ノ終リニハ多クハ只ダ僅ニ疾病タルヲ知り得ルノミ、之レ第二年ニハ多ク運動スルト、脂肪多カラザル食物ヲ取ルトニ關係スルヲ疑チ容レズ、然レモ一、二ノ小兒ハ第一年ニ發シタル脂肪過多ヲ、第五年或ハ第七年或ハ尙ホ久シク著明ニ殘留スルヲアリ、又タ甚ダ稀レナレモ此ノ如キ乳兒脂肪過多ノ頑固ニ止マルコトアリ  
第一年ノ後ニ發生シタル脂肪過多ハ多分ハ甚ダ頑固ニシテ、小兒期以



合併症

上ニ達スルヲ甚メ屢々ナリ、而シテ甚メ治癒シ難シ  
 又脂肪過多小兒ハ合併症ヲ發シ易ク、殊ニ急性熱性病ニ罹ルヲ他ノ小  
 兒ヨリモ容易ナリ、此ノ如キ疾病ハ脂肪過多症ニアリテハ屢々孱弱ノ  
 徵候ヲ呈ス、而シテ若シ貧血ト合併スルキハ殊ニ然リ、如此小兒ノ死因ハ、  
 心臟ニ強ク脂肪ヲ増殖シテ、心筋ノ脂肪變性ヲ起スキカ、或ハ貧血性狀  
 態ニアリテ貧血増進シ、腦浮腫ヲ起スキニアリ、乳兒脂肪過多ノ豫後ハ、  
 遺傳素因ナク且ツ貧血ナラザルキハ全ク善良ナリ、後年發生シタル脂  
 肪過多症ノ豫後ハ善良ナラズ、屢々治癒スルヲ能ハズシテ遂ニ合併症  
 ノ爲メニ死スルヲアリ、遺傳素因ヲ有スル脂肪過多症ハ素因ナキモノ  
 ヨリモ豫後不良ナリ

原因

原因 小兒ノ脂肪過多症ノ原因ハ大人ノ脂肪過多症ノ原因ニ同シ、或  
 ハ遺傳素因或ハ一定ノ體質的疾疾病或ハ營養ニヨリ來ル、乳兒多血性脂  
 肪過多ハ殆ンド常ニ蛋白質脂肪及ビ糖ニ富メル乳汁或ハ其代用品糖  
 チ以テ濃厚トナシタル乳汁ヲ以テ營養セラル、モノニ來リ、之レニ反

豫防法

シテ乳兒貧血性脂肪過多症ハ、多分ハ遺傳性素因ト同時ニ、食物ノ蛋白  
 質ニ乏シクシテ含水炭素ニ富ムキニ來ル、多クノ佝僂病小兒ノ脂肪過  
 多症ハ、實ニ蛋白及ビ石灰ニ乏シク、脂肪及ビ含水炭素ニ富ム食物ノ誤  
 解營養ニヨリ該症ヲ起スト明瞭ナリ、成長セル小兒ノ脂肪過多症ハ、規  
 則上遺傳性素因ト、營養過分ナルト、及ビ筋肉系統ノ運動不充分ナルノ  
 結果ヨリ來ル

治療法

豫防法 小兒ノ脂肪過多症ヲ防クニハ、只マ單ニ營養品ノ分量及ビ性  
 質ニ關係スル正規ト、筋肉ノ適當ナル操練トニ注意スルヲ以テ足レリ  
 トス、若シ遺傳性素因アル小兒ニシテ、假令ヒ現在尙ホ病的ト見做シ得  
 ザルモ、脂肪沈着ノ少シク過多ナルヲ發見スルキハ之レガ豫防ノ道ヲ  
 講ズルニ如カズ  
 脂肪過多ノ療法ハ、專ラ食物的ニ在ラザル可カラズ、然レモ疾病ノ原因、  
 及ビ殊ニ疾病ノ狀態多血性或ハ貧血性ニ注意セザル可カラズ、食物若  
 シ脂肪及ビ糖ニ富ムキハ勿論之レヲ減少セザル可カラズ、而シテ小兒

全身病、脂肪過多症

若シ筋ヲ充分運動セシメザルキハ、規則的體操及ビ屋外ノ運動ヲ勉メシムベシ

乳兒ノ多血性脂肪過多症ニアリテ、若シ攝生的缺點ヲ除キタルキハ自然ニ其經過スルヲ待ツベシ、此ノ如キ小兒ノ營養ハ健康兒ニ異ナラズ、然レモ其分量ニ注意セザル可カラズ、即チ脂肪及ビ含水炭素ノ量ハ通例ヨリ減少シ、蛋白質ノ量ハ通例ノ量ヲ用ユ可シ、乳兒貧血性脂肪過多症ハ蛋白質ヲ通例ヨリ増加シ、且ツ消化ヲ容易ナラシメ、脂肪及ビ含水炭素ノ量ヲ通例ヨリ減少セシム可シ、其他又乳酸鐵ヲ與フ、若シ同時ニ佝僂病ノ發生スルキハ、磷酸加爾基ヲ合セ與フ(次章佝僂病ヲ見ヨ)、成長セル小兒ノ脂肪過多ハ大人ト同一方針ニ隨テ治療ス可シ

引用書目

Immermann, Fetsucht in *V. Ziemssen's Handbuch*, XIII, 2.

Neckel, *Handbuch der pathologischen Anatomie*, 1818, S. 121, 122.

Escher mayer, *Tübinger Blätter*, 1815.

### 第六章 佝僂病 Rrachitis

佝僂病

佝僂病(英吉利斯病ツウイウシス)複重關節病ハ只ダ幼年ニ發生シ、而シテ骨組織ノ甚ダシキ増殖ト、不充分ノ化骨ト、及ビ甚シキ骨吸収ニ依リ徵セラル、所ノ全身病ナリ

病理解剖

佝僂病ノ骨ハ、第一ニ異常ニ甚キ血液富饒ヲ以テ特徴トス、殊ニ管骨ノ骨端ニ來リ、又々頭蓋ノ扁平骨ニモ發スルモノナリ、而シテ通常ニ甚シク軟弱ニシテ柔順ナリ、吾人ハ之ヲ精細ニ検査スルキハ、骨ノ發育スル凡テノ場所、即チ長骨ナレバ骨端及ビ表面、扁平骨ナレバ表面ニ骨組織ノ非常ニ多量ニ產生スルヲ認ム、然レモ加爾基鹽ノ沈着不完全ナルヲ以テ、全ク化骨セザルカ、或ハ化骨不充分ニシテ、屢々嶋嶼狀ヲナス、之レニ反シテ骨體形成ハ速カナリ、吾人ハ佝僂病性管骨々端ニ於テ、骨端軟骨トノ平坦ナル限界ナクシテ、軟骨中ニ侵入セル不正ノ鋸齒様ノ表面ヲ認ム、而シテ數多ノ血管ハ軟骨膜ヨリ軟骨中ニ侵入セルヲ見ル、其他骨膜下ニ細胞ニ富ム物質ヲ認ム、然レモ其中ニ不充分ニ化骨セル梁柱ヨリ圍繞セララル、髓腔アリ、之レニヨリ疾病ハ只ダ暫時持續スルモ、佝僂病性骨ハ其固有ノ形狀ニ變化ス

全身病、佝僂病

ル。明瞭ナリ。骨質増加ヲ現ハス、之レ骨細胞ノ産生増進スル故ニシテ、長經増殖ノ減少ヲ現ハスハ其増殖表面ニ化骨セザルカ或ハ只ダ僅ニ化骨ヲ來スノミナルヲ以テナリ、其他骨ハ非常ニ屢々風撓シ、彎曲ヲナス、如何トナレバ上述セル如キ軟弱ナル骨ニ、體重負擔ト筋ノ牽引ト作用スレバナリ、扁平骨ハ圓形線ヲ以テ肥厚ス、然レモ壓迫セラレ、線ハ多少菲薄トナルノミナラズ穿孔スルコトアリ、佝僂病ノ化學的分析ハ加爾基鹽ノ甚シキ減少ト、水分ノ増加ナリ(フホーン、チー、ムセン氏内科各論ヲ看ヨ)、佝僂病ノ治療セル後ハ骨ハ通常ヨリ其量ヲ増加シ、且ツ甚ダシク肥厚ス、此ノ化骨機能ヲ骨變硬及ビ新骨質發生ト名ク、之レ殊ニ著シク頭蓋骨、肋骨、其他肩胛骨ニ來ルモノナリ

症候

症候。佝僂病ハ殆ント常ニ全機關ノ營養障害ト孱弱トノ症候ヲ以テ徐々ニ始マルモノナリ、患兒ハ皮膚蒼白ニシテ怠惰トナリ、消化不良ヲ來シ、屢々先ツ便秘シ、其後下痢シ、發汗多ク、殊ニ頭部ニ然リ、後頭ヲ枕ニ摩擦ス、善ク眠ラズ、或ハ睡眠不安ニシテ、怒リ易シ、而シテ漸次ニ骨ノ

局所症候、頭蓋骨

大頭門

特徴タル變化ヲ發現ス  
 時トシテ最初甚ダ急性ナルコトアリ(只ダ初期ニアツテノミ急性ナルコトアレバ、後ニ至リテハ常ニ必ズ慢性ナリ)即チ下痢、體温高進、脈頻數、關節ノ疼痛、痙攣ヲ來シ、後直ニ佝僂病ノ局所症候ヲ發ス、而シテ第一ニ先ツ頭部ニ現ハル  
 局所症候。(一)頭蓋骨。佝僂病者ノ頭蓋ハ比較的大ニシテ、顛頂骨ハ左右共ニ側方ニ傾斜シ、前頭ハ廣濶トナリ突出ス、大頭門ハ年齢ニ比較シテ廣ク、十五乃至十六ヶ月以後ニ、或ハ屢々第三乃至第四年ニ於テ閉塞シ、甚ダ柔軟ナル骨線ヨリ圍擁セラレ、又兩側ノ顛門ハ非常ニ屢々存在ス、殆ンド常ニ矢狀縫合、三角及ビ冠狀縫合、又タ屢々前額縫合ハ著シク侈開シ、而シテ一般ニ甚ダ柔軟ナル骨線ヨリ圍擁セラレ、後頭部ヲ詳細スルキハ多クハ毛髮發生少ク、毛髮ハ甚ダ柔軟ニシテ短ナリ(摩擦ノ爲メ)注意シテ觸診スルキハ、屢々後頭骨及ビ顛頂骨ノ境界部非常ニ柔軟ニシテ充分ニ壓迫シ得、而シテ小ナル豌豆大ヨリ蠶豆大ニ至ル間隙ヲ

全身病、佝僂病

齒

觸知シ得可シ、此ノ間隙ハ僅ニ一二ナルヲアリ、又タ多數(三拾ニ至ル)現存スルヲアリ(エルゼセル氏頭骨軟化)下顎ハ圓形トナラズシテ弓形平坦トナリ、齒槽突起緣ハ少シク内方ニ向フ、(フライシマン氏)上顎ハ矢狀ニ延長シ、而シテ彼ノ中部ニ於テ著シク凸出ス、而シテ頰骨弓ニ接スル部ニ於テ輕度ノ屈曲ヲ示ス、齒ハ多クノ佝僂病ニアリテハ初年ノ終或ハ尙ホ久ク全ク缺乏ス、或ハ其發生ハ對テサズシテ一個宛發生シ、或ハ又タ著シキ發生間歇時アリ、下顎ニアリテハ切齒直立シ犬齒ハ殆ンド矢狀ニ側面ニ推サル、上顎ニアリテハ中兩切齒ハ少シク側切齒ノ前ニ進ム、齒ノ上部ハ通例汚穢黄色トナリ、加之灰白或ハ褐色ニ染リ、截痕ヲ生シ、而シテ早時ニ朽木様トナリ脆クナル、併シ腐骨ニ非ズ、然レモ亦タ全ク健全ノ齒ヲ生スルヲアリ

胸廓

(二)胸廓 肋骨ノ肋軟骨ト結合スル部分ハ結節狀ニ腫起ス、之ヲ此ノ疾病ノ最初ノ症候トス、然レモ屢々彼レニ先テ胸廓ノ觸診ニヨリ疼痛ヲ來スヲアリ、此ノ腫起ハ暫時經過スルキハ、截レ目ニヨリテ其側部及

脊椎

ビ中部ヲ明カニ區別スルヲ得(肋骨ノ球狀腫起ヲ佝僂病連珠ト名ヅク)胸廓ノ重要ナル畸形ハ、肋骨及ビ胸骨ノ柔軟ナルト横隔膜ノ牽引トノ結果ニ依リ起ルモノトス、而シテ横徑ハ減少シ、縱徑ハ増大シ、胸廓ノ全容積ハ減少ス、疾患高度ニ達スルトキハ胸廓側部ハ横隔膜ノ高サニ於テ著シク陷凹シ、下部ハ肝臟、脾臟、胃ノ上ニ突出シ、前部ハ球根狀ニ前方ニ突出シテ銳角ヲナス(鳩胸)

(三)脊椎 佝僂病ノ脊椎ハ、骨組織ノ増殖ト不完全ノ化骨ニヨリ、小兒骨ノ柔軟ナルモノヨリモ一層柔軟トナリ、患者直坐スルキハ下胸椎ト上腰椎部ニ於テ後方ニ凸隆シテ著シク屈曲ス、第二及ビ第三年ニアリテハ屢々胸椎柱ノ側彎ト腰椎柱ノ前彎ヲ起ス

(四)骨盤 ハ眞徑線減少、薦骨岬ノ突出、横徑ノ増大ヲ示ス

(五)四肢 橈骨、尺骨、脛骨、腓骨ハ、下端ニ於テ球根腫起ヲ示ス、上膊骨ノ上ノ末端モ亦大腿骨ノ如ク腫起ヲ來ス、然レモ輕度ナリ、疾病輕度ナラザルキハ直ニ屈曲ス、上膊骨ハ前側方ニ突隆ヲ向ケ、脛骨及ビ腓骨ハ凸隆ヲ

四肢 骨盤

全身病、佝僂病

其他ノ症候及ヒ合併症

側方或ハ側前方ニ向ケ、尺骨及ヒ橈骨ハ伸展側ニ、上膊骨ハ前方ニ彎曲ス、而シテ屢此ノ骨折ヲ認ム、肩胛骨ハ鈍ニシテ其外縁ハ肥厚シ、履起様トナル、四肢關節ノ韌帶ハ尙僂病的變化ニ侵サル、ニ依リ遲緩ス(尙僂病者ノ骨畸形ノ詳細ナル説明ハカヅウイッ氏ノ小兒病年報第二十三、第二十四及ヒ第二十五卷ニアリ)、此ノ遲緩ノ結果ニ依リ膝外翻、外翻足、擴大ナル膝關節、全關節ノ甚ダ動キ易キヲ見ル

其他ノ徵候 疾病一度發生スルキハ屢々前驅スル所ノ消化障害ハ持續シ、或ハ間歇性ニ來ル、而シテ若シ尙僂病者ニシテ全ク消化ノ良ナルモノアルキハ破格トス、甚ダ屢々又大氣管枝炎及ヒ氣管枝炎ヲ病ム、多クハ慢性ニ經過スルモ屢々急性ニ増進シ、更ニ毛細氣管枝炎及ヒ加答兒性肺炎ニ移行スルノ傾向アリ、又聲門痙攣ハ尙僂病ニ屢々來ル疾病ニシテ、常ニ頭骨軟化ト共ニ來ルモノナリ、之レ又々尙僂病小兒ノ他ノ者ヨリ屢々急痲ヲ發シ易キ所以ナリ

此ノ小兒ハ比較的屢々多發性膿瘍ヲ臀部、背部、上腿後面ノ皮膚ニ發ス、

之レ皮脂腺中ニ化膿性房狀(バクテリア)ノ侵入ヨリ來ル、此膿瘍ハ亦タ第一年ノ他ノ虛弱ナル小兒ニモ認ムルコトアリ

尙僂病者ノ一般外貌ハ蒼白、屢々蠟樣青白色ナリ、然レモ各場合ニ來ルニ非ズ、又尙僂病ニシテ全ク快活ノ顔貌ナルコトアリ、而シテ一般ニ規則上容易ク疾病ニ罹ルモノトス、又々多クノ尙僂病者ハ通例ノ體重増加ヲ遂ゲス、然レモ又々此ノ點ニ於テ破格アリ、異常ニ甚シク體重増加セル尙僂病ハ甚シキ脂肪沈着即チ脂肪過多症ヲ發セルナリ、然レモ尙僂病小兒ニアリテ決シテ著シク發育セル筋肉ヲ有スルヲ見ズ、而シテ筋肉ハ一般ニ遲緩シ、殊ニ下肢ニ在テ然リトス、腓腸筋ハ屢々缺乏スル如ク軟弱ナルコトアリ、夫レ故ニ尙僂病者ハ脚力弱クシテ通例ノ時期ニ歩行ヲ始メザルコトアルハ事實ナリ、カヅウイッ氏ハ小兒歩行ヲ學ブノ遲キハ關節ノ韌帶ニ炎症疾患アリテ、其疼痛ノ爲メニ起ルモノトセリ、載テ小兒科年報第二十三卷第三〇四頁ニアリ、尙ホ疾病ノ初期症候ノ一トスル強發汗ハ、疾病中持續シ、而シテ若シ疾病快癒ニ趣クキハ概チ共ニ

全身病、尙僂病

經過

止ムモノナリ  
 經過ハ假令ヒ慢性ナリト雖モ通例不良ナラズ殊ニ正シキ保護ヲ與フルモニ然リ而シテ數月ノ後屢々數年ノ後尙ホ永久ノ後ニ至リ漸次諸症輕快スレバ色澤ハ快活トナリ筋力ハ強大トナリ小兒ハ初メテ起立ヲ行ヒ漸々歩行スルニ至ル而ノ一般ニ運動ニ際シテ歡喜シ消化器障害及ビ胸部加答兒ノ傾向ハ消失ス然レモ筋力ノ年齡ニ適當スルニ至ルマデハ多分ハ尙ホ久時ヲ要スルモノナリ骨疾患甚シカラザルモハ畸形ハ漸次全ク或ハ畧ホ恢復シ疾病ノ著シキ變化ハ概テ漸次ニ退縮ス佝僂病ヲ患フル人ノ身長ハ短ナレモ幅員ハ甚ダ大ニシテ其人ハ方形ナリ四肢骨ニ於テハ胫骨及ビ腓骨ハ非常ニ屢々終身外方ノ凸隆ヲ殘ス(曲脚)而シテ屢々又タ尺骨橈骨大腿骨ハ幾分カ畸形ヲ留ム胸廓及ビ骨盤ハ佝僂病ノ爲ニ得タル形狀ヲ永存スルモノナリ死因ハ常ニ合併症ノ結果ニシテ即チ消化器及ビ呼吸管ノ疾病肺炎聲門痙攣癩痢内臓ノ澱粉變性ニシテ骨疾患ノ爲ニアラズ

死因

豫后

豫後ハ假令ヒ多クハ治愈ニ赴クト雖モ常ニ豫后ノ疑ハシキ合併症ノ發スルヲ以テ決シテ確實ニ佳良ナリト云フヲ得ズ又タ決シテ永存スル結果ヲ豫言スルコト能ハズ然レモ一般ニ初期ヨリ良キ食物の攝生及ビ適當ノ治療ニ依リ保護スル所ノ小兒及ビ疾病ノ初期ヲ第一年ニ於テ認メザル小兒又タ只ダ僅カニ消化障害ヲ起ス所ノ小兒ハ豫後佳良ナルモノナリ若シ聲門痙攣一般痙攣毛細氣管枝炎肺炎吐瀉ヲ起スモノハ豫後不良ナリ此等ノ疾病ハ佝僂病者ニ在テハ非佝僂病者ヨリモ死ニ至ルコト比較的多數ナリトス

診斷

診斷ハ若シモ消化障害ニ兼テ齒ノ發生甚ダ遅ク或ハ甚ダ不正ニ發生スルモ又タハ若シ發生セル齒ノ速ニ變色シ頭部ニ多ク發汗シ同時ニ起立或ハ歩行セザルモ佝僂病ノ疑ヲ起ス可シ而シテ此等ノ症候ニ兼テ肋骨及四肢骨腫起頭蓋骨ノ變化ヲ見認ムルモハ診斷ハ確實ナリ先天性梅毒ニアリテモ亦タ肋骨及ビ長骨ノ骨肥厚ヲ來ス然レモ先天梅毒ニアリテハ常ニ已ニ分娩ト同時ニ認メ且ツ梅毒ノ他ノ確實

全身病、佝僂病

原因

ナル症候アリ、又タ小兒骨軟化症ナルモノ有ルヤ否ヤ疑問ニ屬ス(レ)ン氏小兒科學年報第十六卷第一七〇頁及ヒカヅウイツ氏同卷第四三〇頁ヲ参照セヨ)

原因 佝僂病ハ多クノ場合ニ於テハ加爾基ノ輸送乏シキト及ビ其吸收不充分ヨリ發スルヲ疑フ容レズニ、ホイト氏ハ加爾基ノ除去ニヨリ若キ動物ヲ佝僂病ヲラシメ、ローロフ氏ハ母動物ニ若シ加爾基ニ乏シキ食餌ヲ與フルルキハ其哺乳子ノ半ハ佝僂病ヲ發スルヲ證明セリ

又タ加爾基ニ乏キ食物、小兒粉、穀粉、粥、二度燒麵麩ヲ以テ乳兒ヲ營養スルキハ佝僂病ヲ發シ易キ素因ヲ與フルヲ確實ニシ、實ニ佝僂病ハ乳汁ヨリ穀粉及ビ二度燒麵麩ニ換食スル時期ニ形成スルヲ屢々ナリ、故ニ恐クハ此等ノ食物ノ關係ト、及ビ容易ク消化障害ヲ起シテ加爾基ノ吸收ヲ減少スルノ場合ト、合同作用ニヨリ發スルモノナラン(多クノ佝僂病糞便ハ事實上非常ニ大量ノ加爾基ヲ證明シ得可シバギンスキー氏、ペーテルゼン氏)

然レモ之レヲ以テ全ク佝僂病ヲ説明スルヲ能ハズ、原因ヲ他ニ歸セザル可カラザル所ノ胎兒佝僂病アリ(胎兒佝僂病ハウイルヒヨウ、カソウイツ、ウソル、シニワルツ氏等ヨリ報告セラレタリ)又タ同家族ニ於テ各種ノ營養品(母乳、乳母乳、牛乳)ニヨリ發育セラル、小兒モ悉ク、或ハ殆ント皆佝僂病ヲ病ムニ至ルヲアリ、此ノ兩者ノ原因ハ遺傳ノ如シ、余ハ左ノ如キ佝僂病實驗ノ二場合ヲ證明シ得タリ、即チ一ハ父ノ佝僂病ナリシト、二ハ營養良ナル男子ニシテ佝僂病及ビ聲門癒壅ニ罹レリ而シテ其患兒ノ父モ亦タ一歳ノ時ニ佝僂病及ビ聲門癒壅ヲ病ミタリシモノナリ、而シテ又タ加爾基ノ輸送確ニ減少セズ、消化モ外見上通例ナルニ佝僂病ヲ發スル場合アリ、之レ發育スル骨組織ハ加爾基ヲ取り固着セシムル能力ヲ、或ル原因ニヨリ備ヘザルカ、或ハ消失シタリト説明シ得可シ、カヅウイツ氏ハ說ヲナシテ曰ク、液汁中ニ含有スル、或ル物質アリテ、或ル場所ヲ刺戟シ、茲ニ充血ヲ起シテ炎症疾患ニ陥ラシメ、遂ニ骨ノ肥大ヲ促ガシ且ツ加爾基ノ沈着ヲ障害スルモノナリト、一般ニ液汁ヨリ加

全身病、佝僂病

豫防法

爾基ノ沈着ヲ障害セラル、キハ、尿中ニ加爾基發見セラレザル可カラズ、然ルニ平均上加爾基ハ全ク健康者ヨリ多カラズ只ダ稀レニ僅ニ多キヲアルノミ、然レモ時トシテ又少ナキヲアリ、夫レ故ニ此ノ説ハ明瞭ナラズ

營養ノ種類ハ凡テノ場合ニ於テ確カニ影響アリ、人乳營養ニ依レル小兒ニシテ佝僂病ニ罹ルモノ勿論アレモ、最モ多數ハ人工營養則チ穀粉小兒粉、或ハ著ク砂糖ヲ含有スル煉乳ヲ以テ養ハル、者ニ多シ、此ノ説明ハ已ニ上述セリ、其他濕潤ニシテ光線ニ乏シキ場所、地窖住居、及ヒ皮膚保護ノ不完全、前驅セシ疾病殊ニ消化管ノ加答兒等ハ發生ヲ促カスモノナリ

豫防法及治療法 佝僂病ノ豫防法ハ小兒ノ生理的保護、殊ニ哺乳期間善良ノ營養ニ向テノ注意ナリ、而シテ小兒ノ父母佝僂病ヲ病ミシトアルカ、或ハ已ニ同家族ノ他ノ小兒ノ此ノ疾病ニ罹ルキハ殊ニ注意セザル可カラズ、佝僂病ニ來ル畸形ノ豫防法ハ單一ニシテ、只ダ其機ヲ誤ラ

治療法

ズ且ツ原則ニ從テ治療ヲ施スニアリ

治療法ノ原則ハ攝生法ヲ嚴正ニナスニアリ、之レ無キニ於テハ決シテ佝僂病ヲ治癒セシムルコト能ハズ、食物ハ最モ消化シ易キモノヲ與ヘテ、消化器障害ヲ來シ易キ傾向ヲ可及的遠ザケ、且ツ輕ク鼓舞シ、而シテ同時ニ成長スル身體ニ必要ナル加爾基ヲ送ルベシ、夫レ故ニ乳兒ハ乳房ニテ養ヒ、若シ母或ハ乳母以前ニ佝僂病ヲ病ミシトアレバ之レヲ止メテ人工的營養ヲ行フ、即チ殺菌牛乳ヲ患兒ノ年齢ニ應ジテ清澄ナル大麥粘汁ヲ以テ稀釋シ、或ハ稀釋セズシテ與フ、而シテ自然營養ノ小兒モ人工營養ニ依レルモノモ、共ニ細刻セル贛肉ノ濃厚肉羹汁(凡ソ二五〇〇瓦チ一日ニ用ユ)ヲ與フ、此ノ羹汁ヲ好ソテ取ラザルキハ粘液そつぷヲ以テ之ニ代フ、其他水ヲ以テ稀釋セルトカイエル酒ヲ毎日三回宛與フルヲ必要トス、成長シタル小兒ノ佝僂病者ニハ凡テ乳汁、乳汁そつぷ、蠟乾、薄片、炙肉薄片、卵黃ヲ加ヘタル贛肉羹汁、乳飯、白麵麩、二度燒麵麩(トカイエル)酒、燒肉、裸麥麵麩、裸麥咖啡及ヒ酒ヲ與ヘ、凡テ嚴重ニ甘味ノ物、粗

全身病、佝僂病



製麵麩穀粉食物ノ大量馬鈴薯菜凡テノ酸味アル不熟ノ果實ハ禁ズ可  
 シ  
 患者ノ室ハ廣濶ニシテ明ナルヲ要ス而シテ濕潤ナルベカラズ臥床ニ  
 ハ硬固ナラザル馬毛枕毛製上被可及的馬毛蒲團ヲ具備スベシ浴湯ハ  
 餘リ熱クシテ發汗ヲ助ケシム可カラズ然レモ又タ餘リ寒冷ナラシメ  
 ズ如何トナレバ多クノ佝僂病者ハ貧血ナレバナリ故ニ浴湯ハ一般ニ  
 健康ナル同年小兒ニ用ユルモノヨリ少ク温カナルヲ良トス而シテ  
 入浴ハ毎日ナラズシテ多ク一週ニ三四回之レヲ行フ可シ發汗ノ傾キ  
 アルモハ患者ニハ羊毛布ノ下着ヲ着セシムベシ  
 凡テノ佝僂病者ハ若シ熱性合併症ナク且ツ惡キ氣候ナラサル時ハ屋  
 外ノ滯住ヲ勉メ劇風ヲ避ケタル場所殊ニ夏時ハ海邊或ハ田舎ニ滯在  
 スルヲ利益アリトス  
 藥劑ニ付テハ磷酸加爾基ヲ撰用ス即チ左ノ如シ

處方

磷酸加爾基

各 三〇〇

乳糖

右混和散劑トシ匣中ニ貯ヒ毎日四回一小刀尖宛乳汁中ニ混シ與

フ(一年小兒)

貧血性佝僂病者ニ在リテハ磷酸加爾基ト共ニ容易ク同化ス可キ乳  
 鐵ヲ與フ

處方

磷酸加爾基

三〇〇

磷酸鐵

二〇〇

乳糖

三〇〇

右混和散劑トシ毎日四回一小刀尖宛(一年小兒)

若シ下痢アリテ其排泄セル大便強キ酸性反應ヲ呈スルモ炭酸石灰  
 ナ毎日四回一小刀尖宛與フ此ノ不幸ナル合併症ヲ速ニ消失セシムル  
 良藥ハ之レニ如クモノナシ食慾缺乏ニ向テハビシヨール酒ニ複方規

那丁幾ヲ加入シ、或ハ加入セズシテ與フ

余ハ多ク使用セラル、所ノ肝油ヲ避ケタリ、如何トナレハ容易ク消化不良ヲ起シ、食慾ヲ減損シ、下痢ヲ催セバナリ、一般ニ肝油ヲ用ヰンニハ寒冷時ニ與フ可シ、一兩年前カヅウイツ氏ヨリ佝僂病ノ療法ニ用ヰラレシ所ノ燐ハ、加爾基ヨリ勝レルヤ否ヤニ付テハ未ダ確定セズ、有名ナル諸小兒醫ハ之ヲ無益トナセリ、余ハ數回燐ノ確ニ良効アリシヲ實驗セリ、然レモ注意シテ用ヰルニ係ハラズ屢々食慾ヲ害スルカ、或ハ嘔吐ヲ誘發セリ、而シテ病院ニ於テ用ユレハ自宅治療ニ於ケルヨリモ屢々良ナリ、燐ノ必用ナルモハ次ノ配劑ヲ與フ可シ

處方

〇〇・一

燐

一〇〇・〇

肝油

右溶解シ、毎日一乃至二回一茶匙宛(一乃至二年小兒)

處方

燐

〇〇・一

甘扁桃油

一〇〇・〇

亞刺比亞酸談

五〇

蒸餾水

八〇・〇

單舍利別

五〇

右混和、毎日二回一茶匙宛(モントモルリン氏)

腸○加○答○兒○ノ○存○在○ス○ル○キ○ハ○燐○ハ○必○ズ○禁○止○ス○可○シ○

佝僂病者若シ慢性氣管枝加答流ニ罹ルキハ必ズ常ニ薄キ毛製短表衣ヲ着セシメ、而シテ若シ咳嗽ヲ病ムキハ温乳汁ニエムセル水ヲ加ヘテ用ユ可シ、併發シタル肺炎ハ孱弱ナル小兒ノ肺炎ノ如ク治療ス可シ頭骨軟化ニ向テハ頭部ヲ一ノ梨子狀孔ヲ有スル硬固ナラザル馬毛枕ニ置ク可シ、佝僂病ノ聲門瘰癧ニ向テハ先ツ第一ニ住居變換即チ田舎ニ移居セシメ、而シテ其他聲門瘰癧ニ必用ナル藥劑ヲ與フ可シ、一般瘰癧ニ向テハモントモルリン氏ハ屢々燐ノ甚ダ効アルヲ實驗セリ

強發汗ニ向テハ適當ノ溫度ヲ有スル浴湯、頭部及ヒ頸部ノ冷水洗滌并ニ馬毛枕上ニ置シテ等ヲ以テ最モ利益アリトス  
畸形ハ外科的及ビ矯正的療法ヲ行ハザル可カラズ、而シテ筋力ノ發達スル迄之ヲ施サハル可カラズ

引用書目

Glisson, Tract. de rachitide. 1650.  
Gulrin, Die Rachitis. Uebers. von Heber. 1847.  
Erfasser, Der weiche Hinterkopf. 1848.  
Ritter v. Rittershain, Pathologie und Therapie der Rachitis. 1853.  
Bohn, Jahrb. f. Kinderhk. 1868, S. 194.  
Uriei, Rhach. congen. 1878. Baginsky, Gr. Beitr. zur Kinderhk. II.  
Rehn, Gerhardt's Handb. der Kinderkrankheiten, III, 1.  
Kassowitz, Jahrb. f. Kinderhk. XXII, XXIII, XXIV.  
Oppenheim, Deutsch. Arch. f. Klin. Med. 30, 1 u. 2.  
Först, Jahrb. f. Kinderhk. 19, S. 192.  
Ueber die ital. Institute für Rachitische siehe Uffelmann, D. Viertelj. f. äff. G. 1881.

### 第七章 腺病 Serophulose.

腺病

腺病ハ小兒年齢ニ於テ發生スル全身病ニシテ、身體ノ甚シク疾患ニ罹

リ易キト種々ノ組織即チ淋巴線ノ慢性炎ニ罹リ易キ大ナル傾向ト及ビ結核ニ向テノ大ナル素因アルトニヨリ特徴トセラル

病理解剖

病理解剖 最モ著シキ病理解剖的變化ハ實質増殖、即チ疾病ニ罹レル組織中ニ於テノ細胞元質ノ増加ナリ、疾患暫時繼續スルキハ、屢々以前實質増殖セシ場所ニ於テ乾酪病變及ビ膿瘍ヲ發見シ、又々病的組織中ニ結核菌ヲ認ムルヲ稀レナラズ、結核菌ハ常ニ甚ダ少数ニシテ、現著ナル腺病小兒ノ早時ニ摘出セル多クノ肥大淋巴腺中ニハ見出セザルモノナリ、又々屢々結核菌ハ腺病小兒ノ膿瘍ノ膿汁中ニ混スルコトアリ(ギースレル氏小兒學年報第二十二卷第三九頁)

症候

症候 腺病ハ甚ダ種々ノ局所症候ヲ現ハス、而シテ臨床的現象ハ一般ニ甚ダ特有ナルモノニシテ、即チ次ノ如シ、腺病性小兒ノ一般體質ハ必ず多少ハ健康兒ト異ナル所アリ、一般ニ顔貌ハ少シク病的狀ニシテ、運動活潑ナラズ、而シテ通常忍耐力ニ乏シク、筋肉ハ通例ヨリ弛緩ス、而シテ腺病小兒中顔色蒼白ナラズシテ全ク活潑ナル赤色ヲ呈シ、粘膜モ赤色ヲ

運動性腺病

全身病、腺病

刺衝性腺病

帶ビ、脂肪組織モ能ク發育スレモ、口唇、鼻及ビ頬ハ膨腫ヲ呈シ、性質怠惰ニシテ、精神彈力ニ乏シキモノアリ、又々他ノ場合ニアリテハ身體細長ニシテ羸瘦シ、顔色及ビ粘膜蒼白色ニシテ、皮膚透見シ、精神甚メ過敏ニシテ興奮易ク、且ツ屢々早時ニ精神非常ニ發育スルモノアリ、昔時前種ノ患者ヲ遲鈍性腺病、後種ノ患者ヲ刺衝性腺病ト名ケタリ、然レモ多クノ腺病者ハ兩者ノ症候ヲ混合シテ現ハシ、著シク區別ヲ爲シ能ハザルモノナリ、而シテ唯孱弱ニシテ中等ノ貧血、筋肉薄弱ノミヲ現ハス小兒少ナカラズ

外皮ハ多クノ腺病者ニアリテ最モ疾患ヲ發シ易キ部分ニシテ、即チ慢性濕疹、大膿疱疹及ビ小膿疱疹殆ンド常ニ結核微菌ヨリ來ル所ノ痕癩、慢性苔癬、小瘡瘡ノ形狀ヲ以テ經過スル所ノ多發性膿瘍ヲ生ジ、又々潰瘍ヲ生ズ、其ノ潰瘍ハ初メハ皮下組織ニ徐々ニ發生スル所ノ硬結ニシテ、其縁ハ其周圍ニ向テ皮下ヲ匍匐シ進ム、而シテ常ニ非結核性ナレモ、稀レニ結核菌ヲ含ムアリ、口唇及ビ鼻ノ腫起ハ已ニ上述セシ所ニシ

腺病外皮

腺病ノ粘膜

テ結締織ノ慢性ノ炎症浸潤、及ビ口唇腺ノ實質増殖ニヨリ起ルモノトス、皮下細胞組織ノ寒性膿瘍ハ多クハ皮膚ノ小結節ノ漸次化膿スルニヨリ起ル、然レモ又々他ノ部分例之ハ淋巴線ノ炎症、關節漿液膜炎及ビ骨炎ヨリ移轉シ發生スルアリ

粘膜炎ハ殊ニ鼻及ビ全呼吸管、其他口蓋及ビ食道ノ粘膜ヲ浸シ、慢性加答兒劇性鼻加答兒慢性大氣管枝炎及ビ氣管枝炎、慢性扁桃腺炎及ビ咽頭炎ヲ來ス、屢々又々女子ノ泌尿生殖器粘膜ヲ侵シテ、慢性白帶下ノ原因ヲナスアリ

腺病ノ消化器系

腺病者ノ消化器管ハ疾病ニ罹リ易シトヘーノホ氏ハ主張スレモ、顯著ナラズ、然レモ腺病者若シ胃及ビ腸加答兒ヲ病ムキハ慢性トナルノ傾向アルハ同意ナリ、只メ注目スベキハ腺病者ノ齒ニシテ、殆ント常ニ變化セル珐瑯質ヲ備ヘ、容易ニ破碎スルモノナリ

淋巴腺中最モ多ク腫起スルハ頸下部及ビ項部ノ淋巴腺ニシテ、之レニ次グハ耳後ニアル淋巴腺、頸部殊ニ右側ニ存在セル淋巴腺、腋窩淋巴腺

腺病ノ淋巴腺

全身病、腺病